

猿、月に手を伸ばす

delin

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

猿猴捉月という言葉がある。

意味としては間違った目標に向かってしまい周り毎破滅する、みたいな意味だ。

だが、現実では手を伸ばす先が正解か過ちかなんてやる前にわかるだろうか？

そんなものやって見なければ分からない。

だから、それがどんなに無謀なものに思えてもやり遂げれば真実となるのだ。

だから、俺は今手を伸ばそう。

無謀で無茶で無理なものでもやりたい、叶えたいと心から思ってしまったのだから……。

これは一人の愚か者の物語。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

こちらの作品は小説家になろう様にも投稿しております。

あちらの方が一日早く投稿していく予定です。

<https://ncode.syosetu.com/n5035hp/>

# 目次

## 序章

伸ばした先は | 1

手にしたものは | 12

手にしたものと | 20

猿、魔法を知る | 28

猿、魔法を使う | 36

未来のための修錬と | 44

猿、大きな壁に挑む事を決める | 53

猿、壁は厚いと思い知る | 61

猿、不法侵入する | 70

過ちを犯す | 78

誰にとつても望ましくない結末 | 84

思い知る | 93

独り立ち | 102

## 1章

猿、荒野を超えて | 109

強みで押すのが戦いの基本 | 116

猿、誘いをかける | 125

猿、現状を憂う | 133

集団は率いるものによつていかようにも変わる | 140

猿、強要する | 146

猿、未来を語る | 152

治安を守る者 | 159

猿、後続に道を作る | 166

間違いは、隠れひそみ気づけぬもの	173
知られたくない事ぐらいある	179
迫る魔手	186
思惑	193
死を厭え	201
死と隣り合わせ	208
起死回生	215
別れと旅立ち	222

## 序章

伸ばした先は

それは遠い未来の話。

天幕の中に慌てて報告にくる兵士が一人、相当焦っているらしく天幕前の警備兵を無視して飛び込んできた。

「将軍、敵軍を発見いたしました!」

「そうか。で、数は?」

人間同士の戦に慣れていているわけではないが、訓練をしつかりと受けた兵がここまで慌てるのは尋常ではない。

それでも指揮官たる者、兵に不安を抱かせてはならないと冷静に報告するよう促す。

しかし、その冷静の仮面はあっさり砕けた。

「はっ、およそ五千。当方の十倍はいるかと!」

「「なっ!!」」

「……何を考えているのだ、奴等は!」

「ここは奴等の本拠地から遠いのでは? 大災害が起きても本拠地に影響はない、そうタカを括っているのかもしれませんが」

「残念だがそれはない、この盆地から一番近いのは間違いなく奴等の本拠地だ」

「つまり、起きたとして被害無く鎮める自信がある?」

「間違い無くな。人の命を盾にするような真似をしておつて、あの忌まわしい精霊付きめ!」

この部隊を指揮する将軍はそう吐き捨て遠くの空を睨みつける。

人類の常識を嘲笑い外法を突き進む男、歴史にも類を見ないほどの人類社会に衝撃を与えた者。

「貴様の思惑通りにはいかせん、必ずやその野望を打ち砕いてやる!」

現在の社会秩序に手袋をぶつけた者、その名は、

「精霊付きサルーシャ!」

これは愚かな男の未来のお話。

\*\*\*\*\*

なんというか、うん、ありふれた展開だな。

お話の中ではという条件が付くが。

どうやら俺は転生したらしい。

目が覚めたら、そこは知らない場所でした。

目が覚める前の最後の記憶は確か、近所の飲み屋でしこたま飲んで、金を払い終わって帰ろうとしたところだな。

そして、ふらふらしながら川を見たらそれはそれは大きくきれいな満月が映ってて、あれ欲しいなーなんて思って……どうやら死因「酒に酔って川に転落、溺死」のようだな。

あ、あほだ……水面に映る月に手を伸ばして溺死ってどこのサルだよ、知られたら死ぬほど（死んだんだけど）馬鹿にされるな。

まあ、何で川に落ちたかまではばれないからその点は大丈夫だろうが。

で、今日の前には喜びだか誇らしさだかでくしゃくしゃな顔をした二十前半ぐらいの青年や汗だくで温かい目をしてる四十から五十ぐらいのおばさんが、どーみても現代じゃ見かけない中世風の服装でしゃべっているわけで、何より自分がいまそのおばさんに抱えられているわけで。

どう考えても赤ん坊になっています。本当にありがとうございます。

ついさつきまで暗くて狭いところでいたもんだから、いきなり明るいところに出たんで、びっくりして声を上げたらぜんぜんうまくしゃべれなくて、出てくる言葉が「おぎやあ、おぎやあ！」だもんな。びっくりしたわ。

まあ、おかげで変な赤ん坊には見られてないみたいだから良しとしよう。

「ありがたいなレティーシャ、元気な俺たちの子供を生んでくれて」  
「サルバンこそ産むまでの間ずっと手を握っててくれてありがとう。  
とつても心強かったわ。……手、痛くない？」

「このぐらいい、お前の痛みに比べたらどうってことないさ。本当にありがとうな」

「サルバン……」

「レティーシャ……」

「はいはい、いちやつくのもいいけど早くこの子に名前をつけてあげな！」

いきなり、今生での両親のラブシーンを見せ付けられそうになりました。

前世では魔法使い通り越して妖精になってしまった自分にはきつかいです。おばさんグツジョブ！

「ほら、早く抱いて上げな！今日から親父になるんだからね！しっかりしなよ！」

「すみませんモーラさん。……ほーら始めまして、俺がお前のおとうさんだ」

ゆっくりととても大切そうに俺を受け取った今生での親父さんは俺の両脇を抱えて持ち上げるとやさしい声で新たな俺の名を告げた。

「お前の名前は俺たちから半分ずつとつてサルーシャ。元気に育つてくれよ」

ちなみにここまでの会話さっぱりわかっていなくて聞き取れたのが名前の部分のみなのだ。

なのでそのときこんなことを思ってしまった俺を許して欲しい。  
だれが猿か!!

これが猿山門司40歳改めサルーシャ0歳の始まりの日です……

生まれてから4年半がたちました。

言葉って一年間毎日聞いてれば覚えるものですね。

今じゃあ普通に会話ができます。

まあ、まだ舌つ足らずなしやべり方なのですが大人の人たちにびつ

くりされるぐらいしやべれてます。

村はだいぶ豊かなところらしくあまりお腹をすかせていることはありません。

なのですくすくと成長中です。

「ごらー！ まちなさーい！」

かれこれ、十分近く母から逃げ続けられるぐらいには。

「レティーシャちゃん、今日はサル坊にしたのー」

「火打ち石を持ち出そうとしたのー！」

「がんばって捕まえなよー」

「ありがとー！」

後ろで母が田んぼの手入れ中のおばさんと話してましたが、今回は持ち出そうとしたわけではありません。

……ええ、今回は。

「火打ち石は危ないから外に持ってこうとしちゃだめって、この間もいったでしょー！」

持ち出そうとしたのではなく使い方を知ろうとただけです。

そのために触っていたところを母に見つかり今に至るといいうわけです。

もうすぐ森で入ってしまえば逃げ切れる……ところで体をひよいと持ち上げられ、

「ごーら、レティーシャ母さんを困らせちゃダメだっていつも言っているだろ」

父さんの登場である。

「サルバン、ありがとう。もう、火は危ないってこの間も言ったのに！」

捕まってしまったし悪いとも思っているのでここは素直に謝るところにする。

「ごめんなさい」

ここで心のそこからすまなそうにするのがポイントなのです。

そうすれば、

「母さんもその辺にしといてあげなよ。大分反省しているみたいだし



さ」

「もう、父さんはいつもサルーシヤに甘いんだから」

このように許してもらえてるってわけです。

「……だけどサルーシヤ、今朝言った事は忘れてたね」

はて？ 今朝言われた事？

記憶をさらってみると、確か朝食中に何か言われたような……

「あ」

「思い出してくれたかな、数日は森に入らないようにって言った事」

この村では度々こういうことがある。

大体月に1〜2回程度だろうか、一日から数日にかけて森に入らないように言われるのだ。

なぜかはまだ知らないが、大人は全員知っているようなのでそのうち教えてもらえるだろう。

それより今は……

「あうあうあううう」

「ダメって言われたときは森には絶対に入らない！ しっかり覚えておきなさい！」

父さんからのしっつけの拳骨の痛みに耐えるのが先である。

この村は生まれる前までに想像していた中世風ファンタジーの村とはかなり違う。

具体例の一つは文字の読み書き計算を子供に教える青空学校みたいな場所があることだ。

計算速度では一番になれたが、文字の読み書きが遅くて毎回一番最後です。

一番最後だが幼稚園の読み聞かせレベルだからまだ落ちこぼれじゃない。

それはまあ、慣れればどうにかかなりそうな気がするのでもいいのだが、

「それじゃあ、魔力を感じるための瞑想を始めるよ」

これが本当にダメ！

体の中の魔力ってなに？ 動かさせて言われても全く分かんないんだけど!?

教師のモルモンおばあさん！ 全く分かりません!!

「サルーシャ、あんた全く魔力動いてないよ。いいから目を閉じて体の中にある熱いものを感じるんだよ」

体内の熱いものって血液か内臓じゃねえの？

「まあたさっぱりわからないって顔してんじゃないよ。今あんたの周りに魔力を流してやってるだろ、それと同じもんを自分の中で見つけりゃいいのさ」

「感じられる気温は全く変化ないのですが」

「おしゃべりする暇あったらとつと目を閉じて自分の中に集中しな！ 後、外の魔力が熱くないのなんて当たり前だろ！」

口開かないと疑問点聞けないじゃんと思いつながら、叩かれた頭の痛みから気をそらすべく自分のへそあたりに意識を持っていく。

「いいかい、あんたと同じように習ってた連中はみんなもう次に進んでるんだからね。さつさと魔力を感じられるようにするんだよ」

この授業かれこれもう半年ほど続いています。が瞑想しているのすでに自分だけになっています。

早い子なんて3日目にはできていたし、一番遅い子でも一か月前には次に進んでいます。

「はあ……、あたしは他の子の面倒を見てくるから、魔力を感じられるか時間になるまで瞑想してな」

そう言つてモルモンおばあさんは言つてしまった。

もちろん残された俺はそのまま、結局今日も時間になつても魔力とやらはわからないままであつた……。

「てなわけで、今日もさっぱりわかんなかったんだよ」

夕飯が終わつた後の団欒の時間の中で思わずそう愚痴る。

「というか四歳児に勉強詰め込むか？ 勉強させるならもう少し育つてからだと思うんだが……」

「それは仕方ないよ、サルーシャは村で一番年下だからね。むしろ計

算が一番な事を自慢していいんだよ?」

「それはそれ、できないってのが悔しいの」

「意地っ張りねえ、誰に似たのかしら?」

「それはレテイ……いや、そこはどうでもいいよね、うん。いいかいサルーシヤ、先ずはモルモンさんが教えてくれた事を思い返してごらん?」

「ああ、最初に習った奴?」

「そうそう、一番大事なのは最初に言っているらしいから、よく思い出すといいよ」

一番最初に言ったことかあ、確かこの世界では全ての物に魔力が宿っている、だっけ。

自分の中にある魔力も外にある魔力も同じもの、だからどちらからでも感じ取ればいい。

なので考えすぎずに感じる、だったかな? いや、何か一番重要だとか言ってた事無かったっけ?

覚えてないけど、感じられない原因と関係あったっけ?

うん、覚えてないけど多分ないな! あつたら何回も言うだろ、多分、つまり関係ないという事だ。

「いや、だからその感じ取る方法が知りたいんだよ父さん。父さん母さんはどうやって感じ取ったのさ」

そういうと困ったように顔を見合わせる両親。

どうしようか? どうしようかしらね? なんて目で会話してないでどうやって感じとったか教えてほしい。

「サルーシヤなら大丈夫かなあ、いいかい? これを聞いても大人達を馬鹿にしちゃダメだし、うっかり遊び仲間に喋ってもダメだからね?」

少し真剣味を増し気味にして話す父に姿勢を正す、なにか重要な事を伝えるつもりのようなだ。

「実はだね、村の大人達は、みんな魔力を感じれないんだ」

「え?」

ちよつと? どういうことですか?

「魔法を使うには訓練が必要なんだ、これは分かるね？」

そりゃそうじゃなきゃ訓練を受けさせたりはしないだろう。

って、つまりはそういう事？

「この村ができてまだ十年ぐらいだからなあ、御領主様の命令で子供に勉強させるのだってこの村ができてからだ。

つまり、他から来た父さん達は読み書きも魔法もできない訳だ」

はっはっはとアメリカンに笑う父に、いや笑うこっちゃんいだらうというツツコミをするのを堪えるのにっぱいっばいっばいな自分であつた。

後、読み書きだけは覚えるようにと村長から通達はされてたらしく、気づいたら読み書きはできるようになってた両親である。

今日は週一度の休息日、村の皆揃って教会に来ております。

なんでもこの教えの開祖が休みを入れた方が良いからと、7日に一度は休みと決めたそう。

他にも色々とやった人みたいで、今もその人のエピソードを他の子供達と一緒に聞かされている。

「それはそれは大きな大きな津波でした、まるで山が迫りくるような水の壁を見た人々は思わずその場にへたり込んでしまいます。

そんな人々を守るためアーク様はその力をふるわれました。

アーク様が地に手をつき『壁よあれ』と言われると、みるみるうちに大きな大きな壁が伸び上がっていきます。

見上げるほどの大きさになった壁は見事に津波を押しとどめ、そうして漁村の人々は救われたのです」

周りの子供達から歓声が上がると、スツゲーだとか、さすがアーク様だとか口々に言うみんなとは違い自分にはちよつと疑問が浮かぶ。

「シスター、質問です」

「はい、なんですかサルーシャ君」

「壁だけで津波って防げるんですか？ 川に石を置いてても水が横や上を越してくだけで止められないんですけど」

我ながら可愛くないガキだと思いがそんなにうまくいくもんなの

か、話を盛りすぎじゃないのかって思ってしまったんだから仕方ない。

そんなこまっしやくくれた態度をとるガキに対してもシスターは優しく対応してくれた。

「いい質問ですね、けれど続きの中にその答えがありますのでちよつと待つてくださいね。」

そうして救われた漁村でしたが海の様子が一変している事に人々は気づきません。

『アーク様、海の色が変わっております。先程までは水底が見えていたのに、今では見通せぬほどに深い蒼に染まっております』

『皆を救うため、壁を生み出すのに海底の下の土を動かしたからだ。また、押し寄せる水を受け止める場所も必要であった。故に水底は深く遠くなっている、皆の暮らしは変わらざるを得ないだろう』

その言葉通り漁村の人達の生活はその日から随分と様変わりしてしまいました。

海へ出て魚を獲る生活から様々な場所から人が集まる港町へと変わっていったのです。

初めは変わってしまった生活に戸惑っていた人々でしたが皆の頑張りとおアーク様達の手助けによって豊かな生活を送れるようになったのでした。

また、この時の御経験からおアーク様は災害に備える事の大切さをよく説かれるようになったそうです」

それでこのお話が終わったのだろう、手元の本を閉じるシスター。「ちなみにこの港町は今も存在していて、このお話通り深い蒼の海は素晴らしい景色だそうですよ」

周辺地形丸ごと変えられるほどの力があるのか、魔法には。

うーん、魔力を感じ取れなくてもいいかなって思った時もあるけど……やっぱり頑張ってる覚えよう。

「頭良さげな事言うけどサルーシャってけっこーバカだよな」

「ホントホント」

「こら！ お友達を馬鹿にしちゃいけません！」

「わー、シスターが怒ったー。につげろー」

うん、魔力を感じ取れない事でバカにされるのが悔しいという訳ではない。

……ホントだよ？

この世の中の物全てには魔力が宿っている、しかしその量は一定ではない。

例外はあるようだが大体、大型動物>>小型動物>>大型植物>>小型植物>>虫>>無生物>>空気の順で内包魔力量が多いらしい。

だから里によっては馬や牛に乗っけて魔力を感じる訓練をする所もあるそうなの。

まあこの村では馬や牛をそんな事に使うほど余裕はない。

豊かな村ではあるが、子供一人のためだけに大事な労働力を独占させられる訳はないって事である。

なので自分は考えました、馬や牛の代わりが在ればいいじゃないと。

植物にも虫にも魔力あるんなら代役いけると思ったので、今、森の中にいます。

なに、この頃は森に入っちゃいけないとは言われていないし、暗くなる前に帰ればなんの問題もないだろう。

という訳で寝っ転がって自分の内側に意識向けまーす。  
ただの昼寝と化す気しかないけどな！

案の定眠っていたようで、ようやく目覚めた時一番に感じたのは閉じた瞼越しの光だった。

まさか朝まで寝ていた訳はないだろうと思い、目をゆっくりと開ける。

<あ、動いた>

そこにあっただのは丸い月、キラキラと輝く大きなお月様。

<ねえねえ、貴方はヒトだよな？ お願いがあるんだけど……>

無意識のうちにそれに手を伸ばし、

くあ、受け入れてくれるんだ。よかった＞

伸ばした手から自分の中にそれは入り込んできた。

……呆れられるだろうが、その時自分はこう思ったんだ。

『俺は月をこの手にできたんだ』

厄介極まりない寄生生物に寄生されたくせに、この上ない満足感と達成感に包まれていたのだから度し難い。

だって仕方ないだろう？ 夢で魔力を最初に習ったことを思い出していたんだから。

魔力とは『望みをかなえるための力』だっていう事を……。

手にしたものは

<よーし、それじゃ魔力集めに行こっか>

その言葉が中から響いてきたことでようやく意識が覚醒する。

「待て待て待て、なに勝手に他人の体動かしてんだ」

なぜか勝手に動き出そうとしていた足を慌てて止めながら叫ぶ。

<? 受け入れてくれたじゃない?>

「完全に無意識だったよー! てゆーかお前何!?!」

<私? 私はヒトからは精霊<sup>ジン</sup>とか呼ばれているよ>

精霊<sup>ジン</sup>ね、つまり日本語訳すると妖怪って事じゃないか?

「なあ、魔力集めって?」

<?>

自分の中にいるから直接見える訳ではないが、何を聞きたいのか分からず首を捻るような感覚が伝わってくる。

さつき見た姿は球体だったので首はないのであるが。

「だから、魔力集めって奴は何を目的にしてどうやってやるんだ?」

<???>

今度のは、何故そんな事を聞いてくるのか、何故知らないのかという疑問の感じだな。

「あー、いいか? 俺はヒトでお前は精霊<sup>ジン</sup>だ。当たり前がそれぞれ違うんだよ、息をしたり歩いたりする感覚はお前は分からないだろう?」

<確かにそうだね、うん、よく分かったよ。君って説明上手いね!>

「感心するのはいいから質問に答えてくれ」

<くん、そうだねえ……私たちはねえ、肉の体が欲しいの>

「たち? お前みたいなのが他にもいるんだな」

<そう、私たちはずっと彷徨ってるの>

こいつの説明はあっちこっち飛んで分かりづらいものだったが、俺が分かった範囲で話せばこういう事だ。

こいつらは魔力生命体とも言えるべき存在であること、そのため非常に不安定であり記憶が飛ぶのは日常茶飯事、ふと気づけば遙か遠く



にいて季節が変わっていたことすらある。

それを避けるためには安定した肉の体が必要である。

そして、肉の体を得る手段が……

「持っている奴に譲ってもらおう、って事か？」

無意識とはいえとんでもないもんを受け入れてしまったのではと戦慄しながら問いかける。

そしたらポンつとそいつは自分の中から飛び出してしまった。

何事？ とびつくりして固まっているとあちらも慌てた様子で声を上げた。

くわわっ！ 駄目だよ、君が嫌だって思ったら中にいられないんだから！>

今さらだがこれは空気を震わせてるのではないらしい、さっきの声と全く同じ調子で聞こえる。

骨伝導とかだったら離れた状態じゃ聞こえないだろうし、一体どういう仕組みで声を届けているのだろうか。

これだけ簡単に追い出せるのなら、いつの間にか体に乗っ取られていたりとかの危険性はないとみていいだろう。

おろおろした様子で明滅を繰り返すそいつに再度手から伸ばす、主導権をこつちが握れそうなら落ち着かせるためにも中に入れといた方が良い。

<あく良かった、折角のチャンスだったのに台無しになるかと思ったよ>

「安心するのはいいけど、早いとこ肉の体を得る手段の説明をしてくれないか？」

それ次第じゃ再度追い出すことになるしな、確認はしっかりとすべきだ。

<えつとねえ、魔力を沢山集めてくとね、そのうち肉の体に入りきらなくなるの。それでも集めてくともっと入れられる体に魔力が変えてくれるの、その時に私が混ざってあげれば私が好きに使える肉の体が出来上がるの>

「それって元の肉体の持ち主の意識はどうなるんだ？」

<……どうなるんだろ、やり方しか知らないし、やったことないから分かんないや>

やっぱり追い出した方がいいのでは？ 最悪の場合一方的に乗っ取られて終わりだぞ。

いやいや、折角の「月」だぞ、もう少し安全にやれる方法がないか考えてみよう。

聞く限りだと魔力が体を作り変える時に紛れ込んで体の主導権を握る感じか？

「なあ、なんで受け入れられないと体の中に入れてないんだ？」

<？ 体にある魔力に弾かれるからだけど？>

「お前は魔力でできてるんだろ？ なのになんで弾かれるんだ？」

<肉の体の中の魔力はその体の持ち主に従ってるからね、別の意思の元動いている魔力は混ざれないの>

ふーむ、魔力を動かす権利は早い者勝ちって事か。

……もしかして、こういうのならいけるんじゃないか？

「産まれる前の体に入ろうとした事はないのか？ 母親の中に入っていれば産まれる子供に入り込めるんじゃないかと思うんだが」

<……考えたこともない、と思う。別の体を体内に持つてるのは特に私たちの事嫌うから>

「妊娠中の母親はそりゃ嫌うさ、我が子が乗っ取られるのは嫌だろう。でも、最初っからお前を産むってわかっていけばいけるかもしれない」  
そういう記録とか有ればいいんだが、魔力でできてる不安定なこいつらでは難しいか。

<もしかして、できるの？>

「俺は雄だから産むのは無理だなー」

オスとメスの違いからかー、本気で全く知らないんだな。

「俺自身じゃ無理だけど産んでくれる奴を探してやるよ、だから俺に憑いてこないか？」

<そっちの方が簡単なの？>

「時間はかかるだろうけど、他人の体を奪うよりかは受け入れやすいな。人って種族は同族を殺されるのを嫌うもんなんだぜ？」

人の腹から産まれるなら同族になるって認識でいけると思う。  
うちの母さんがダメでも誰かは領いてくれるだろ、最悪俺が成人してから結婚相手に土下座しよう。

<うーん、いつつも邪魔されてばかりだったから、それでいけるならその方がいいかなあ？　ダメだった時でも君がどうにかしてくれるんでしょ？>

「もちろんそのつもりだ。どうだ、この方法を試してみる気になったか？」

<分かった、それでお願いするよ>

よしっ！　思わずガッツポーズを取る俺。

俺はどうしても魔力を感じとって魔法を使いたかったのだ、しかし魔力というモノはさっぱりわからない。

そこでこいつの出番だ、こいつの体が魔力でできてるんだからそれと同じモノを感じればいい。

見えてるそれがあるなら分かりやすさも段違いだろう、そう考えていたからこいつを引き込んだのだ。

実際この少し後、数日後には俺は魔力を感じとり魔法を使えるようになる事ができた。

「それじゃあこれからよろしくな。俺の名前はサルーシャ、お前は？」

<？　……ああ！　個体の識別のためのアレね！　私たちが同じ

場所に二つ以上存在した事ないはずだからそういうの無いの>

「よく分からない生態してるなお前らって。名前無しだとやりづらいから、お前に名前をやろうじゃないか」

月を思わせるこいつの姿、だからそれに関する名前を考えてた。

「……ツクヨ、それが今日からのお前の名前だ」

<ツクヨ……うん、ツクヨ。　今日から私はツクヨ！　よろしくね！>

はしやく声を感じながら、我ながらいい事をしたと自画自賛する。

この後長い付き合いになるツクヨとの始まりは、こんな風に軽い考えで始まったのであった。

その後はもう日も落ちていたため家に帰る事にした。

ところで、小さな子供が夜遅くまで帰らなかったら貴方はどうする？ そうだね、大捜索だね。

ただ、普通の大捜索と少し違う点がありまして……普通は見つかったら子供へのお説教が始まるもんでしよう？

自分は今、兵士さん達に取り囲まれて槍を突きつけられています。

くこいつら、いっつも私の邪魔する奴らだよ！ 吹き飛ばしちやおうよ！ サルーシャがいるから他のヒトはもういいし！>

(ステイ！ 大人しくしてろ！ 俺がどうにかするから動くな！)

両手を上げて無抵抗にされるがままでいますが、俺の中のツクヨがさつきからうるさいです。

ついでにさつきまでわざわざ声に出してましたが、心の中で強く思うだけで中のツクヨに伝わるみたいです。

さつきの光景を誰かに見られなくてよかった、独り言をブツブツ呟くヤベー奴と思われる所でした。

現実逃避気味にそんな事を考えていると、隊長らしい方が前に出てこられた。

「サルーシャ君だね？ 先ずはこれを口にしなさい」

なぜか渡された赤い木の実、訳が分からないが逆らう理由もないため口にする。

「……！」

唐突だが自分は苦党である、しかしこの村では苦い物といえば焦げた物みたいな否食用な物ばかりであった。

食生活から見ても苦い⇨食べられない物というイメージがあるような感じだ。

まあ、酒はあるようなので一概にそうとも言えないだろうが、少なくとも子供に食べさせる物の中にはなかった。

何が言いたいかというと、だ。

「美味いぞー！！」

俺の好みにベストマッチ!! ひたすら苦味一辺倒であるのになぜかコクを感じる。

そうか！ 苦味が強弱つけて何度も舌を叩いているからだな!?

おお、しかも噛んでいくうちに強烈な甘味が……！ いいアクセントになって新鮮な心地で再び苦味を楽しめるう！

飲み込んでしまえばスーッと跡を残さずに去っていく……！ 今生で一番の味だったぜ！

「もう一個！」

「……どうやら、無事なようだ。それは一個だけだよサルーシャ君、それなりに貴重な物だからね」

思わずおかわりをねだると隊長さんだけでなく、周囲の兵士さんたちも明らかにほっとした雰囲気変わった。

今の木の実は一種の魔除けかなにかだったのだろうか？

さつきまでは悲壮感が溢れてたのに、今では九死に一生を得たみたいな安堵感でいっぱいだ。

例えるなら爆弾処理が上手くいった時みたいな感じだ。

「よし、これにて搜索対象の確保及び安全の確認を完了とする。速やかに村へと帰還するぞ！」

「はっ！」

隊列の真ん中、隊長さんと手を繋いで村へと戻る自分。

そういえばなにも言われなかったけどいいのだろうか？

「村へ戻ったら君のご両親からたつぷりお説教をもらうだろうからね、今だけは気楽にしてなさい」

OH……、今この時間はただの執行までの準備時間であったようだ。

<これから嫌な事されるの？ なら、逃げちやえばいいじゃない>  
(逆だ、逆。俺が父さん母さんや村の皆に対して悪い事したんだよ、もうするんじゃないぞって言い聞かされるのさ)

<?>

(お説教とか終わって時間取れるようになったら、人の常識って奴を教えてやるから大人しくしてな)

俺の言葉がさっぱりわからない様子のツクヨに心の中だけで苦笑しながらそう伝える。

ツクヨへの教育は赤子に一から教えるような感じで作る羽目になりそうである、自分だってまだこの世に生まれて五年いってないというのに。

前世があるとはいえ中々大変かもしれない、などと呑気に考えていたのだった。

そして、両親には無茶苦茶泣かれました。

遊びに夢中で遅くなった子を迎える、というより行方不明だった子供が見つかったみたいなき感じ……。

いや、近くの森ってそんな危険地帯だった？ 少なくとも大きい子が大人と一緒に入ってる姿何回も見た記憶があるんだが？

隊長さんに連れて来られた姿見ただけで泣き崩れるって……

「いいかいサルーシャ、あの森にはとつても危険な物があるんだからね」

「えっ？ 大人だったら奥深くまで、子供でも浅い辺りには頻繁に入りしてるよね？」

主に薪拾いだったり森の幸を採るためだったりと目的は多岐にわたる、そんなところに危険生物が？

「月に何日か森に入っちゃいけない時があるだろう？ あれはその危険な物が確認されたからなんだ」

考えてみれば当然か、危険生物が確認されたなら立ち入り禁止にもなる。

「だけど森の恵みは村にとつちや生命線だ、数日だけで済まさざるを得ないのだろう。」

「あの、それって、どんな物なの？」

「父さん達も直接見た事はないんだが……、精霊<sup>ジン</sup>って村長は言っていたね」

「こいつかよ！ いや、実はそんなに危険じゃないパターンかもしれない。」

「父さん、その精霊<sup>ジン</sup>ってどんな風に危険なの？」

一縷の望みをかけてツクヨにも心の中で同じ質問をする。

「そうだなあ、……森で赤い木の実を食べさせてもらったろう？ それがすつごく苦くなるらしいぞ」

父さんはそこまで深刻に考えなくていいよと言いたかったのだろう、実際父さんの言葉ではクスツとなる程度だった。

ただ、俺の反応から実際には命の危険があつたのだと理解したのに気づいてしまったようだ。

隠せなかったのかって？ 正直そんな余裕なかった。

だって仕方ないじゃないか、ツクヨからの返答がやばい物だったんだから。

＜この森ぐらいなら吹き飛ばせるよ？ 生き物を壊した時に近くにいないと魔力を集められないからやらないけど＞

俺がうっかり手を伸ばした物は、ミサイルほどに危ない物でした。

手にしたものと

あの後、顔を真っ青にした俺に驚いた両親に心配されて、一緒にベッドで寝る事になった。

俺を抱きしめる母さんの体が震えていたのはちよつとしたトラウマになりそうである。

父さんは上手く誤魔化せずにごめんなど謝っていた。

今はもう二人とも眠ってしまっている、大事な子供が死ぬかもしれない重圧で疲れ果てていたのだろう。

逆に俺は昼寝を思いつきりしてたせいで今一つ眠れない……いや、誤魔化すのはやめよう。

俺は自分が安易に手を伸ばした物のとんでもなさにビビっている、その危険性にも、だ。

魔力集めとツクヨは言っていたが、その実態が理解できたのだ。

分かりやすく言えば“経験値稼ぎ”だ、ただし、憑依した対象の同族が最大効率になるが。

なぜかって？ 生き物が死ぬとその体内の魔力が外に放出されるのだが、大半は雲散霧消するがわずかな残りの魔力は近くの生物に入る性質がある。

そして、生き物の体内に宿っていたものなら当然同族と一番相性がいいからである。

つまり、精霊<sup>ジン</sup>という種族は、生き物に取り憑くと、同族殺しを大量に行った上で、その体を奪いとる、ヤドリバチも真っ青な寄生生物だった訳だ。

普通ならすぐさま追い出してしまうのが当然だ。

でも、俺はそれをするのを躊躇ってしまった。

まだ魔力を感じとれていないのもある、約束したのもある、裏切られたツクヨがなにをしかすか分からないというのも、ある。

だが、一番の理由はツクヨが肉の体が欲しい理由を語った時の様子だ。

ふと気づいた時、覚えのない場所にいるのはどんなに不安だろうか



？

つい先ほどまで覚えていた事を忘れてしまうのははどれだけ恐ろしい事だろうか？

そして、精霊<sup>ジン</sup>は、

(死なない?)

<そう、私たちは死なないの>

生き物の死の概念を説明していたら『羨ましいな』と言い出して、驚いた俺が聞き出した理由がこれだ。

断片的でどのくらい経ったかも分からないが、ツクヨ達は恐ろしく古い時代から生き続けているらしい。

最も古い記憶を聞く限り、下手をすると生命誕生から少ししたぐらゐから生きている可能性がある。

だって、地上に森とか存在していないとか言い出して……。

生命が海から出てきていない時代かよ、と呆然となっても仕方ないと思う。

永遠に不安定な存在のまま生き続ける、しかもツクヨの無知具合から見て経験を積むという事すら困難な筈だ。

そんなもの、間の開くことのない苦痛、無間地獄となんの違いがあるのか。

もしも人として産まれることができれば、その境遇から逃れられるかもしれない。

そうこぼした時のツクヨの喜びようといったら……。

つまり、俺はすっかりこいつに同情してしまった訳である。

だからこそ、ツクヨの行動をコントロールして、産まれた後も人として生きられるように教育してやらなきゃいけないのだ。

(いいか、俺に黙って勝手な事するんじゃないぞ。お前が人になれるかは今後のお前の行動次第だからな)

<うん！ 何かする時はサルーシャに聞いてからにすればいいんだね?>

齢五年未満で、なにも知らない生き物を人として生きられるようにしなければならぬとは……大きすぎる責任を負ったものである。

それから、ツクヨに人の生き方を教え学ばせる日々が始まった。  
(つつても、俺もまだまだ知らない事ばかりなんだけどな)  
〈そうなんだ?〉

とりあえず、先ずは何を知っていて、何を知らないかを確認すべき  
だと思う。

なのだが、今はツクヨとの会話に集中することはできない。

「サルーシャ、あまり離れちゃだめよ?」

「はい、わかってるよ母さん」

なぜなら母さんの薪拾いのお手伝い中である。

本当なら周囲に誰もいない状況を作りたいのだが、行方不明になり  
かけた子供を次の日すぐに目を離す親は普通じゃないのだ。

なので母さんの近くで薪拾いしながら、心の中だけでツクヨと会話  
するしかない状態である。

〈これって何をしてるの? そこの動かない物の一部を拾ってる  
みたいけど〉

(あれらはまとめて木って呼んでてな、落ちて乾いた奴は火をつける  
元になるんだよ)

〈火を? なんで火をつけるの?〉

暖を取るためだったり、調理のためだったり多岐に渡るんだが  
……どう説明すればいいんだろうか?

言葉の意味から説明しなくちゃいけないだろうからかなり大変だ  
ぞ。

そう思いながら火を使う場面を色々思い浮かべていると、不意にツ  
クヨが声を上げる。

〈こんな風に使うんだ、人ってなんかすごいね〉

(へ?)

〈サルーシャが今色々見せてくれたじゃない。火の熱を利用したり  
光を利用したりって、よく思いついたねえ〉

今俺がしたのは火の利用方を思い浮かべただけなんだが?

〈うん、サルーシャが伝えたいって思った物なら観れるよ、私〉

(なんて便利な。ん？　じゃあ逆もできるはずだよなあ、なのになぜ言葉だけで説明してたんだ？)

<目で見る感覚ってよく分かんないから無理だよ>

(肉体を持ってないんだからそりゃ分かんないか)

そんな風にツクヨと会話しながら薪拾いしてたせいだろう、傍目には気もそぞろだったようだ。

「サルーシャ、今日はもう帰りましようか」

「え？　薪の量いつもより大分少ないけど？」

「大丈夫よ、また明日も集めればいいんだから。さ、帰りましよう？」  
そう言っただけの手をとり、家路へと向かう母さん。

随分と心配させてしまったようだと思ふ。

<このヒトはなんでもう帰るの？　薪の量足りないんじゃないの？>

(母さんの認識だと、昨日の俺は迷子になって夜遅くによく帰れた、そして帰ったら怖い顔の大人に囲まれて、その上命の危険があったと後で気づいたって訳なんだ。

今日森に連れて来たのは、もう迷子にならないよう村の方角の見方を教えておいたためだと思う)

村に住んでいるなら森に入らないって選択は取れないしな、トラウマにならないように早めに印象を塗り替えてあげようって意図もあつたのだろう。

<ふーん、ヒトって色々考えて動いているんだね>

(こういう風に子供のためを思って動けるのが、立派な親って言うのさ)

ツクヨに教えるのが大変とか思ってたけど両親の真似すればいいだけだな、俺は本当に恵まれた環境に生まれたようだ。

サルーシャが母に連れられて森へと入っていた頃、村の中央にある教会の中での事である。

そこにはサルーシャ捜索の指揮をとった隊長と若い副官、この教会の責任者である司祭と子供達の面倒を主にしているシスターの姿が

あった。

「それでは騎士様、サルーシャ君は怪我もなく、精霊付きにもなっていないかったのですね？」

「ええシスター、特におかしな様子もなく、感知器もペデユクラスの実の色も変化はありませんでした。」

念のためにと食べさせましたが美味しいと言ってお代わりまで要求、先ず間違いなく精霊付きにはなっていないでしょう」

恐る恐るといった様子で聞くシスターに朗らかに隊長は答え、その答えに安心したようにシスターは胸を撫で下ろした。

「よかったですねシスター、あのご家族に最良の結果がもたらされたようです。」

我々にとつても村にとつてもですが、お子様の不幸が無かった事が本当に喜ばしい」

「はい、私もそう思います。でも、あの子は頭のいい子ですから、危険な事はしないと生きていたんですが……」

「頭のいい子というのは意外と妙な事をしでかすものなのですよ、大人のように危ない事を危ないと理解している訳ではないですから。」

なまじ考えられる分だけ深く踏み込んでしまい、危ない目に遭ってしまいう事があるのです」

「おや？ 司祭殿は経験がお有りですか？」

「ご容赦ください騎士様、子供の頃の失敗談などこの年で語りたくはないですよ」

混ぜっ返すような隊長の指摘にバツの悪そうな顔で返す司祭、

その気安いやりとりにシスターがクスリと笑う。

ようやくシスターの気負いも抜けたようだ、と司祭と隊長も笑顔を交わし合う。

これでシスターの方はもう大丈夫だろう、司祭は未だに固い表情のままの若い副官に声をかけた。

「さて、お若い騎士様は何かご懸念でも？」

「いえ、そのような物は……」

「そんな顔で言っても説得力がないぞ。ラテベア教との連携は最重要

事項の一つだ、隠せないのなら話すように騎士ドルス」

振り向かないままでの隊長からの叱責に近い一声に若い副官、騎士ドルスの体が強張る。

そして、少しの躊躇いの後懸念を口にした。

「あの場には確かに精霊<sup>ジン</sup>の魔力が残っておりまして、あの子に憑いていないのなら一体どこに行ったのかと」

「最もな懸念だな、お前は近くに足跡のあった猪に憑いたとは思えんか」

「はい、あの場で精霊<sup>ジン</sup>の魔力痕跡は途切れておりました。あの子供が散らしたのでなければ、憑いた以外有り得ない状況です」

副官の疑問に答えるため頭を巡らせる隊長、しかし、その疑問に先に答えたのは司祭であった。

「その、言いづらい事なのですが、お渡しした魔力感知器は欠点があったようなのです」

「欠点？」

「はい、感知範囲が狭い事はお話し済みですな？」

「ええ、確か十歩も離れれば範囲外になってしまふとのことでしたな」

「上側はもつと狭く、成木の半分の高さでも範囲外になる事がある程度で……」

ギョツと思わず司祭の顔を凝視する三人、シスターまで同じ反応をしているという事は彼女は知らなかったであろう。

「それはまた……いつ、判明したのです？」

「私に通達が来たのが今朝で、判明は二日前です。あの子が行方不明になる前にその通達があれば、多少不確かであつてもお伝えしておりました」

隊長が『秘匿していたので?』と言外に尋ねれば即座に司祭は否定した。

それを信じていいかどうか隊長はしばし考える。

ラテベア教と隊長の国、フォルティス国は別組織だ、無条件に信じて頼り切りになるのは彼の立場ではただの怠慢である。

故にこういう場合、虚偽である可能性を疑わなければならない。

虚偽の場合のラテベア教のメリットデメリット、司祭の人格的信頼性、そもそも虚をついたのは司祭かそれともラテベア教自体か……様々な要素を考慮して出した結論は、

「嘘ではなさそうですな、どう考えてもメリットがない」

ため息をつきながら上を向く、役割とはいえ無駄に疑わなければならぬ立場に少々疲労を感じながら。

「精霊は普通でしたら大型動物に憑こうとしますが、小動物に憑く可能性もない訳ではありません。」

魔力痕跡が途切れていた原因も、木の上を通る栗鼠などを追っていったなども考えられますので……」

「私の疑念は、ゼロとは言えないが的外れの可能性が高い、そういう事ですぬね?」

騎士ドルスの言葉に静かに頷く司祭。

「申し訳ありませんでした、どうやら精霊を恐れるあまり無用の疑いをかける所だったようです」

「いえ、こちらこそ申し訳ありません。ラテベア教の信頼が損なわれるのを恐れて秘密裏に交換しておこうとした事が仇になったのでしよう。」

これも私の不徳の致すところ、何重にもお詫び申し上げたい」

「騎士ドルス、あらゆる可能性を疑うのは悪いことではないが……もう少し感情を隠せるようにな。」

おかげで司祭殿が無用の嘘をつく羽目になっているではないか」

互いに頭を下げあう両者に呆れたような声をかけたのは隊長だ、この後謝罪合戦になるのが目に見えていたからである。

隊長の言葉に騎士ドルスは押し黙ったが、司祭はとぼけた顔で心外そうに訊ねる。

「おや、私がどんな嘘を?」

「秘密裏に交換するつもりなどなかったでしょうに、うちの副官を甘やかさんでほしいですな」

「いやいや、そのような事は……」

あくまでシラを切るつもりの司祭に構わず、隊長は振り返って自分

の副官に諭すように語る。

「いいか騎士ドルス、ラテベア教の教えには嘘をついていい時もあるのだぞ」

「隊長、彼らはそのような者達ではありません。」

誠実であり勤勉な信頼すべき方々だと隊長ご自身もおっしゃっていただけではありませんか！」

驚いきのあまり大声を上げる彼に満足気に頷く隊長、ラテベア教と不信による喧嘩別れはなさそうだからである。

「おう、その通りだ。だが、アーク様の言葉の中にあるのだよ『相手の為になる嘘は許される』というのがな」

ジロつと司祭を睨めばすつと目を逸らす、その様子を見てドルスはようやく気づいた。

司祭殿は自分があの子供を無用に傷つけないように、あの子供と自分を守る為に感知器の欠陥を語った事を。

最悪の場合意味なく子供を斬り殺すのを防いでもらった形だ、自分の未熟さに赤面するのを止められない。

「気づいたか？　というか、精霊<sup>ジン</sup>付きになっていたら即座にこちらを殺しに来るだろうに。」

他人を、それも子供を疑いの目で見たりしていたら上の立場になど立てんぞ？」

「まあまあ、そのあたりで。彼も妻が妊娠中で気を張り過ぎていただけでしょう、精霊<sup>ジン</sup>の危険性を考えれば仕方ない事ではないですか」

「だから甘やかさんで下さいと、司祭殿は此奴が孫のような年だから見る目が甘くなりすぎるのです」

「騎士殿こそドルス殿を子供のようにお思いなのでしょう、立派になつてほしいからと無駄に厳しくしては潰れてしまいますよ？」

そこからは何故かドルスをどう導くかで口論に発展してしまい、話し合いとは呼べないものになってしまった。

しかし、ドルスにとってはそれこそが暖かな思い出であり、生涯忘れられぬ後悔の元となるのであった。

## 猿、魔法を知る

ツクヨと出会ってから数日、朝目覚めたら空気から感じる物が変わった。

いや、空気だけじゃない、そこら中の物全てが違う感じがしたのだ。さすがに理解が追いつかず、混乱のまま横で眠っていた母に縋りつく。

「母さん起きて、なんか変、周り中がなんか変だよ！」

「……んんっ、おはようサルーシヤ、どうしたのいったい？」

起き抜けの母に抱きしめられ、優しく撫でられるうちに混乱した頭が落ち着きを取り戻してくる。

身体の中のもののは暖かく、空気中や壁、床などのものは冷めているように感じるそれ。

何より、ツクヨと同じ感じを覚えるこれは……

「これってもしかして……魔力を感じられるようになった？」

「あら、本当？ よかったわ、サルーシヤ気にしていたものね」

意図せずこぼれた呟きに母さんが喜びのあまり俺を抱え上げる。

そのまま父さんの所に運ばれながら、何故いきなり感じとれるようになったのかを考える。

(何かしたか?)

<何もしてないよ? せいぜいサルーシヤの記憶を見せてもらおうとサルーシヤの魔力を動かそうとしてただけ、結局動かなかったけど>

はい、原因が判明しました。

ツクヨが俺の魔力をいじったことで動く感覚を身体が覚え、動かす事ができるなら当然魔力そのものを感じとれる訳だ。

実際今動かす事できるもん……って、それより気になる事があるぞ。

(なあ、魔力をいじって記憶が見れるのか?)

<? だって私が昔を思い出せるんだから当たり前じゃない?

魔力って宿ってたモノの情報を持つてるものだし>



(なるほど、だから同族に宿りやすい訳か。ところで、どこまで見たんだ?)

<全然見れなかった、やっぱり意思あるうちだと情報見たりは無理みたい>

前世まで見られていたら説明が面倒なんだが、そう思っていたが杞憂だったらしい。

(うん? 『意思あるうちは』? って事は出てきた魔力からは可能なのか?)

<そうだけど?>

(目で見る感覚とか引き出せないのか?)

<あくまで主体は私だもん、私自身がわからないものは無理だよ。どれが目で見る感覚でどれが目以外の感覚器のものかわかんないもん>

(ごっちゃになって仕分けできないって事か。後さあ、お前の記憶が曖昧なのって、もしかして魔力に宿った情報のせいだったり?)

ツクヨ達の体は魔力でできている、で、魔力はどこから生まれたのかって話だ。

(お前の話してくれた記憶は魔力に宿ったものかもって思ってた)

<……そっか、私の記憶だって思ってたのは私のじゃないかもしれないなかつたんだ……>

(待て待て待て! どの感覚器か明確に区別できない記憶はお前のだろ! 俺が言いたいのは、お前の生まれた瞬間が確定できるかもって話だ!)

<あ、そっか、その分け方なら区別できるね。……なんの役にたつの、それ?>

うぐ、苦し紛れの言い訳では誤魔化しきれないか?

考えなしに思いつきを伝えるもんじやないな、これがなんの役にたつのか考えなければ……。

そうだ、これなら誤魔化せるぞ!

(始まりが有れば終わりも当然あるものだぜ? つまり、始まりが明確にならないずれ終わりも訪れる。終わりが来ないなんて落ち込む必

要はないって事さ！)

沈黙が訪れる。ダメか？ 考えなしに言いましたって大人しく白状すべきか？

そう思った瞬間、凄まじい勢いで感情をぶつけられた。

<サルーシャ、ありがとう、ありがとうね!! そうだよ、終わらないものなんてないんだよ?! 私達は、おいてかれるだけの存在じゃないんだよ! 本当にありがとう!>

(お、おう、気にすんなよ。たいしたこつちやないさ、こんなの)

まさか、ここまで感激されるとは……、適当な言葉を並べただけっていう事実は一生秘匿しておこう。

父さんに笑顔で報告する母さんに抱えられながらそんな事を思う俺であつた。

「さて、久しぶりの授業を始めるよガキども。とつと座って静かにしな!」

はい、とそろって返事をする子供達。もちろん俺もその中の一人だ。

今日は帰ってきたモルモン婆の久々の授業だ、そんな日の朝に魔力を感じとれるようになるとは……、ツクヨには感謝すべきだと思う。くもつと大きなものをくれたんだもん、気にしないでいいよ>

(う、うん、でもそれとこれとは別だかな、感謝はさせてくれ)

なんかツクヨのレスポンスが早くなっている気がする、多分ツクヨの意識が俺に向く率が上がっているのだろう。

無知な子供を騙くらかして利用しようとしているみたいで心苦しい……。

「始める前に……、サルーシャ! ちよいとこつちきな!」

おおっと呼ばれてしまった、これは勝手に森に入つて夜遅くまで寝てたお叱りをもらうな。

そう思ったのでなるべくかしまり、殊勝に見える態度で婆の前まで行く。

前まで行けば婆の眉間に寄っている皺がよく見える、これは相当き

てるなど長いお説教を覚悟する。

しかし、俺の予想は大外れであった。

「大変な時にいれなくて悪かったね、怖かったろうに、よく頑張ったよ」

そう言つて頭をゆっくり撫でてくる婆、不覚にも泣きそうになつてしまった。

「あんた達も、サルーシヤを揶揄い過ぎんじゃないよ。そのせいでこの子は森に一人で入つて行つたんだからね」

はいとまたそろつて返事をした後、口々に俺に謝つてくるみんな。

ちよつと本気で泣きそうだ、うん、だとか、気にしてないよ、だとか返すたびに前世との違いに戸惑つてしまう。

いや、前世の環境が特別酷いわけではなかったはずなんだが、今の環境が特別良い環境なのだろうか？

比較材料がないからわからないのだが、とりあえず、この村にいつか恩返しはしなければならぬだろう。

「はいはい、そんなもんで十分だろ。今度こそ授業を始めるよ、全員もう一回座んな」

パンパンと手を叩いて促す婆に従い皆が席に着く、少々脱線したが今日の授業の始まりである。

「んじゃあ先ずは宿題だった魔力を動かす事の結果を聞こうかい」  
なぬ？ 魔力を動かすのが宿題？

「この動かす感覚だけは各自で掴むしかないからね、しっかりやつてきただろうね？ これをサボつてたら魔法を使うのなんて夢のまた夢だよ」

どうやら結構難関らしく、できたと言つてる子は二、三人程度。  
その子達にしたつて自信なさげか、もしくは自慢気に胸を張つている……。

つまり、魔力を動かす事が自慢できるような事、なのだろう。

さつき動かしてみた時には手や足、いや、息を吸うレベルでできたんだけど俺。

(ツクヨが動かした時にそのあたりの感覚まで移ったとか?)

<魔力が混ざんない限り無理だと思うよ?>

とりあえずツクヨのせいではないようだ。

自分だけで考えてわからない時は聞くに限る、早速手を上げて婆に質問がある意を伝える。

「はいはいサルーシャ、あんたは先に魔力を感じとれるようにね……」

「婆、俺今朝感じとれるようになりました。そんで動かすのもできま  
す」

周りの皆が驚いて俺を見るが、婆はほうと感心、いや、あれはやつぱりなという響きだ。

「サルーシャ、あんた森で迷子になった日から今日まで両親と一緒に寝てただろ」

「はい、そうです」

やっぱりねえ、と言った後何やら呟き始める婆。

漏れ聞こえる言葉は『両親の愛情いやもつと単純に魔力に……』だとか『論文の通り? いや他の子との差異をもつと明確に……』だとかで自分の世界に入ってしまった感がある。

だけどそのままでは困るのでこっちから声をかけた。

「婆? 俺って変なの?」

「ん? ああ、そういうわけじゃないよ、あんたが感じとれてすぐ動かせるようになったのは不思議でもなんでもないさ。

感じとれるのに時間かかった奴は逆に動かせるようになるのは早  
いし、感じとれるのが早かった奴ほど動かすのに時間かかるもんだか  
らね。

細かい理屈まではあんた達にや難しいだろうから説明はしないが  
ね」

そういうものなのか。

「それより、サルーシャも魔力感じとれるようになったのなら話さな  
きやいけないね。

全員に絶対覚えてもらわなきゃいけない事があるから、しっかり聞  
いて覚えるように!」

その時のモルモン婆の真剣さはそれまで子供達には見せた事のないもので、皆も俺も釣られるように本気で聞こうと婆の話に集中する。

子供達の聞く態勢が整ったのを見て婆は一つ頷き話し始めた。

「感じとれるようになったのならわかるはずだね、一人一人の魔力量が違う事、特にアタシとの違いが」

確かにわかるがそれは大人と子供の差、俺達が成長すれば埋まるものではないのだろうか？

「あんた達も大きくなったり体を鍛えりや魔力量は確実に増える、上手くすりゃあ宮廷に仕えるまでいけるかもしれない。けどね、それだけじゃアタシの領域までは絶対に無理だ」

ああ、魔力の増やし方を教えようとしているのか。

もうすでに俺は知ってるけど知ってたことがばれないようにしなきゃな、誰に聞いたかなんて言えるわけないし。

「魔力を増やすには二つの方法がある、一つはさつきも言った体を大きくすること。もう一つは他からもらうこと、そして、魔力をもらう方法とは……」

ごくりと誰かが息をのむ、婆の雰囲気怖いぐらいに真剣そのものだからだ。

「……生き物が命を落とすその時に近くにいることさ」

うん、だよなあ。

魔力の性質をツクヨから聞いたから知ってる、正直自分の手で殺す必要があつたりするのかなあとか考えてたからマシかなって思う。

が、周りの子供達は違つたらしい。

いや、事前情報があつたんだから違うのは当然なんだが……。

「うええええ……」

「嘘お……」

「俺絶対ヤダよ！」

完全拒否まで行くのはちよつと想像の埒外だ。

表面上は俺も驚いて見せているが、泣くほどいやか？

そりゃトドメを刺さなきゃいけないとかならわかるが、死を看取る

だけならセーフじゃね？

しかし婆はさもありませんと頷くだけだ、子供達のこの反応は予想通りらしい。

「あんた達が嫌がるのもわかるよ、大人だって嫌なもんだからね。アタシだって必要じゃなかったらやんなかったさ」

婆自身も嫌だったのか……：そういうえば教会で聞くお話しって何かを退治するみたいな物全然なかったな。

もしかして、死を忌避する文化ができているんだろうか？

「だけどね、やらなかったら魔力が足りないって事も起きる。

明日っから魔法の使い方と一緒にやってみせてくからね、しっかり覚悟決めときな！」

みんなとても嫌そうだ、あんなに魔法の使い方を教えてもらうのを楽しみにしてたのにテンションが葬式みたいになってる。

「サルーシャ、あんた意外と平気そうだね」

おっと、周りの状態から浮いてたか。

みんなの反応が今ひとつ理解できないんだよな、だって、

「いつも食べてるお肉とかは猟師さんが獲ってきてくれる物ですよね？ いくつかは俺らがやる事になると思ってたので、騒ぐことじゃないかなあ、と」

これは偽りない本音だ、だが時と場合を考えるべきであった。

「……お、俺だって大丈夫さ！」

「僕も、平気だよ！」

自分がこの中で一番年下である事を忘れていた、この年頃の男の子がかっこ悪いことをどれだけ嫌うかを忘れていた。

そして、周りがこう言い出せば年上のまとめ役に近い女の子だつて、

「私だって平気よ！ 男の子なんかには負けれないもの！」

こうなるし、そうなれば大人しめの子だって、

「私も、年下の子が頑張ろうとしてるのに、負けれない……！」  
こうなる。

「そうだ！ 今から行こうぜ！ 俺、死にそんな鳥来る時に見たんだ

！」

さらに間が悪い事にそんな珍しい物を見た奴がいたりすると、

「マジかよ！ 行く行く！」

「みんなも行くうぜ！」

「おー!!」

勢いのまま授業の事が頭から吹っ飛ぶと。

これ俺のせいかなあ？ まあ俺が悪いんでなくても発言には気をつけるべきだった。

だって、目の前で授業放棄をしようされてる婆の目が段々と吊り上がっていつてるし……

「あんた達い……いい加減におし!!」

案の定本日最大級の雷が落ちて、しばらくの間みんな行動不能と相成りました。

俺にできたのは事前に自分の耳をそっと塞ぐことだけであった。

## 猿、魔法を使う

婆の雷が落ちた後、みんなが授業を受ける態勢になったのはたつぷり二十分以上も経ってからだった。

もちろん全員頭にいい一撃をもらった上で、がつつりとお説教食らったからである。

尚全員の中には俺自身も含む。

「婆、やっぱり授業放棄しようとしてない俺が殴られるのは納得いかないです」

「うるさいね！ 連帯責任、森で迷子になった件、他の奴らから不公平とか言われないうちに、好きな理由で飲み込みな！」

「理不尽な！」

「だからなんだい！ 集団で起こした問題で一人だけ逃げられるなんて思うのは甘いんだよ！」

くそう、こつそり逃げ出そうとしてたの気づかれてたか？ バレたらみんなに恨まれそうで中止したし、気づかれてないと思うのだが。

「ごめんなサルーシャ、巻き込んだしまった」

「うん？ 別にいいよ、婆のお説教中はどうせ何かできるわけじゃないし」

「それでもお説教受ける必要はなかったろ？ だから、ごめん」

口で言うほど理不尽とは思ってないのでそこまで謝られると逆に気まずいんだが……。

そんな様子を見て満足気に頷く婆、頷いた後改めて真面目な話を始めた。

「いいかい、あんたらは自分達がやろうとしていた事がどれだけ危ない事か知らないんだよ。

プルシデインス・ヴィータを引き起こしかねない行動だったんだからね」

プル……？ なんだって？

「あんた達が死つてもんに忌避感を持つてるのは正しい、そうなるよ。教えてきたわけだからね。まあ一人変な奴がいるのは置いとくけ



ど」

さて、いったい誰の事かなー？ 思いつきり俺を見てるけど、別に悪いことしたわけじゃないからすつとぼけるのが一番だ。

「魔力を多く持つたためには生き物が死ぬのを見届けなきゃいけない、だけどそれをやりすぎるとさつき言ったプルシデインス・ヴィータを引き起こすんだよ」

そこからの説明は概ねツクヨから聞いたものと同じであった。

どうやるのかの説明は同じで起きる現象についてもほぼ変わらぬ物。

ただ、そのあとの話が強烈であった。

「大量殺戮!？」

「そうだよ、プルシデインス・ヴィータの後には大量殺戮を繰り返す奴が残るのさ」

曰く豊かな森が一昼夜で荒野と化した、曰く大きな湖がただの窪地になった、曰く大きな都市がただの瓦礫の山になった、等々どうやらとんでもない被害を幾度となく起こした原因であるらしい。

(また精霊<sup>ツン</sup>を人に産み直してくれる人が見つけにくい理由が出てきたなあ)

<なんか、ごめん?>

(まあ、いまさらって感じだし、魔力集めをやり切れた記憶もないんだろ? なら責めるのはお門違いってやつさ)

正直俺にとっては知ってたことをもう一度聞かされただけ、って印象で特に気になる話でもなかった。

それよりもこの後の魔法を実際に使ってみる授業のほうが気になつて仕方なかったし。

ただ、コレがあるなら大軍同士の戦争は起きにくいだろうな。

うっかり大量の死者が出たら、その戦場に地獄が現れるわけだしなあ。

「魔力の増やし方、やりすぎの危うさはわかったね? 次はお待ちかねの魔法の使い方だよ!」

わつと歓声が上がった、というか上げた。

< なんかはしやいでるね? >

(当たり前だろ? 魔法だぞ、魔法。憧れてたそれをできるようになるんだ、はしやがなきゃ嘘だろ!)

俺と周りのテンションの上がりようにツクヨは理解が追いつかないらしい。

ツクヨからすれば出来て当然な事だから理解できなくても仕方ない、俺らで例えれば呼吸できる事でテンション上がる奴を見せられるようなものだろう。

「はいはい楽しみだつたのはわかるから婆に説明をさせな。魔力を動かす感覚は覚えているね、その時に動けつてイメージを持ってたろうからそれを風よ吹けつてイメージでやってみな」

婆の指示に従って思い思いに皆風を起こす。

意外と難しくないな、あつさり手の先から出ていく風の流れを感じながら思う。

< 空気は魔力をあんまり含んでないから動かしやすいの、水とかだつたらもう少し難しいと思うよ? >

(水のが魔力を多く含んでるのか。土とか木はどうなんだ?)

< 水より土のが難しいよ。後、乾いた木なら土と同じくらいだけど、生きてる木はすつごく難しいね。できないとは言わないけど、魔力をたつくさん使っちゃやうからやろうと思つた事ないなあ >

(無駄遣いを避けたいのか...あれ? 魔力つて使うと無くなるのか?)

< うん、しばらくすると戻るけど >

(どっから?)

< 知らない >

後で婆に聞いたら体力と同じようなものと言われた、魔力を使って失った魔力を戻すのを生き物ならば自然に行っているらしい。

つまり、調子に乗って使いすぎると死ぬわけだな。

後、魔力を早く回復させるには、深呼吸するのが一般的って言うので空気中からも取り込んでるのだろう。

他には魔力を多く含ませた水薬、いわゆるポーションなんかもある

らしい、高いけど。

作り方が難しい上保存も効きづらい、止めに需要はほぼないときた  
らもう仕方なくはある。

待つてりや回復するものにそりや金はかけないわな、あるとしたら  
それを飲まなきや死ぬ状況、使いすぎる可能性がある時のみ。

医療機関とかやらなきや死ぬ緊急時とか、後は

「いいかい、辛いと思っただらすぐに止めるんだよ！　じやなきやくつ  
そ苦い上に高いもん飲ますからね！」

今みたいに調子に乗っちゃいそうな奴がいる時とか。

さすがに興味本位で死にかけになる気はありませんよ？

本当だよ？　苦いと聞いて飲んでみたいとか少ししか思っ  
てないから。

(でも、作り方とか材料ぐらいは知りたいかな)

まあ、今は魔法の習熟のが先だが。

その日はみんなが風を起こせるようになったところで終了、明日は  
実際に使って魔力集めをやるらしい。

風を起こす程度で何ができるのか？　明日にはわかるがみんな不  
安であまり眠れなそうであった。

はい、昨日の不安返してください。

我々は今田んぼの前におります、綺麗な黄金色の稲穂が重そうに首  
を垂れていますね。

「おはようございますモルモンさん、今年はどうとう子供達の実践で  
すか？」

「そうだよ、そろそろアタシも年だからね、やれるところはどんどんや  
らせんとね」

呑気そうな会話を婆とこの田んぼの持ち主であるおじさんがして  
いるのを見ながら、俺達は昨日できるようになった風起こしを次の段  
階に進めるように練習している。

次の段階とは、この風起こしを稲刈りできるぐらいの勢いにするか  
鋭さを上げる事。

ついでに田んぼ周辺の草刈りも兼ねております、効率的ですね！  
子供も労働力つてのはわかるがもうちよつと雰囲気とかをですね  
……具体的には我々を脅した昨日のアレは何だったんだと。

「アレはアレでいいんだよ、あんだけ脅しときややろうなんて考えや  
しないだろ」

一番最初に釘刺ししとくかー、みたいなの？ そんな感じか。

恐怖心を最初に植えつけとけば無茶はしない、という判断だと思う  
から理解できる。

大量殺戮犯なんぞになられたらたまつたもんじゃない、つてのは当  
然だしな。

ちなみに自分は早々に草刈りを成功させて婆の横で待機中である。

何人が成功させたら婆が実際に稲刈りをやるのを見せてもらうん  
だが、かれこれ15分ぐらい待ちぼうけしてます。

「婆、一回やって見せた方がよくない？」

「それだとイメージが固まっちゃうからねえ、やるんだつたらいろん  
なやり方を見せてやらんといかん。アタシだつてそこまで沢山の引  
き出しがあるわけじゃない、だからそれぞれでイメージ掴んでもらわ  
んと」

「でも掴めそうな奴いないよ？」

「むむう……」

このまま待ちぼうけを続けるのかなあ、流石に退屈、つてわけでも  
ないが。

どうせ時間をつぶすならツクヨとの話をしたほうが有意義なん  
だよな、でもあまりそちらに集中してぼろ出すような真似をしたくな  
いし。

「はあ、仕方ない。サルーシヤだけでも先にやらせるかね」

「はーい。あ、そーいやイメージが固まっちゃうとなんか悪いことが  
あるの？」

「風だと草を刈ることしかできない奴が毎回何人か出るらしいんだ  
よ、アタシは直接は知らないけどね」

風で切ることと草刈りが完全にイコールで結ばれちゃうから、とか

かな？

ま、それはいいとして先ずは婆の手本を見させてもらおうとしよう。「それじゃ見てなよ、すぐに同じ真似までは求めないけど、いつかはできるようになるんだよ？」

風で稲刈り、同時に何本かをまとめて縛って外まで出す、出した場所では干し場が組んであつておじさんがそこにかけていつて……効率良すぎない？

え、最終的にここまでやれと？ コンバインじゃん、人間コンバインじゃんこんなの。

いや脱穀と選別とかまではしてないから少し違うけど、ほぼ同じじゃん！

「最初は刈るだけでいいからね。ただ刈った稲を吹き飛ばさんよう気をつけな」

「はい」

婆、すげえ、ちよつと舐めてた。

真面目にやつてこう、魔法の使い方とかよく見て真似すればすつごく勉強になりそうだ。

でも、とりあえず最初はできる事から始めよう、上級者の真似をいきなりするとか失敗するフラグだもんな。

だからまず風で稲刈りから、さつきやった草を刈るのと同じ要領で風の刃をぶつけてみる。

狙い通り最初は一つだけ刈れた、なので次は横一直線にやってみる。

これも成功、放った風の刃は俺のイメージ通りに直線状の稲を刈つて見せた。

「ほう、やるもんだねえ」

婆もおもわず感心するほどの出来、やってやったぜと胸を張る。

「だけど魔法つてのは威力を上げれば上げるほど、射程を伸ばせば伸ばすほど魔力を使うもんなんだよ。だから、自分の限界を理解せずにやるとそうなるんだよ？」

先に言つてほしい、地面に倒れこみながらギリギリで意識を保ちつ

つ、心の中だけでつぶやいた。

その後ポツポツと草刈りを成功させた子供たちがやってきては婆が手本を見せ、各自一つずつ稲を刈っていった。

それまでの練習で魔力をほぼ使い切っている子が大半だったので、一つだけで終わらせたようだ。

その間俺は土手の上で座って見学である、俺も魔力を使い切っていたから当然である。

もちろん稲刈りを終えた子らも横に座っていく、みんな初めての魔法の実践で疲れ切っていた。

そのせいでおしゃべりする余力がある子はいやしな、静かなものである。

<そんなに疲れたの？>

なので俺は心置きなくツクヨとの会話に集中できるのだ！ 無理やりでも何かしてないと疲れて寝そうなので無理してるとも言う。

(疲れたぞー、例えるなら全力疾走をし続けた直後みたいな？ つて伝わらないか、これだと)

そもそも疲労って概念がなさそうだしな、どういえば伝わるかなと悩んでいるとちよつと聞き捨てならないセリフがツクヨから飛び出した。

<空気の中の魔力を使えばいいのに、体内のだけでやるのがヒトのやり方なのかなあ？>

(なぬ?)

<肉の体の中の魔力なら最初から自分のだからかなあ？>

(待て待て、何？ 空気中の魔力を使って魔法って発動できるの?)  
<うん、私達はそうやってるよ>

なんでも精霊ジンは空気や水の中の魔力を自分の支配化に置く事で、大規模な魔法を使用可能にしているらしい。

ただ、自分のもの以外の魔力を自分のものにするにはやっぱり魔力を使うようだ。

なので魔力の使い方が下手だとマイナスにしかならない。

が、精霊<sup>ジン</sup>は魔力で体ができてくるから当然使い方は一級品、故に時間さえかければいくらでも魔力を集められる、とのこと。

……時間さえかければプルシデインス・ヴィータ起こせるじゃん、そう思ったが無理らしい。

魔力に宿る肉の体の情報がないと体を作れないそうなの、そうじゃなきゃ今頃全ての精霊が肉の体を得ているか。

でも、空気中の魔力を自分のものにする方法は後で教えてもらおう、きつとスツゲー便利だろうから。

そんな風にツクヨと会話していたらいつの間にか稲刈りは終わっていたらしい、婆が俺ら全員を呼んでいる。

刈り終わった田んぼの中になんか等間隔で並ばされたと思ったら、「んじゃあ、ちよいと寒いけど我慢すんだよ」

そう言うって婆は田んぼの土をいきなり凍らせた。

いや、植物って刈るだけじゃすぐには死なないけど、いくらなんでも乱暴すぎない？

そう抗議したかったが、寒すぎてみんな口がきけない。

それでもって、即溶かすために今度は熱風が吹き荒れる。

悲鳴がそこかしこから上がるが婆はどこ吹く風、淡々と必要な事を事務的に告げた。

「この作業を村の田んぼ全部でやるからね、覚悟しときな」

村の田んぼって20以上なかったっけ？ 終わるまでに何人が風邪をひくだろうか、ちよつと気が遠くなる秋の季節の話だった。

## 未来のための修練と

さて、子供虐待ではと思うような魔力を増やすための作業、稲刈りも無事全ての田んぼで終わった。

婆曰く、寒いのと熱いのを交互に受けたくないなら必死になって自分だけでできるようになりな、とのことである。

スパルタ通り越して虐待では？ 幸いにも風邪をひく子供は出なかつたが、一歩間違えれば不味い事になっていたと思うんだが……。

問題提起するような機関も存在しないから気にしてないのだろうか？

そんな風にこの時は考えていたが、実は裏でかなり手厚いケアがされてきたそう。

子供が帰ったら風呂が用意されていたり、美味しくて栄養たっぷりな食事が配給されていたり、高いはずの薬まで準備されていたそう。

そこまで手間をかけてでも魔法使いを増やしたい、そういう目的があつたらしい。

そして、その気持ちもよくわかるようになった、その後の魔法訓練の内容が内容だったからだ。

水をお湯に変える訓練から始まり、それを均等に分ける訓練、水自体を操り渦巻かせたり止めたりする訓練、火を起こす訓練とそれを安定させる訓練などなど。

勘のいい人なら分かつたろう、つまり魔法使いに期待されているのは、

「これ、家電製品の代わりだ……！」

<家電？ あー、イメージきたきた。なんでもしてくれる便利用品なイメージかな？>

婆のやつてることを考えれば機械全般……！ これは流石に将来が暗いと言わざるを得ない！ いや、待遇面知らんから一概には言えないけど、とりあえず自由な時間は多分殆どないぞ！

<そうなの？>

「やれる事が多すぎてめっちゃやくちや頼まれ事しまくる奴だよ、俺大



きくなったら村から出るぞ、絶対に！」

元々村に残る気、もとい残れる気はなかったが自分の楽しみの意味でも出なきやならなくなったぞ、これ。

〈残る気だったの？〉

「……いや、ツクヨに見せてもらった風景とかこの目で見たいし、その先がどうなっているのか知りたいし、この世界を見て周りたから残る気は無かったな」

そのための準備とかも必要だから、すぐについてわけではないけれど。

とりあえず体が大きくなるまでには全て整えておこうと思う。

「その準備の一環として、今日は空気中の魔力を支配下に置くのに挑戦だな」

〈イメージはこんな感じだよ〉

ふむふむなるほど？ 自分の意思を魔力に乗つけて別の魔力にぶつけて塗り替えるみたいな感じか。

まずは近くの空気を対象に試してみる。

「……魔力に意思を乗せるって結構難しくね？」

〈そう？〉

「いや、お前は魔力に意思が乗ってるのが命を持ったようなもんだから分からんだろうけど、自分以外に自分の意思乗せるって人間にや基本分からんぞ」

そもそも意思ってなんだよってなるわ普通、結局その日は成果なしで終わったし。

完全に一人になれる時間って結構貴重なのに……。

それから何ヶ月もかけたが、上手くいかない日々が続いていた。

試行錯誤して魔力を空気にぶつけるが、全く持って成果なし。魔力の動かし方はよくなったが、何か根本的に方向を間違っているのかもしれない。

もしかして難しく考えないほうがいいのか？ 魔力を動かすことはできる、つまり魔力を自分の思い通りに動かすことはできる。

これってすでに意思が乗ってるって事なんじゃないか？

試しに魔力に『動け』ではなく『俺のところ』に別の魔力を持つてこい』と念じてみる。

「……できたわ」

ツクヨからもらったイメージをもう一度確認してみる、そしたら案の定であった。

「いちいち動作を区切ったりしてねえ……」

「なんでそんなやり方なのかなーって思ってたけど、分かんなかっただけだったんだ」

「言えよ！」

「<ヒトのやり方としてはそれが正しいのかもって思ったの！>

くうっ、精霊だもんな、ヒトのやり方とか何が正しいか分かんないよな！

「くそっ、時間を無駄にした気分だ」

「<だけど魔力の動かし方は上手くなってない？ 結構スムーズに動かしてる気がするけど>

「確かにそんな気はするけど、気のせいじゃないのか？」

「だって、ツクヨの動かし方と比べると雲泥の差だぞ？」

例えるならバイクと徒歩って感じ、魔力の動きが目に見えて違うんだよな。

「待てよ？ 冷静になって考えると比べるものが間違っている気がする。」

「方や魔力を動かせるようになって数か月程度、方や云千万年下手すると云億年。」

「違って当たり前じゃないか!!」

「<なんで怒ってるの？>

「自分の馬鹿さ加減にだよ、こんちきしょう！」

全然なっていないなー自分、とか考えてたけど比較対象ツクヨとモルモン婆じゃねえか！

「そりゃ大したことないように見えるわ、大ベテランと神話生物相手に何比べてんねん自分！」

自信失くす必要かけらもねえじゃん、寝る間も惜しむ勢いで魔力操作してたんだぞ俺。

薪拾いを風でやってみたり、食器洗いながら水操作してみたり、両親の寝室の空気を入れ替えたりとか色々やってたってのに。

「笑えよベジ―〇……」

「く時たま変なこと言い出すよねサル―シャって、もう慣れたけどやめた方が良くない？」

「がつくりと項垂れながらネタ台詞でギャグで流すが、ぎっくり切られた。」

「うるさいやい、気づけ無かった自分が恥ずかしくて仕方ないから笑い話にしたいんだよ」

「く笑い話にして『あれは笑いを取るためだった』っていう事にしたんだっけ？ ヒトって不思議だね？」

「ヒトの心の動きとか学ばせるために、いちいち俺の行動理由を説明してたけど、こう、結構くるな。」

「自分自身を客観視させられるのってさ、正直、辛い。おかげで深く考えようとする習慣はついたけどさ。」

「くついたの？」

「(ようとする習慣はな、できてる自信はない)」

「今だってそうだ、ツクヨの奴はとつくに気づいて空気をふるわずやり方じゃなく心の中だけで話してたのに。」

「(いつから居たんだよ、あの人)」

「くサル―シャが口で喋るのをやめる前ぐらいから？」

「なら気づけなくても仕方ないのか？」

「(声が聞こえる範囲に入ったのは?)」

「く空気中の魔力を支配下に置けたぐらいかな？ それからゆっくりにこつちに向かって歩いてきてたよ」

「ふむ、足音からして成人男性かな？ もう冬だから落ち葉も乾いているがそれでも結構足音が大きい。」

「しばらく待っていると森の奥の方から若い男性が現れた。」

「おや、君は、たしかサル―シャ君だったね？もしかして先程の声は

「君かな？」

「そうですね、うるさかったですか？　そうでしたらごめんさい」  
こんな誰も来なそうなところで声が聞こえれば不審に思うよな、そう思い頭を下げる。

「いや、うるさい事はまったくなかったよ。これだけ離れてればどれだけ大きい声でも誰も迷惑に思わないんじゃないかな」

歯切れ悪くそう返す男性、よく見ればこの人は、

「俺を捜索してくれた人の一人ですよ？　あの時は迷惑かけてすみませんでした」

隊長さんのすぐ後ろにいて特に険しい顔してた人だ、多分呼び出されたタイミングが一番悪かったんだろう。

きっと俺に対して悪い印象、悪ガキだとも思ってるだろうから先んじて謝罪しておく。

くつくつく、こうやって礼儀正しく謝罪してやれば例えどんなに悪印象の相手でも責めたりはできまいよ。

現にこの人も驚いた顔した後慌てて頭を上げさせようとしてきたしな。

「そんな、子供が気にすることじゃないさ。君はもう夜遅くまで出歩いたりしてないだろう？」

「はい、もうしてません」

「なら問題ないさ。同じ事を繰り返さない、それが一番大事だと隊長もおっしゃってたしね」

そう言っって笑う顔は思ってた以上に嬉しそうで、打算込みだった自分がちよつと恥ずかしい。

この人は心からよかつたって思ってるんだろうなあ、そう考えると自然と背筋が伸びる。

計算と打算まみれで生きてるのが後ろめたいといふかなんといふか、とりあえずもう少し人の好意とか誠意とか人格全般とか信じてみようかなと思ったり思わなかったたり。

<結局どつちなの？>

(専門用語で『前向きに善処します』という奴だな！)

〈それって結局やらないって意味って言ってなかった？〉  
(少しだけ違うぞ、検討の結果できそうにないという結論に達するだけだ)

結果的には変わらないのだが、考えた上でだし、できない事に恥じてもいるので勘弁してほしい。

「ところで、お兄さんはなんでこんなところに？　ここはほとんど誰も来ないからこそ俺も魔法の練習場所にしてたんですけど」

ここは村から大分離れた場所、とはいっても子供の脚でこれる距離なのでそこまででもないが。

それでも誰かがわざわざ来るような場所ではない、だからこそ俺もツクヨも遠慮なしにしゃべってたんだし。

「いや、それはね、ちよつと道に迷ってね」

嘘だな、目が泳いだし返答に間があった……だからといって追及する必要があるわけではないが。

大人がやってること子供に言いづらい事柄なぞいくらでもある、そつとしくほうがいいことも多いのだ。

「そうなんですか、村までの道はわかります？　良ければ一緒に行きますが」

「うーん、それじゃあお願いできるかな」

「はい、村はこちらですよ」  
何をしたのかは知らないが、ああいう言い訳をした以上こう言われれば断らないだろ。

変な事をするような人ではないだろうが、子供に言いたくない事しててその子供を一人だけ残して帰れないだろうし。

これもまた大人に対する気遣いって奴である。

そうして俺は今、お屋敷と呼べるお家の中にいます。

村への帰り道で色々お話ししていたのだが、この人結構おぼっちゃまだ。

この村はフォルティス王国の辺境にあるらしいのだが、この人、ウエル・ドルスさんのお父さんは王国騎士団長だそうな。

話しを聞く限りこの人は四男、どんだけ上でも三男っぽい、それでも息子を辺境に出せるってすごくないだろうか？

家を出ると同時に結婚して新たな分家を作ったみたいだが、なによりの驚きとしてはこれで領主じゃないのだ。

有力者の息子なの？　と思わないでもないが、この人おそらく父さんより年下、それも5歳近く下っぽいから経験を積んでから譲られるのかもしれない。

それでなぜ俺が屋敷の中にいるかだが……

「ほら、見てくれ、可愛いだろう？」

「はい、とても可愛いですね」

産まれたばかりの赤ちゃん自慢を受けるためです。

いや、家の中に誘われたのは村の話を聞きたいって理由だったんですけどね、メインは違うっぽい。

良いところのおぼっちゃまなだけに赤ちゃんを初めて見たそうなのだが、これほど可愛いとは思わなかったとのこと。

さつきからこの子の自慢話で喋りっぱなしです、産まれてまだ一月らしいのによく話が尽きないな。

「世の父親が生きてる中で一番辛い事は娘を嫁に出す事などと聞いた時は何を馬鹿なと思ったものだが、たしかにそうもなろうと僕は理解したよ」

「はあ、俺にはちよつとよくわからないですけど」

「はっはっは、それはそうだろうさ。ただ、それを知っていれば結婚する時に義父さんに礼儀正しくしなければならぬ、その理由が理解できると話だよ」

俺まだ5歳なんだけど、そう思うがこの人より年下の人って多分この村にいないんだよな。

なんとたつて俺の両親が村じゃ一番若い、そんな俺の両親より年下のこの人より下つてなるとそれこそ子供達しかいないわけだ。

人生の先輩面して年下に色々言うには俺みたいなお子供っぽくない子供にやるしかない、って話だな。

<面倒>

(これ、的確な一言をぶつけるのはやめたまえ)

〈産まれたばかりのヒトはたしかに見たいけど、いつ見せてくれるのこの人〉

(ウエルさんが満足するまで喋った後、かな)

出されたお茶を飲みながらウエルさんの話に相槌を打ちつつツクヨの不満を宥める。

マルチタスクの良い練習である、そう思えば苦になら…ごめん、やっぱ辛い。

(お前が赤ちゃん見たいって言ったから俺も我慢してるんだ、もうちよいだろうから我慢してくれ)

〈それにしたって長いもの、言ってる内容変わらないし〉

(よくそれだけの表現方法知ってますね、そう感心したいほどだけどさ。それにきつとあれだろ、これは多分)

ツクヨに続きを伝える前に扉が空き、優しそうな笑顔の女性が赤ちゃんを抱いて入ってきた。

すぐに立ち上がり頭を下げて礼を伝える。

「突然のご訪問失礼しました奥様、俺はサルーシャと申します」

「あら、礼儀正しいのねサルーシャ君。遅くなってごめんなさいね、この子がぐずり続けるものだからなかなか連れてこれなかったわ」

「ああ！ 待っていたよ僕の宝物達！ さあ、見てくれサルーシャ君！ 僕の自慢の妻のプルケと娘のサティさー！」

おぼっちやま気質で無防備なところがあつた旦那に代わつて子を守る母の審査の時間はようやく終わったらしい。

〈ずっと誰かが見てたのはそのためだったって事？〉

(ウエルさんも緊張してるし、多分まだ審査終わってないけどな)

何かあつたらすぐに取り押さえられる位置にいるっぽいし、酷く警戒されてるな、我ながら。

変な事しなければいいだけだし、俺は緊張とは無縁だけど。

「産まれたばかりの赤ちゃんってこんななんですね」

「可愛いだろう？ 僕はこの子のためなら命を捨てられるよ、きつと」

「親になるってすごいんですね、俺はよくわからないです」

「ふふつ、サルーシャ君も大人になればわかるわ」

美白なほっぺの赤ちゃんをしばらく見させてもらい、遅くなる前にお礼を言つて屋敷を辞する。

家への帰り道、初めて見た赤ちゃんの話でツクヨと盛り上がる。

<産まれたばかりのヒトつて、想像以上にか弱いんだね>

(たしか、人間は脳が大きすぎて未熟な状態じゃないと母体から出てこれないからあんならしいぞ)

<そっかー、それであんなに魔力少ないんだね>

んん？

<あれだと近いうちに魔力尽きちやいそうだったけどそれが当たり前なんだねヒトつて>

(……ツクヨ、たしかご近所にも第二子、第三子が産まれてる家あったから近いうちに見に行くぞ)

<? いいけど、なんで?>

(嫌な予感がするからだよ!)

このパターン前にもあつたな、そう思いながら俺は誓った。

ツクヨに早いとこ人間全般の常識を覚えさせる事と、精霊の常識を俺が覚える事をである。



## 猿、大きな壁に挑む事を決める

「……本当にすまなかつた、二度とこの子を囿にするような真似はしない、そう誓うよ」

「あなたの真面目なところは美德だと私は思うけど、私のお父様に聞かれたら離縁も覚悟して下さいね？」

「それだけは嫌だな、今日の事は誰にも話さない事にしよう」

精霊<sup>ジン</sup>は幼な子に憑きたがる、それは純然たる事実として知られている。

おそらく幼いほど精霊の危険性が理解できない、もしくは知らないため憑きやすいからだと言われている。

なので、産まれたばかりの赤子を前にすれば飛び出すかもしれない。

そう考えてサルーシャ、またはその皮を被った精霊の前に我が子を見せたのだ。

結果は予想通りに白。その可能性が高い、いや、それ以外の可能性はゼロに等しいものと理解してたからこそであったが。

「あなたから相談された時はどうしようかと思いましたが、私の夫は妄想癖を患っていたのかと」

「我ながら否定しがたいけど、もう少し容赦してくれないかい？」

「いいえ、この程度は言わせていただきます。あなた以外がおっしゃったのなら、私ははしたなくも口を開けて笑う自信がありますもの」

妻の言葉に苦笑しながら頭を搔かく、自分とて他人が同じことを言ったら笑い飛ばすからだ。

精霊<sup>ジン</sup>にそこまで狡猾な事ができる理性があるならば、とつくにこの世は精霊のものだったろう。

この言葉はラテベア教開祖の大人物アークの言葉だが、精霊のもたらした被害を聞くに頷く以外の選択はとれそうにない。

精霊単体で森一つは消せるのに、更に奴らはプルシデインス・ヴィータを起こしたがる。

あれ以上の力を持ってどうするといふのか、人間の想像力では世界全てを飲み込むぐらいしか思いつかない。

起きた記録は一件のみだが、上手く形を固められなかったのか数分で死亡したと記録されている。

だが、当時、否、歴史上最強と謳われるアーク率いるラテベア教聖騎士団の精鋭100名、それがアークのみを残して全員消滅させられたのだ、僅か数分で、である。

アークはその時のことをこう語る、

『肉体を持って生きるといふ事、それを知らずにいたからこそその結果だろう。少しでも知っていたのなら私の命も無かったのは疑いない』  
アークが人類史上最強の魔法使いである事実を鑑みれば、人に対抗できる存在ではないのは明白である。

ゆえに、精霊は見つけ次第討ち滅ぼすのが常識となっているのだ。

幸いにも精霊は生物にはまず取り憑こうとする性質があり、取り憑く前は強く叩けば霧散するほど弱い。

だから人類はまだ滅んでいないのだ、そう提唱し精霊対策を声高に叫ぶ学者も多い。

「大勢力同士の戦にだって、1000人なんて数滅多に聞かない。それなのに最精鋭、しかもあのアーク様率いる聖騎士団だ。幼い頃は、精霊が出たと聞かされた時に泣いたものだよ」

「気持ちわからないでもないですけど……、お父様にも、お義父様にも、果てはモルモン様にもあり得ないと言われたのに未だ不安でしたの？」

「笑ってくれ、臆病にすぎる軟弱者めと。可能性はゼロじゃないと心配になってしまふ、僕の弱さがこれさ」

あんな良い子を疑ってしまうほど心が弱い男さ、そう自嘲する夫を妻はそっと抱きしめる。

「それだけ私とこの子や近い人達が大事だったのでしょ？」

傷つけられる可能性がゼロでなければ、不安にかられてしまうぐらいに。

大丈夫、あなたの優しさは私にはよく伝わっていますよ」

「……ああ、私は幸せ者だ。君のような優しく聡明な妻を得られたのだから」

妻を抱き返しその体温を感じながら祈る、どうかこの幸せが長く続くようにと。

「結論は『このままだとあの赤ちゃんは死ぬ』でいいんだな？」

「魔力って、生きるだけでも消費するみたいだから多分それであつてるよ」

頭痛い、知らなければよかったと心から思う。

知らなければ訃報を聞いてもお悔やみを言えばそれでよかったのに。

「でも、知つちまつたんだよなあ、出来る限りはやらないと後味が悪すぎる」

「<ヒトってホントに同種が死ぬの嫌がるんだね、わりと半信半疑だったんだけど」

「おいおい、半分だけだったのかよ」

「<うん、だつて私に向かつてくる時とか隣のヒトが死んでも変わらなかつたもん」>

「状況が特殊すぎる！ 止まったら自分も死ぬ状況じゃそりや気にする余裕ないわ」

基本ヒトは、会ったら必死で逃亡、のちに殺し合いのために全力を注ぎ込んでくる種族って認識だったらしい。

「認識というより現実だな、それでも声をかけるのやめなかつたのか？」

「<別に叩かれてもちりぢりになるだけだったし、そのうちまとまるから気にしてなかつたんだよね」>

それが原因で記憶が飛ぶことなかつたしねー、あつけらかんとした物言いに何とも言い難い思いになる。

『記憶の飛ぶ原因自体不明ってほつといていいもんか？』とは思うが喫緊の問題ではないので後日に回そう。

「とにかく、あの子を助けるために必要なのはあの子自身の魔力を増

やすこと。で、魔力を増やす方法って、近くで生き物が死ぬ以外にあるのかどうか、これが俺が今一番知りたい事だな」

<知らない>

うん、予想通りの答えをありがとう。ちなみに婆には前に聞いてたのだが、そんな都合のいいもんがあつたらあんたらにやらせてること。

いきなり詰んでるじゃねーか、どーすんだこれ。

「いやいや、諦めるには早すぎる。こういう時は、前提条件を一つ一つチェックしていくんだ」

まず一つ目、普段人間は魔力の消費と生産が釣り合ってるっぽい。

これは両親の魔力や他の大人たちの魔力を見て気づいたことだが、よく見なきゃ気づかないぐらいなんだが微減と微増を繰り返しているのだ。

次に二つ目、魔法を使った時は人間の体は自然と魔力生産を増やす。

代わりに体力を多く使うためたくさん魔法を使った後はしつかり休まなきゃまずい、魔法の授業中に婆に教えられたことだ。

さらに三つ目、なぜ魔力が魔法の使用以外でも減るのかは不明。

これは昔からの研究課題らしい、今まで何人もの研究者が挑んだが未だに不明。

ある程度納得できる説から珍説奇説までなんでもござれで様々な説が唱えられているが、通説すら定まっていないのが現状だそう。

そして四つ目、魔力が魔力を生む理屈も不明。

ある程度の魔力が無いとできない事は確かだが、具体的にどのような仕組みで魔力を生んでいるのかはさっぱりわからない。

最後に五つ目、体内魔力が増える理屈も不明。

なぜ死ぬと体内の魔力が外に出てくるのか、それが近くの生き物に吸収されるのか、それによって上限がなぜ上がるのか、全てが不明のまま利用出来るから利用しているのが現状である。

「……深く考えると、なんで齢五歳で世界の謎に挑もうとしてるんだ俺。見ないふりして成り行き任せ、大人達がどうするかを遠くから眺

めているのが当然だよなあ」

言いつこなしだなこれは。最初に戻るようだが、じゃあ見捨てられるのかって話だ。

「あの子がなぜ二つ目から外れているのか、それからして不明ってさあ」

「他の赤ちゃんは魔力が少ないわけじゃないし、減るような雰囲気もなかったしね」

「二つ目にも当てはまらないようだし、こっちは体が弱いとかか？」  
「くうーん、サルーシャがよくいう根拠？っていうのはないんだけど、そうじゃないと思う。純粋に魔力の最大値が少ない、で表現合ってるかな？ とにかくそんな感じだよ」

最大値が低いから減った魔力を補えない訳か、なるほど二つ目から外れている理由はただの生まれつきか。

おそらくは、という言葉がつかが原因判明だな。

「意味ないけどな」

「くそうだね、変えようがないみたいだし」

「生まれが原因の事を生まれた後にどうこうできるかっての」

例外として俺みたいな生まれ変わり（死ぬことには変わらないので無意味）や、プルシデインス・ヴィータ（人間のままでいられるとは言ってない）があるが両方却下である。

「一番手っ取り早い解決策は生き物をあの子の近くで殺すことだけだ……」

前世の倫理観でも余裕でアウトだし、この世界基準だとやろうとした時点で精神病患者認定待ったなしである。

「となると、魔力が魔力を生む効率を上げるか、魔力の減る量を減らすか、……生き物からじゃなく魔力を増やすか、か」

「最後のつてどういう意味？」

「石とかが砕ける時とかはどうなのかって思ってたな」

「意思がこもってないからそのまま留まり続けるだけだよ？」

「じゃあ意思を込めながら石とかに魔力を注いだら？」

「くうーん、どうなんだろう？ 魔力をなにかに注ぐってやった事ないし

>  
ポーションなんかは魔力を外から注いでいるらしいし、できなくはないんじゃないかなと思う。

長くは留まらないそうだし、そもそもそれで周りの魔力上限が上がるかわからんが。

「ポーション作りの練習代わりににもなるんじゃないかって思うんだよ、なんでポーション作りに関して婆に聞いてみるわ」

<一石二鳥を狙うんだね>

「時間は誰にも平等だけど、だからこそ効率よく使うべきリソースだからな」

他の方法では世界の謎に挑む羽目になるからな、まだ可能性の高いもので試したい。

次の授業の後にでも聞いてみようと思う。

「じゃあ残りの時間は空気中の魔力の奪取効率上げだな」

<私はサルーシヤのやってるのを見て、私のやり方と違うところを言えればいいんだよね?>

「そうそう、よろしくな」

この技術が実用段階までくれば指折りの強者になれるだろうしな、子供の頃からコツコツと、これこそ最強への近道というもの。

将来俺こそ世界最強だと胸を張って言う姿を妄想しながら、俺は修練を重ねるのであった。

思惑が外れましたー！ 婆曰く、

『だーから言っただろう、そんな都合のいい方法があつたらやらせてるって。別の物に魔力を宿して擬似的に死なせる、って発想に至ったのは褒めてやるよ。最新の研究結果と同じ発想にその年で至ったんだ、存分に自慢するといいよ』

先に同じ発想されてました！ しかも、ダメだったららしいです！

ポーションはどうかなって思ってたそれとなく聞きました！ 魔力を動かさない奴が飲むと最悪死に至るそうです！ 乳飲み子に飲ませるのは完全アウトっばいです！

流れてポーション作りについても聞きました！ その道に進む奴以外には教えられない、門外不出の技術だそうです！　なんで門外不出なのかも聞きました！

「開祖のアーク様がね、一振りで雷を撒き散らす剣だの投げればどこまで追ってくる槍だとか魔力で矢を生み出す弓だとかやばい兵器を作りまくってね、そのせいでその辺の技術は冒険者組合の管轄になってるんだよ。ああ、精霊<sup>ジン</sup>対策関連だけは例外だよ、あれは人間社会全体で対応すべきとされてるからね。

ラテベア教も冒険者組合も作ったのはアーク様だけどね、冒険者組合の方はアーク様に否定的な奴が中心に集めたって話だから開祖自身やらかした自覚があつたんじやないかい？」

その二つの団体は、それぞれ重要な社会的役割を担っているらしいが長くなるからまた今度教えてくれるとのことだ。

それはいい、今重要な事ではないからだ。

重要なのは、

「世界の謎に挑む羽目になったって事だ……！」

くうーん、そこまでしなきゃダメなの？>

「ダメって事はない、むしろそこまで首を突っ込むことの方がダメって言われかねないかな」

<じゃあなんで首を突っ込もうとするの？>

「悔しいから」

そうだ、なんでかは知らないが生まれ変わるなんて特別な事が起きたんだぞ？　それなのに、目の前の理不尽一つ吹き飛ばせないなんて悔しいじやないか。

例えば物語の主人公がそれであっさり諦めたりしたら、俺だったらそんな物語即読むのをやめてしまうね。

俺は主人公じやないかもしれないけど、それは別の話。

主人公になりたいなら、カッコいい奴を演じたいなら、終わる前に諦めるのは違うだろ。

「だって俺にはどうにかできそうなお前<sup>ツッコ</sup>がついてるんだからな」

カッコ悪い姿を見せるのは人間という種族のイメージダウンに繋

がるからな、俺のせいで精霊全体が人間はダメな生き物と認識されてはたまらない。

そんな事起きるかっていうと起きないだろうけど。

くふふん、よくわかんないけど、頼りにされてるのは良かったよ

「おう、頼りにしてる。まずは魔力を多く作るように体になるのはどうゆう仕組みか調べたい。俺が魔法を使いまくるから、普段とどう違うか調べてくれ」

今までも魔法練習はしてきたがその日から身の入り方が一段上がった、近くの目的がはつきりすると気合いのノリがやはり違うものである。



猿、壁は厚いと思ひ知る

少しずつではあるが成果は出ている、おそらく後数ヶ月もすれば魔力の収奪は実用段階になる。

ツクヨという世界最高の収奪技術持ちが手本であったためだろう。何か別の物に魔力を込めるのも意外なほど上手くいった、これも一年ぐらいでものにできるだろう。

そもそも俺にツクヨが宿するという事自体が、そのものズバリだと気づけたおかげだ。

魔力で魔力を生み出す理屈なんかも、なんとなく推測はできるようになってきた。

『魔力を生み出す器官の役割を魔力自身が担っているのでは?』などという乱暴な推測がほぼ合っているとすれば、だが。

エネルギー保存の法則はこの世界では当てはまらないのかもしれない。

魔力が自然と減る理由なんかも、もしかしてって程度の推論は出せた。

『魔力には集まろうとする性質が僅かながらあるのでは?』というものだ。

ふとした瞬間意思の支配下から外れた魔力が、空気内の魔力に引張られるから自然に減っているように見えるという理屈だ。

魔力を動かせる奴と比べて動かせない奴は減りが早いような気がする事からの推論である。

「こうやって並べてみると少しだなんて言えない気はするな」  
く並行してやってこれだから満足すべきじゃない?」

「魔法を使えるようになって二年未満、これであつたことありませんなんて言ったら普通の人から石投げられるだろうな」

季節はもうすぐ春、初めてウエルさんの娘さん、サティを見たあの日から既に一年が経とうとしていた。

この程度習っただけで世界の謎に推論を立てる6歳児なんぞ天才以外の何者でもないだろう、世間的には。

だが俺からみると、

『モルモン婆というおそらくは人間の中では最高位に近い使い手に教わり』

『別世界の前世40年分という別視点を持つにはうってつけな経験を持ち』

『何千万年もの生を生きている精霊ジンの知識と経験をいくらでも参照できる』

というお前どんだけ贅沢な環境下におるねん、とつつこまざるを得ない状況なので自慢する気になれないのだ。

「多分、同じ環境下なら似たような結果だったら誰でも出せる気はするんだよな」

無論、俺以下の結果を出す奴もいるだろうけど。

<でも自慢する気になれない一番の理由は、あれだよね>

「……言うなよ、これでも凹んでるんだ」

二、三か月前ぐらいからウエルさんは憔悴が激しい、愛娘のサティちゃんが長くはない、そう宣告されたからだ。

あれから何度か遊びに行かせてもらっているが、結局問題解決はできなかつたのだ。

二年未満程度の人間に解けるほど簡単ではない、それだけの話ではある。

それだけの話ではあるのだが、しこりが残っている。

もっと何かできる事はなかつただろうか？ 例えば一つの手段に集中していれば……いや、無理か。

<並行してやってたからこそ分かつた事も多いもんね>

「収奪技術の練習していたからこそ、魔力自体に集まろうとする性質があるのではって思いついたんだし、空気から魔力を奪っていたからこそ魔力を生み出すのは魔力ならではのって考えられたんだしな」

それぞれだけだったからこそまでのレベルに到達はしなかつたらう。

だが、それがなんの慰めになる。

「命を救うって難しいな、俺が救うんだって粹がってみたが俺じゃ届きそうにない」

モルモン婆や王国の誰かが救えるならそれはそれで良かった、俺以上の人なんていて当然だからだ。

問題はそういう人達でさえあの子を救えない、もしくは救うのにかかるコストを出せないようなのだ。

それだったらウエルさんという『王国の重鎮の子供』が憔悴するまで追い詰められない。

<そーれーでー?、どうするの?>

「意地の悪い質問だな、俺でもウエルさんのコネでもどうにもならないなら仕方ないだろ」

ツクヨが初めて使う口調で聞いてくる、普段周りで使う奴も結構いるから覚えてしまったのだ。

使う状況はあつてるし、こいつが使える機会なんてなかったから喜んで使つてやがる。

<くんー? 私に、何か言う事あるんじゃない?>

「くそっ! わかつてる、わかつてるよ!」

揶揄うように、いや、崩した表現でいこう。

「お願いします! 手を貸して下さい!!」

<ふふん、お願いされたら仕方ないなあ。手を貸してあげましょう!>

思いつきりマウント取つてきやがったこの野郎! 覚えてやがれ、いつかどっかでマウントとりかえしてやるからな!

「魔力を作り出す方法考えついたのは俺だぞ、先にできるようになったからって威張るなよ!」

> <考えついたって言っても雰囲気だけじゃん、形にしたのは私ですー

そう、俺には出来なかったが、ツクヨにも出来ないとは言っていないのだ。

できる限り俺がやりたかった、なぜならば、

「恩を売って王国の上層部にコネを作る計画が台無しに……!」

ツクヨがやったんじゃないや言い出せない、つまり恩を着せられないのだ!

「くそう、何度見てもやり方がわからん。イメージ送られても魔力操作技術の差でやれる気が全くしない！」

「くこういう時はこうだっけ？　ねえどんな気分？　ねえ、頼らないつまりだったのに頼らなきゃいけないのってどんな気分？」

NDKはやめるお！　どこで覚えて…俺だよ！　むしろ俺から以外有り得ねえよ！

掲示板ネタなんぞ話すんじゃないかった、後悔先に立たずである。

この後、俺達はどうかやってこつそりとサテイと二人だけの状況を作りあの子の魔力を回復させるか、作戦を練るのであった。

作戦のポイントはツクヨにやらせる場合、実はそんなに多くない。

サテイと二人だけの状況を作ることと、あの子が気づかないうちに終わらせること、そして魔力の痕跡を残さない事、この三つだけに絞られるのだ。

つまり気にすべき点は、他の誰かに精霊がいる事を気づかれないようにするだけなのである。

本来なら、他人の中に干渉するには幾つもの障害がある。

それは魔力操作技術であったり、相手の体の構造の知識であったり、対象の魔力量を圧倒できる魔力量であったりと多岐にわたる。

だが、操作技術では精霊以上なんて存在しないし、人体に関する知識なら俺の前世知識と俺自身を使った確認作業で問題ないし、魔力量だって他の空気やら水やらから奪ってくればOKだし、あの子の魔力量が少ないのもこの場合はプラス材料だ。

「後は魔力感知器をどう騙すか、それだけなんだよなあ」

「くちよつと私が魔法使っただけで大騒ぎだったもんね」

「感知器のセンサー感度高すぎて困る」

それだけ精霊が恐れられているって事だが、どうするかな。

やっぱりここは古典に従って、

「東声西撃、だったかな？　それでいこうと思う」

「困を出して別方向に注意を引いて、その間に目的を果たすわけだね」

イメージ送っただけで理解できるのか、うーむ年の功かな？

<似たような事ヒトにやられた事あるし>

納得、経験からはやっぱり学びやすいよね。

「具体的な方法についてだけど、先ずツクヨの魔力を森の奥にばら撒く。これは決定だな」

<気づかれないほど遠くじゃ意味ないけど、簡単に探しつくされるぐらい近くちゃダメ、程々に村から遠い場所だね>

「そう、そして俺が自分の魔力を使って、お前の魔法を遠くに飛ばす」  
この技術を開発できたからツクヨに頼るといふ選択肢を選べた、そう言っても過言ではない。

まあ、これのせいで精霊はまだこの近くにいて、と判断される羽目になってるので総合的にみてマイナスな気もするが。

だって仕方ないのだ、こうでもしないとツクヨが見本を見せられない。

ちなみに普段は一箇所を覆ってその中でツクヨが魔法を使用、用が済んだら覆いごと遠くに飛ばすという手段で隠蔽している。

「サティちゃんをどうこうする時もそうするつもりだけど、さすがに見られたら一発アウトだからなあ」

<同種族がごめんなさい、かな？>

「お前はやってないの？」

<覚えてない！>

他人事みたいな言い方に呆れながらツッコめば、威勢のいい返事が返ってきた。

多分こいつ自身もどつかでやってんだろなあ、まったくもって力だけは持つてる子供ってのは厄介にすぎる。

種族全体がそんなだから大人達の対応が正しいのだが、それはそれ、面倒くさいのはかわらないのだ。

「本当に面倒くさい……俺とツクヨだけ見逃してくれねえかなあ、無理だよなあ、信じる要素とか絶無だもんなく」

決めるべき事は決め終わった後しばらくぶちぶちと愚痴をこぼす、無意味ではない理想の状況というのを口にして確認しているのだ。

(キリッ)

愚痴をこぼす理由を屁理屈で誤魔化して今日の分の練習を開始する、あの子を救ってそれで終わりではないので日々の練習は欠かせないのである。

作戦の第一歩として、数日間かけて村に近くもなく遠くもない辺りの森にツクヨの魔力を撒き散らした。

案の定、すぐに森への立ち入り禁止が通達されたので、朝早くからドルス家のお屋敷へ向かった。

朝一に近い時間にきたおかげだろう、門前でちょうど出るところだったウェルさんと出会えた。

「やあサルーシャ君、今日もサテイの遊び相手になりに来てくれたのかい？」

「ええ、また精霊の痕跡が見つかったって聞いたんで、寂しいだろうなって思ったんで」

「ありがとう。だが、君の家は大丈夫なのかい？ 君はよく働く子だから、いないとなると君のお母様が大変じゃないかい？」

「昨日の昼過ぎには森への立ち入り禁止出てたから、昨日できる事は今日の分まで終わらせましたので」

うちの事を心配してくれたので、問題ないことを理由と一緒に伝えたらなぜか一瞬傷ついたような顔をしたな。

すぐに表情を戻したようだけど、この人自身が大丈夫か？

……大丈夫なわけないか、初めての子供が死ぬのを待つだけに近い状態なんだ、これで平気だったら人の心が無いと思う。

「ありがとう、僕は森に向かわなければならぬし、妻も家の事があるからつきつきりは難しい、使用人も家事があるから君がいてくれると助かるよ」

「はい、母さんたちからも助けてあげてと頼まれましたので」

ドルス家が今とても大変なのは村のみんなも知っているからなあ、母だけでなく会う大人全員に頼まれる勢いでしたわ。

「それじゃいつも通りをお願いするよ」

「はい、お邪魔します」

俺も初めて訪れてから今日まで何回もこちらにお邪魔しているの  
で、もはやなれたもんである。

途中で出会った使用人さんに挨拶だけ済ませてさっさと家の中を  
進んでいく、勝手知ったる人の家、すいすいとサティちゃんの部屋ま  
で向かう。

「おはようございます、今日もお邪魔しますねプルケさん」

「あら、今日も来てくれたのね、いつもありがとう。悪いけど今日もお  
願いするわ」

そういつて部屋を後にするプルケさん、これから実家や王国内の伝  
手に書く手紙の内容を整えるのだ。

普段であつたらウエルさんが考えて書くんだが、精霊搜索で森に  
行つてしまつてるから妻であるプルケさんが考えておくわけだな。

そして、子守をしながらだと難しいから俺みたいな子供に任せざる  
を得ないのである。

可愛い娘を村のガキ程度に預けるのつてどうなのつて思わんでも  
ないが、その信頼を得るためにこの一年ほど村のためとドルス家のた  
めに奔走してきたのだ。

魔法の練習兼ねて便利な家電用品替わりとして動き回つたり、遊び  
に行きたがつたり派手で威力の大きい魔法を使ったがる子供たちを  
説得したり、精霊搜索に人手を取られた時は積極的にドルス家に来て  
子守を手伝つたりと悪ガキの汚名返上する勢いで頑張つたのだ。

＜一部は私とサルーシャのせいだよな？　こういうのつてマツチポ  
ンプつて言うんだっけ？＞

(少なくともドルス家に対してはそういう扱いになるわな。最低限サ  
ティちゃんを救わないと暗躍する黒幕扱い不可避だな、恩を盾にむし  
るような真似はしなくても、な)

さて、サティちゃんの様子はどうかな。

この年ぐらいになればハイハイで動き回る、一人で立ち上がり歩き  
出すなどし始めるもののだがサティちゃんはほとんど動かない。

辛そうな顔でこちらを見やり、口を少し動かした後すぐに目を閉じ

てしまう。

(一歳児の動きじゃねえな)

これをずっと見続けるってかなりキツイ、プルケさんが少しも表面に出してないのが信じられないくらいだ。

(さっさと助けなきやな)

<はい、それじゃ始めるよ>

俺が周りにバレないように魔力で覆うのと同時に、ツクヨが溜め込んでいた魔力を解放する。

突然現れた圧迫感にサテイちゃんが泣きそうになるが、その前に頭をゆっくり撫でて落ち着かせる。

落ち着いたのを確認してツクヨがサテイちゃんの魔力に干渉し、魔力を生み出す事に集中するよう仕向ける。

(これができねえんだよなあ、こういう理屈でやってるのかさっぱりわからん)

<私もさっぱりわからないよ、でもサルーシャにもやれたし気にしなくていいんじゃない?>

(理詰めで動いていたものが、いきなりそれをぶん投げてくるのやめて?)

魔力って物理法則に従ってなかったっけ? 少なくとも今までの魔法はどう動くかをイメージしなきゃ動かなかったんだけどなあ。

<イメージはしてるよ? この子の魔力が最大効率で魔力を生み出せるように、足りない魔力は外から吸収するようになって>

(その理屈が分からんって話。なんとなくだけど、外部からハツキングするようなもの?)

<多分そんな感じ>

すぐには魔力不足は解消されないだろう、この後も何回か同じ治療を続ける必要がある筈だ。

今日の分が終わった後、魔法の痕跡がバレないように覆っていた魔力をゆっくりと圧縮して手元に置く。

これでこの部屋に魔力の痕跡は残らない、ただしサテイちゃんの体内に関しては不明だ。



多分大丈夫だが、治療中に精霊魔力感知器がこの家に来ないことを祈るばかりである。

## 猿、不法侵入する

騎士ウエル・ドルスは自身を臆病な軟弱者だと認識している。

剣の腕は幼い頃から学んだにも関わらず、父や兄と一合もあわせられない程度。魔法は学ぶのが遅かったせいか、魔力がまったく感知できずに挫折。頭の方もそこまでよくなく、学者への道は早々に諦めた。

そんな自分にできるのは、せいぜい親の七光りで捨て扶持をもらい細々と生きていくぐらいだ。そう思っていたから真面目に鍛錬と勉強、与えられた任務には力を尽くしていた。

だが、それがよかつたのだろう、愚直に任務に励む僕にふって湧いたような幸運が訪れた。

この開拓村の次期領主の座である。

おそらくは父への褒美という面がドルス自身の見立てだと八割ほどあつたのだが、それでも残りの2割は自分の勤務態度にあつたと自負している。

自負しているが、せいぜいが兄の下で分家を立てて従者の家系を作るものだと思っていたのが領地持ちに大出世である。

出世の幅が大きすぎて喜ぶより責任からの重圧で潰れそうというのが本音であつた。

父や兄に言ったらひとしきり笑われた後、村を収められると判断するまでは前任者の下で学ばせて貰えると教えられたられたが。

何も知らない者にいきなり任せる訳がない、考えれば当たり前であるがそこまで考えられなかった僕は赤面するしかなかった。

それからあれよあれよという間にお見合い、結納からの結婚、正直何も覚えていないぐらいあつという間に決まっていた。

いや、彼女が妻になってくれた事に不満はない、自分が夫になっている姿が想像できなかっただけだ。

それでも屋敷ができ、愛し合い、子が生まれる頃には自分が守らなければならぬという思いは生まれていた。

だからこそ罪の無いサルージャ君にも厳しい目を向けてしまった

のだ、つくづく臆病者な自分が嫌になる。

サルーシャ君だつて守るべき領民の一人であるのに無用な疑いをかけるなんて言語道断だ。

だから、これは愚かな僕への天罰だと思った。

サテイが、可愛い愛娘が先天性魔力欠乏症で死の定めから逃れられないと言われたのは。

生まれつき魔力が少なく、そのせいで死んでいく赤子は意外なほど多いらしい。

赤子では魔力を感知することもできない、ポーションを飲んで魔力を回復させるのも不可能だ。

無理に飲ませて破裂、最悪の場合プルシデインス・ヴィータを起こすと言われては試す事すらできない。

実際裕福な家庭の子が先天性魔力欠乏症にかかっていた場合、一縷の望みにかけて親がポーションを飲ませ引き起こす事態も少なくないらしい。

僕も何度も何度も釘を刺された、それを行うのはこの子を殺すのと変わらない行為だと。

ならばもうこの手段しかないのだろうか。

生き物が死ねば近くの生き物に魔力が吸われる、それを利用して魔力の限界値を上げる方法があると聞く。

実際この村でも魔法使いになるべく子供達がやらされている。

そして、魔力の大きな生き物が死んだ時ほどその効果は高いとも。

……この村の子供達は小さな頃からそれを行なっている、ならば我が子がもう少しだけ早く行ってもいいんじゃないか？

幸いにも度々我が家に来る魔力の大きな子がいる、その姿を見るたびに我が子のためだと囁く声がする。

これが悪魔の誘いというのだろう、僕にはそれがとても甘美に思えた。

少しずつ憔悴していく我が子を見ているとその衝動を抑え切れる自信がなくなっていく、近いうちにサルーシャ君にはもう我が家に来ないように言わなければ。

僕が悪魔の誘いを振り切れるうちに。

もう来ないでくれって言われました、すつごく困ります。

だって後一回か二回ぐらいはやらなきゃ治らないのよサティちゃん。  
ん。

それなのに来ないでくれって、一体なぜ？

「ご迷惑でしたか？」

「そんな事はないよ、君にはこのドルス家全体が助けられていた」

「ならなぜ？」

「逆だよ、これ以上我が家が君に迷惑をかけるわけにはいかない」

ああ名誉的な？ 村民ごときにこれ以上世話になるなんてつてか？

一瞬そう思ったけどこれは違うな、ウエルさん泣きそうだもん。

あるとしたら誰かに怒られたか？ その場合誰だ、少なくとも上司さんや司祭さんはない。

何度目かにこの家に通った頃にこつそりと頼まれてるし、怒るぐらいなら頼まないだろうしなあ。

とすると俺の知らない人、奥さんかウエルさんの実家か？

うーむ、わざわざ辺境行きになった奴にちよつかいかけるか？

それともサティちゃんの件で騒ぎすぎだつて言われて大人しくせざるを得ないのか？

「それは何方かに言われてのものですか？ はっきりと申しませんが、

俺がこちらに来ているのは将来俺がやりたい事をやる時後ろ盾やコネになって欲しいからなので、やめさせられると困るのですが」

必殺、ド直球火の玉ストレート、余計な気遣いは死ぬ！ ふはは、迷惑というならば断る方がより迷惑になる、そういつてしまえばお人好しなこの人の事だ、きつとかばつてくれるはずである。

「くっ……！」

あれえ？ なんでウエルさんすつごく苦しそうな顔してるの？

もしかして逆らっちゃいけないぐらいの人からの叱責？ だとすると俺が入り浸るのつてかなりアウトだったつて事？

だとすると身分差が絶対の社会なのこの世界？ いや、それにしちゃあ上流階級っぽいウエルさん達が気さくなのが意味不明だし、一体なぜ？

「すまないー！」

そんな風に混乱してたら頭を下げて謝られた。

いや、そんな事されたらますます意味分からなくなるんですが。

「これ以上サティの近くに君がいる光景を見せないでくれ！ 僕が、悪魔の囁きに屈しないうちに、お願いだから逃げてくれ……」

ええと、どういう意味？

＜ああ、そっか。魔力を増やすなら生き物を近くで死なせればいいもんね。そっかそっか、頭いいじゃんこの人＞

（……おお！ 俺、命の危機だったの!?!>

さすがに大人に奇襲されて絶対大丈夫なんて思えないからな、ウエルさんがその気になってたら死んでたかもしれん。

（治癒魔法でも開発しておくかな？）

＜面白そうだけど、この人への対応はしなくていいの?>

（現実逃避してる場合ではないか……いや、どうしよう、これ。今後来るにしても来ないにしても気まずいぞ、俺別に世界を見て回りたいだけで故郷を捨てる気なんてないから武者修行のパトロンしてほしかったのに）

パターンに分けて考えよう。

まず一つ目、断って今後も来るパターン。デメリットは家主が来るなって言ってるのに来るのって常識外れじゃねってのと下手したら殺されること。メリットとして確実にサティちゃんの治療ができる、以上！

あかん、どう考えても素直にもう来ませんと言わざるを得ない。

その次に移ろう、来ませんって言ったんだからもう来ないパターン。

メリットは命の危険がないこと……終了！ デメリットは、村のみんなからなぜ行かないのかって聞かれたら……まあ素直に来ないでくれって言われたからでいいから考慮しなくてよし。サティちゃん

の件は彼女自身の生命力に期待する形になるな、多分まだ放っておいたら死ぬ領域だけど。

で、死んじやった場合ウエルさんは殺つときやよかったってどうしたって思うだろう、それがわずか程度であつても。その場合俺がここの家に来るのは苦しめるだけだな、関係性は非常に微妙なものになるだろう。

つまり最後のパターン、正面からは来ないけどこっさり侵入してサテイちゃんの治療を行うパターンが一番の正解である。あの子が生きてれば関係修復は容易だろうし、何より最初の目的が達成されているのがいい。

スニーキングミッションの難易度はこの際無視、なぜならツクヨの魔法を使い倒す予定だからだ。精霊の魔力操作技術は世界最高峰、それに俺の発想力（オタク知識）が合わさればできない事などほとんど無い。こんなパワープレイが通じると思えるのも痕跡を残さないようにする結界のおかげである。

「……わかりました。でも、その心配が無くなった時、ウエルさんの気持ちが落ち着いていたら、また来てもいいですか？」

「そう、だね。僕が君を害さない保証ができるなら、また来ておくれ」  
泣きそうな笑顔で答えるウエルさん、辛い気持ちを抑えてまたと言ってくれたのがよくわかる。

無神経と言わば言え、それでも言つとかなないともう一度来るのが微妙になるのだ。

なんてつたつて、あの子は必ず治すのだから二度と来れない、なんて有り得ないのである。

まあ、あまりやりきる前に断言してしまうとフラグが立ちそうなので祝いの言葉を考えるのはまた今度にしておこう。

と、言うわけで深夜のスニーキングミッションはっじつままるよー。  
まず寝る必要のないツクヨに両親が眠るまで監視してもらい、就寝を確認したら起こしてもらいます。

この際結界を張っておきたいのですが、寝たりして意識が逸れると

大抵の魔法は霧散してしまいます。諦めて痕跡を消す前に感知器がこない事を祈って素のまま監視です。

両親が眠って起こされたら行動開始、靴を履き木窓を開けて外へ。なぜ窓から出るかという、俺の部屋から玄関に行くには両親の部屋の前を通る必要があるからです。起こしてしまう可能性は低いですがリスク回避はできるならしておきたいですからね。

くねえねえサルーシャ、実況ごっこ？してる最中に悪いんだけど聞いていい？>

(なんだよ、俺はこれから犯罪を行う事実から目を逸らすのに必死なんだが)

くあの二人寝る前にバタバタとうるさかったけどあれってなんだったの？>

(……とりあえず、うちの両親の仲が悪いわけではないと言っておく。詳しい説明はまた後でな)

はい、と頭の中で響く元気な返事を聞きながら真つ暗な中を迷わず進む。

街灯の無い道は完全に闇の中、さらに新月の日を選んだため万一巡回の兵士さんが来ても俺の姿を見ることはできないだろう。

それでもなるべく身を低くし音を殺して進む、可能性はゼロではないから、いや、家屋不法侵入をしようとしている自分が後ろめたいからだ。

この辺の感覚はどうしたって現代人なのだろう、この世界に生まれて数年経った今でも村の人達と微妙にずれがある。

いや、不法侵入が認められてるわけではないし、そもそも堂々とドルス家に入りしてただろ、と言われると困るが、どうしても時たまずれを感じるのだ。

気にするような事ではない、ないのだが……現実から目を逸らそうとしている時とかふと頭をよぎる。

いつかこのずれが致命的なものをもたらすのでは？ そんな妄想じみたナニカが頭をもたげることがあるのだ。

所詮は妄想、気にかける必要などないはず、なのになぜ俺は……

<着いたよサルーシャ、ここからは魔法をバンバン使っていていいんだよね?>

(! ああ、そうだ、覆うからちよつと待ってる)

思考の底に沈みすぎてたんだろう、ドルス亭にいつのまにか到着していた。

ツクヨの呼びかけに慌てて魔力を広げていく。

(屋敷全部を泡みたいに包む、それが終わったらツクヨが俺の姿を透明にする、そのままの子のどこまで行って治療を行い、終わったら即撤退、何か起きたらその都度対応すること。分かったか?)

<寝る前にも言ったじゃん、何度も言わなくても大丈夫だよ>

(そうだよな、何度も確認する必要はないよな。悪い、俺が不安だっただけなんだ)

軽い文句を言われたので素直に謝罪、自分の不安を吐露する。

(バレたらどうしよう、なんて考えても仕方ないんだけどな)

<任せて、私がバツチリ隠してるから!>

ちよつと得意げなツクヨに頼もしさと微笑ましさを覚えながらサティの眠る部屋の下までこっそり進む。

(げっ、なんで起きてんの!?)

<バツチリ灯が点いてるね>

屋敷の窓は贅沢にも全てがガラス製、もちろんカーテンはかかっているがそれでも明かりが点いてるかどうかはわかる。

<どうするの? どうせ後一、二回は必要だから今日は出直す>

(消し忘れだといいんだけどな、ちよつと中の様子を確認するぞ)

音を立てないように静かに窓のすぐ下まで進み、逆に見られたりしないように注意しながらカーテンの隙間を覗き込む。

そこにいたのは俯き肩を落とすこの家の家主だった。

(ウエルさん?なんでこんな時間にまで起きてるんだ?)

不思議に思ったが彼の前の小机を見て察した。

(眠れないのか……)

隙間からだが見えづらいが、微かに見えるガラス瓶らしき物は確かお高い蒸留酒だったはず。



父親からの贈り物とで度数が高目だと使用人の人が言ってたやつだ。(飲ませてくれないかなあとか言ってたけど不要な情報なので割愛する)

さて、これは困った。透明化してるとはいえ、不意に動かれて触れられたら当然バレる。

最悪出直すのも択に入れつつ観察を続ける。

熟睡してるなら少しくらい何かやってても気づかない、といいなあ、などと考えているとウエルさんの口元が動いているのに気づき慌てて壁に耳をつけて聞き耳をたてる。

「…ごめん、ごめんなあサティ、なんにもできない情け無い父さんで……ああ違うんだ、君が憎いんじゃないんだサルーシャ君、僕はただ、娘を助けたくて……はい、自分は騎士失格です隊長、守るべき領民を、疑うだけでなく殺害しようとする、最低な……」

(寝てるわこれ。ツクヨ、窓の鍵を開けてくれ)

くはーい、ちゃんと魔力で覆っててね>

延々と責められ続ける悪夢を見ての寝言なんてもん聞いてられるか！ とつとつとサティちゃんを救い悪夢を吹き飛ばす！ そう決意を固めた俺はすぐに窓の周囲を魔力で覆う。

窓の内側まで侵入させるのはちと骨だが、コレを聞き続けるよりは余程マシだ。

音を立てないよう窓を開けてこっそり侵入してもウエルさんは起きない、すぐに起きれないほど飲んでしまったのだろう。

ブツブツと聞いているだけで気鬱しそうな寝言をBGMに治療を始めたが、できれば今回だけで治療が終わってほしい。

真面目な人は自分を追い詰めすぎる、少々いい加減な方が生きるのは楽だと思ふ新月の夜であった。

## 過ちを犯す

それは必然の流れだった。

彼がやったこと、それに対する周囲の行動、その流れを考えれば当然の帰結であった。

「ドルス様、例の物ようやく届くそうですぞ」

「おおー。とうとうこの村にも！ これで村の安全をより守りやすくなりますね！」

「ええ、今度の物は範囲も感度も以前の物とは比べ物にならないほどと聞いておりますからな、万一の事態でも致命的になる前に対処できるようにするでしょう」

「そうですね、起きてしまえばこの村だけでなく王国全体に関わる大事になる事柄です、なんとしても阻止しなければなりません」

「しかし、これほど早く届くとは言ってもいませんでしたな」

「森への立ち入り禁止も多くなっております、最新式の物を置いておく必要があると教会も組合も判断したのでしよう」

「ドルス様の働きかけもございましたからな。御息女の魔力の件はやはり精霊が？」

「わかりません。わかりませんが、あの子が生まれる少し前から精霊騒ぎが多かったのは事実です」

「此度の措置で落ち着くと良いのですが……」

「僕もそう願っております、この村は僕にとっても大事な故郷となる場所ですから」

人は自分の常識に従って物事を判断する。

自身が全てを知っているわけではないと理解していてもなお、他者の考え、行動、善悪を己の価値観の下で勝手に判断するのだ。

しかし、それを責めることは誰にもできない。

命が、それも自分だけでなく守るべき者の命もかかっている状況で、それら全てが失われる可能性がある方に賭ける者は普通なら愚か者と呼ばれるからだ。

無事治療完了しました、サティちゃん今後も生きていけそうです。あれから二回も侵入する羽目になったけど、誰にも気づかれることはなかったし痕跡も上手く消せたので問題なし。

懸念であったあの子の体内に残る魔力の残滓も、すでに一年が経過した今では発覚の可能性はゼロ。

ドルス家も明るさを取り戻し関係者一同胸をなでおろしているところ、村の、ひいては俺の将来も明るいいえよう。

ドルス家との関係も良好なものに戻ったしな、おかげで高価な本も一々許可を取らずとも読ませてもらえている。

教養や礼法などの習熟は他の子どもたちより一歩も二歩も先に進んでいる、ウエルさんに教材を色々貸してもらったおかげである。

魔法技術に関しては大人を含めても婆以外に上回る人はゼロ、まあ婆以外に魔法専攻の大人村に来たことないけど。

狩りや農業はさすがに俺より上手なが多いがそれでもできないわけではない、狩った獲物の処理とかも教わったのでこっそりと進めている旅の準備も順調だ。

ツクヨとの相互理解も進んでいる……はずだ、質問されることも減ったしなんでそれ言わなかったのみたいなことも少なくなっている、と思う。

自信がなさげなのは勘弁してほしい、精霊と人の違いが多いことはわかっているが全て分かっているわけではないので今どれくらいか分からないのだ。

おそらく、今すぐに人になっても日常生活に支障をきたすほどではないと思う。

使える魔法の種類はぐんぐんと増えていて出来ないことを探す方が早いぐらいだ、精霊の魔力操作技術をちよつと舐めてた、どんな無茶ぶりでもあつさりとかなしやがるこいつ。

総じて極めて順調といえる、このままいけば将来の展望も明るいいのであるといえよう。

まだ八歳にもなっていないが何をしたいか、何をしなければいけないか、目的を軽く見直しておくか。

「一番は私をヒトにしてくれるヒト探しだよな」

「だな、まあ嫁探しに近いな。俺とツクヨを信頼してツクヨを自分の子どもとして受け入れてくれるなら、他の夫婦でもいいんだけどな」  
まず間違いなく無理だろう、精霊のやらかしは絵本にもたくさん載ってたし、おどぎ話の悪役として引つ張りだこだ。

ウエルさんちの書齋で読ませてもらったけどいくつもの種が滅んだ原因って、ちよつとはしやぎすぎじやないです？

「くそう予想されてるって書かれてただけじやない、精霊ジンの仕業と断定はされてなかったでしょ」

「その説が一番有力視されてるのは事実だけどな、それに交戦記録はあるっぽいし」

言葉を濁されたが婆もウエルさんも知ってるっぽい、交戦者が開祖のアークであろうということまでは二人の言葉の端々から類推できる。

……アークって人多分転移者なんだよな、いくつかのエピソードからの推測だけだ。

例えば金属の製造についてなんだが、最初は精製純度をとにかく上げさせて、次はいろんな成分を細かく記録をつけながら混ぜ合わせるのを提案していたり、金属の強度に剛性と靱性という言葉をもってきたのもこの人だ。

数学知識もこの人が基礎を作り上げたようだし、でもサインサイン、コサインコサイン、タンジエントタンジエント、cos、tanはわかりやすすぎるだろ。他の言葉がしっくりこなかったんだらうけどさ、もうちよつと現地の言葉を考慮すべきだったのでは？

一番重視すべきなのは教育であると事あるごとに言っていたらしい、自分がわかることが周りは理解できていないという事態が多かったんだらうな。

世界が丸いという知識も今でこそ常識だがアークのいた時代では理解されなかったらしいし、平面であると主張する人達には水平線の丸みを見せることで納得させたそうさ。

浮くという感覚が理解できず飛ぶときはまるで矢のようにすつ飛

んでいくしかできなかつた、というのは珍しいアークの苦手分野として伝わっている。正直分かる、俺もすつ飛ぶのは飛行機を想像すればいいけど、浮くのは風船のイメージが強くて自在に動くのができないもん。

極めつけは太陽と名付けられた魔法だろう。

精霊と並ぶ三大生物災害の一つ竜、その退治に使われた魔法らしいのだがその描写がこんな感じである。

『地上にもう一つの太陽が生まれたかのごとき光は遠く離れた我々の目をも焼かんとする凄まじき輝きであり、その後地の揺れは世界の終焉が訪れたとすら思えるものであった』

この文の後、アークが戻るまで避難した人達の心理描写があつて戦場の描写が、

『そこには何もなかつた、いや、在ると表現できるものはある、巨大で何よりも深い穴だけがそこにあつた』

どうにもこの時のアークは上下に結界を敷き忘れていたらしく、上下にだけ爆発の威力が向かつてしまったようだ。

つまり銃とかと同じ理屈だな。すさまじい勢いで膨張する空気に押しさせてものすごい勢いで銃弾を飛ばし、その銃弾で地上には大穴が開いたつてわけだ。この場合の銃弾は竜の肉体だけどな……。

この魔法の詳しい説明はあまりされず、代わりに禁止事項としての言葉が残された。

『物質のエネルギーへの変換を禁ず』

勘のいいひとならばわかつたかもしれないが、何が起きたかわからない人もいそうなので説明しよう。

この馬鹿  $E = mc^2$  を現実<sup>に</sup>証明<sup>し</sup>や<sup>が</sup>つた<sup>の</sup>だ。

それを知つた時こいつが開祖のラテベア教とは距離を置こう、そう心に決めた俺は悪くないと思う。

この世界でかなり大きく広まつてるみたいだけど、将来はこの宗教の影響が少ないところでツクヨを人に産んでくれる人を探そう。

＜そーういえば今日は教会に集まる日じゃなかつた？＞

「悪い人達じゃないってわかっているけど、あまり行きたくないんだ

よなあ」

とは言つても村全員が集まるように言われてるのでさすがにサボれない、大人しく向かうとしよう。

教会の前ではウエルさんの指示の下、訪れた村のみんながなにやら大きな鐘のついた器具に触れていた。

「こんにちはウエルさん、あれってなんですか？」

「こんにちはサルーシャ君、あれは新しい魔力感知器だよ。以前の物より詳しく調べる事ができて、魔力の痕跡に触れたケースでも反応してくれるらしい」

挨拶と合わせて訊ねればそういう答えが返ってきた。

(それだと確実に鳴るなあ、どうつすかな)

<鳴ってるヒトもいるし、大丈夫じゃないかなあ>

(どこで遊んでたのかって聞かれたら面倒なんだよなあ)

<誤魔化す必要もないでしょ、素直にいた場所を答えればいいんじゃない？>

(ま、そうだな。森の奥に行った時も実際あったし、正直に答えりやいだけか)

一々結界張るのも面倒だと思ふ時だつてあったのだ、森の奥でやつてればその場面を見られない限りいくらでも言い逃れできるし。

だから気負いもせず触れて、音が鳴った時も気にしなかった。

そして、不味いと思つたのはウエルさんの方へと振り返った時。

信じられないという表情のウエルさんを見てようやく気づいたのだ。

先程の音が他の人の時と違う音だった事に。

「えっと、ウエルさん？ 顔が怖いんですけど、今の音って何か不味かったり？」

引き攣りそうになる顔を必死になって抑えつけ、なるべく素知らぬ風を装い聞いてみる。

「……鳴る音は感知した濃度によって違うと聞いているよ。残滓に触れた者程度なら低い音が、精霊自身の痕跡を感知した場合もう少し高

い音が鳴り、近くに精霊がいる場合にはもう一段高い音が鳴るそう  
だ」

答えるウエルさんだが、顔は強張り声は震えている。

そこにどんな感情が込められているのか、俺にはわからない。

「出せる音の種類にも限界がある、だから区別するのも最低限だと説  
明された」

いつのまにか彼の手が、俺の肩にかけられている。

「おそらく必要はないだろうと言われたけれど、最悪を考えると設定  
せざるを得なかったらしい」

話が進むたびその手に力が入っていく、震えながらも逃がすわけ  
にはいかないという使命感からか。

「生き物の中に精霊の魔力そのものを感知した時だと」

その言葉が発された瞬間、俺は何もかもを振り切って逃げ出して  
いた。

## 誰にとつても望ましくない結末

しくじった、それだけが頭の中を占めている。

なんで逃げてしまったのか、なんで誤魔化そうともしなかったのか、騙すつもりなんてなかったはずだ、順序だてて説明すれば問題なかったのでは？ これではやましいことがあると大事で叫んでいるようなものでは？ 今からでも遅くない、戻って説明するべきじゃないのか？ 将来的に旅をするために少しずつ物を溜めていてよかつたあれらがあれば逃げてみすぐれに飢えたりはしないはずだ、ずた袋は不恰好だし大きく作りすぎた奴だ持ってかない方がいい、ナイフを用意出来なかったのは痛恨事だ魔法で代用するしかないだろう、ウエルさん泣きそうだった、父さん母さんに悪い事したのでは、e t c e t c ……。

幾つも不味い点が浮かんで消える、いずれもしくじったと言える事柄だ。

<ねえ！ なんで逃げてるの!?!>

(精霊に対しては即時抹殺が許されてるからだよ！)

口を開く余裕もないため心の中だけで怒鳴る。

ウエルさんは特に精霊に対して恐怖心を持っていた人だ、あのままあそこに留まっていたら斬られていたかもしれない。

あの場で死なない、そのための最善の行動は逃げる事だった。

<この後どうするの!?!>

(わからん！ とにかく逃げて命を守るのが最優先！)

いつまで逃げれば死なずに済むのか、そんな事はわからずとも今は逃げる事しか俺には選べなかった。

呆然として座り込むしか彼にはできなかった。

何故あんな風に答えてしまったのか、動揺を抑えてゆっくりと話そうとすれば彼も逃げなかったのでは？ そうだ、彼の意思はしっかりとあるはずだ、なぜなら精霊に入れ替わられていれば精霊の魔力しか感知しない、あの音は生き物の中に精霊がいる場合に鳴る音なのだか



ら。

自分はどうしようもなく失敗した、娘が精霊に狙われていたのかもしれないと思うあまり対応を間違えたのだ。

彼に憑いていたのならわざわざサティを狙う必要がない、他者から魔力を奪えるならばそもそも空気や水からの方が楽だからだ。憑依の対象がすでにあるのに他を探す意味などない、そんな事は馬鹿でも分かる。

つまり、ウエル・ドルスは自身の恐怖心と猜疑心に負けて致命的な失敗を犯したのだ。

その事実が肩に重くのしかかり彼の体を縛り付けていた。

「騎士ドルスー！ 状況を報告せよ!!」

「はっ！」

その怒声に反応できたのは真面目に訓練に励んでいたおかげだろう。

「精霊に関する新たな情報を見つけるため村民全員調査を行なったところ、精霊付きであると感知器が反応を示した子供を発見。感知音に付いて質問されたため答えたところ、子供は逃亡いたしました！」

思考停止状態のまま、今起きた事が口から出てくる。

自分が口にした事実が耳に入る、どこまで愚かなのか僕は、自身を縊り殺したい情動に駆られながらも隊長からの命令を待つ。

「……………っ！ お前は……………！ いや、どうこう言っている場合ではないな。貴様は兵達を集めておけ！ 私は村人を落ち着かせた後、司祭殿とモルモン殿にご助力を願いにいく！」

「はっ」

命令に従い兵達を集めに行くため走り出した直後、隊長が声をかけた。

「騎士ドルスー！」

「!? 隊長、他に何か!？」

「王国騎士として、王国人の常識として貴様の態度は間違っていない。気に病むなどとは言わん、しかし引きずるな！ わかったな？」

隊長の叱咤に背を伸ばし胸を張る。そう、彼の行動に大きな瑕疵はない、より良い選択があっただけで致命的な間違いがあったとはいいがたいのだ。

「はっ、ありがとうございます！ 騎士ドルス、任務のため全力を尽くします」

「よろしい、兵を集めたらここに集合、指示のあるまで待機するように」

敬礼を返しウエル・ドルスは走り出す、その後ろ姿を見ながら隊長はため息をこぼした。

「これから大変になるぞ騎士ドルス、お前が重責に潰されんことを祈っているからな」

そうつぶやくと隊長は教会内へと急ぐ。司祭殿とモルモン婆、現在のこの村の責任者たちと話しを通すためである。

旅に必要なものを隠しておいた場所まであつという間についた、ツクヨの魔法を惜しみなく使った結果だ。

かぶせておいた葉っぱや土をどけ、その下にあつた包みを引っ張り出す。

包みは二重にしてあるから一つ目の包みを捨てれば土汚れとかは気にしなくていい、これだけ持つてとにかく安全な場所まで逃げなければ……。

<安全な場所ってどこ？>

（わからん！ けど、ここにいても良くて実験動物、悪ければ即死刑だ！）

戸惑うツクヨを気遣うこともできず、怒鳴るように思念を叩きつける。

そんな風に余裕のない状態だから気づけなかったのだ。

<！ サルーシャ！>

突然の突風に地面に這いつくばらされる俺、胸が詰まりツクヨの呼びかけに反応もできない。

「ずいぶんと用意がいいみたいだねえ、サルーシャ、の皮をかぶった

精霊は」

その声はよく聞く声だったはずだ。

だが、今は全く聞き覚えがないものにしか聞こえない。

「いや、違った、サルーシャと精霊だったねえ。そうじやなきや鳴らない音だったそうなんだから」

普段の声はぶつきらぼうに聞こえてたんだが、あれでも優しい感情のこもった声だったんだなと理解する。

「詳しく説明してもらおうよ、抵抗するってんなら怪我の一つや二つ覚悟しな？ 精霊相手に手加減できるほど、余裕はないからねえ」

言葉とともに押しつける空気の圧力が強くなる、掘り返したばかりの土に体が沈み込む。

このままでは不味い、上は完全に抑えられて何かする余地はない、ならばどうにかできる道は、

「下だ！」

「むっ？」

土の中というのは意外と生き物が存在している、主に虫などだがたまにモグラやアナグマとかだ。

木や草の根っこなんかもあるので魔法で操る対象としては選ばれにくい。

「でも、それ以外は操れないわけじゃないんだよなあ！」

幸いにもここあたりは俺が物を埋めていた場所、つまり邪魔な生き物は多くないわけだ。

土を操り道を作って婆の操る空気から逃げる、と同時に土で壁を作り婆の視界を塞ぐ。

「そんなもんでどうにかなるとお思いかい！」

当然のごとく吹き飛ばされる土壁、けっこー厚く作ったはずなんだけどなあ！

だけど、欲しかったのはその壁を吹き飛ばすときの一瞬の間、その間に俺はツクヨの魔法で大きく後ろへと跳ぶことができた。

魔法は射程を伸ばせばより多くの魔力を使う、つまりこれで距離という防壁を張れたわけだ。

そしてこの防壁を攻略するためには距離を詰めるしかないが、迂闊に動けばいい的になる。

慎重になってくれれば時間稼ぎができて……

「ガキが！ お舐めじゃないよー！」

って、一気に詰めてきた!?

慌ててもう一度土壁を作ろうとする。しかし、後ろに退がった分掘り返した場所から遠ざかったわけで、土は思ったように動いてはくれない。

間に合わないと思った瞬間婆へと向かって火の玉が幾つも飛んでいく、空中で跳ぶ方向を変えて避けられたが接近されるのは避けられた形だ。

〈サルーシャ！ 油断しちやダメ！〉

「すまん、助かった」

咄嗟にツクヨが手伝ってくれなければ捕まっていた、考えていなかったわけではないがやっぱり俺は戦いのド素人で、

「ふん、一対一じゃなく二対一だったねえ。年を取りたくないもんだよ、数も数えらんなくなっちゃった」

そして、目の前の人は城に呼び出されるほどの腕前を持つ魔法使いだ。

経験の差がこの後大きく響いてくるのは明白、ならば仕方ないだろう苦肉の策だがこれしかない。

(ツクヨ……)

〈くなに？ 意識を外すと危ないよ〉

(お前が主になって戦ってくれ、出来そうだったら俺も援護する。逃げることを目的に、俺と婆になるべく怪我がないように頼む)

〈わかった。でも肉の体を動かすのに慣れてないから避けきれないと思う。なるべく防ぐけど、避けられそうだったら避けてね〉

回復魔法の開発は上手くいってはいないが、血を止めてかさぶたをできやすくするぐらいならやれる。

そちらに集中するためにも体の操作権を一部ツクヨに明け渡す、賭けではあるが命のやり取りですらほぼ素人の俺よりかはましのはず

だ。

渡した途端腕が勝手に動き、指先から火の玉が飛び出した。

婆は操ってる風で地面に叩き落としたが、俺の魔法との違いに気づいたようだ。

舌打ちしながら憎々しげに睨んできた。

「精霊が表に出てきたかい、その前に処理したかったけどね。まあ構わないさ、あんたみたいな精霊退治は初めてじゃないんだよー」

怒声とともに無数の風の刃が襲いかかる、無傷での制圧を諦めたらしい。

ツクヨも対抗して火柱を婆との間に上げ空気をかき乱す、あるものは柱にのまれあるものは乱された気流によって明後日の方へと跳ぶ。

その一回だけでツクヨの技量が高い事を理解したらしい、今はジツとこちらの出方を伺っている。

お互い少しでも多くの魔力を集めるため、対峙しながらも深く静かな呼吸を繰り返す。

こつからは俺らにとつては逃げる隙を探すための、あちらにとつては援軍が来るまで足止めする溜めの持久戦である。

ここは村から近いとも遠いとも言えない辺りの森の中、逃げるためには時間をかけているわけにはいかない。

しかし婆が健在では逃げるのも不可能、魔力をある程度消耗させなければあっさり追いつかれるのがオチだ。

(時間は俺らの敵って状況だぞ、睨み合いだけで大丈夫なのか?)

く今どうにかするための魔法を練ってる最中なの、サルーシャは邪魔しないで>

焦れてツクヨをせっつくが大人しくしてると言われてしまった、なので大人しく呼吸に集中し少しでも多くの魔力を集めていく。

睨み合いは短くも長くも感じたが、先に動いたのは婆の方であった。

操る風が渦巻き始めたと思うとたちまち大きな竜巻へと変わっていく、それも一つではなく三つも同時にだ。

これにはツクヨも仰天したようで練っていた魔法を変更、慌てて氷

の壁を生み出した。

(おい！…これだけで防げるのかよ!?)

<多分無理！…なるべく壁を維持するけど反撃はお願いね！>

(反撃って、風で全部吹き飛ばされておしまいだろ！)

<その辺はそつちでどうにかして！…こつちも余裕ないの！>

氷の壁が風に削られる音が響く中、どうすればこのピンチを切り抜けるか必死になって頭を回す。

竜巻の勢いは凄まじく壁もいつまで持つかわからない、婆だつてこれほどの大魔法をいつまでも維持できないはずだ、我慢比べで婆に勝てるのか？ ツクヨが頑張ってくれているが時間の問題でしかないぞ、壁が崩れてしまえば……

(死……！)

竜巻にのまれボロ雑巾のようにバラバラになる姿を想像してしまい、より焦る、焦る、焦る！…何かないか何かないかと忙しく動き続ける目、耳、鼻、五感の全てを使って何かないかと探し続ける。

氷の壁の向こう、ふと目に止まった物があった。

それは俺が旅のために用意していたずた袋、風の中で翻弄されて最早原型をとどめていない。

そんな物を見た所で何か思いつくわけが……

(下だ！…地中は風の影響が少ない！)

さつきもやっていた土操作を思いついた瞬間、地に手をつけ全力でもって魔法を行使する。

イメージすべきは前世で見たもの、何かを操るタイプの能力者が出るなら一作に一回はやっていそうなそれ。

発動地点を婆の辺りに決めて魔力を無我夢中でできる限りぶち込んだ。

ドシユツと重い音が聞こえた気がした。

<くなにしたの!?!>

(地面から杭を生やした！…悪いんだけど魔力はこれですっからかんだ！)

<私も殆ど残らないよ、これ！…この後どうするの！>

(手ごたえはあったから傷はあるはずだ！ こつちを追えない程度には消耗してるだろうし、後は走って逃げるぞ！)

怪我をしてしまえばこの竜巻ももう長く維持できないはず、そうすれば俺らの勝ちだ。

そう思いながら壁を必死で維持するツクヨを応援するが、なかなか竜巻は消えなかった。

〈なんでこんな大魔法を長時間維持できるのお！ もう保たないよお！〉

(頑張ってくれ！ まだ威力が残ってる、ここで壁が消えたら俺らボロ雑巾になるぞ！)

段々とツクヨの魔力も心許無くなり始め、俺もツクヨも焦燥心でパニックになりかけた頃、唐突に竜巻は消え去った。

〈と、止まった？ 止まった、よね？〉  
(風の音も、氷が削れる音も、しないな)

あちらも魔力が尽きたのだろう、そう思いツクヨは壁を維持していた魔法をやめた。

もはや触るだけで崩れそうなほどに削られていた壁は魔力の供給をやめたただけであっさりと崩れ去り、その先にあった光景を俺たちの前にあらわにした。

そこは竜巻で根こそぎ吹き飛ばされて荒涼とした風景を見せる元森であった場所と、

「嘘、だろ？」

土の杭によって胸の真ん中を貫かれながらも倒れず、事切れた今でもこちらをにらみつける婆の姿だった。

婆の体からふわりと何かが抜け出る、それは少し婆の周りを漂うと一部が俺の中へと入り込んだ。

〈最後の最後まで振り絞ったからあれだけ長時間維持できてたんだ、おかげで増える魔力もこのクラスの魔力容量持ちにしては最低限になっちゃったね〉

生き物が死ぬとそこにあった魔力は周囲の生き物に吸収される、魔力の性質としてそういうものがあつた。

つまり、だ、婆は今死んだ、原因はその胸を貫く土の杭だろう。

「あ、あああ……」

そして、その杭は俺の魔法で作ったもので

「違う、そんな、つもりじゃ」

だから、婆は俺が殺したのだ。

「嘘だ——!!!」

現実を受け入れられない俺には叫ぶことしかできなかつた。



## 思い知る

村の現領主であり騎士ドルスの上官である隊長は目の前の光景が信じられなかった。

ここは村人たちが薪を取りに来る場所から少し外れていたが数日前は確かに木々が生い茂り、地面は草木で覆われ土の色など一切見えやしなかった。

それが今ではどうだ、緑など一切見えないほぼ土の色一色ではないか。

例外はある一か所のみ、そして、その例外こそが隊長とそれに率いられた者たちを絶句させていたのだ。

「モルモン殿……！」

胸の真ん中を土の杭で貫かれながらも倒れず、顔すら下げず目の前を睨みつけたままではいるのは確かにフォルティス王国の宮廷魔術師モルモンであった。

「そんな、モルモン殿が……！」

「精霊退治を何度も成し遂げた御人ですらやられてしまうなんて……！」

(不味いな、兵に動揺が広がっている)

ざわざわと兵士たちが落ち着かない様子で口々に喋り出すのを見て、隊長は決断する必要があることを認めた。

「総員傾注！ 私ともう二人がここに残り調査とモルモン殿の遺体を運ぶ！ 残りの者は村に戻り防衛準備！ ないとは思いますが精霊が村を狙うかもしれん、副隊長の指示に従い村を守るように！ いいな！」

「はっ！」

指示に従い動き出す兵たちを見ながら、隊長はそつと天を仰ぎ見る。

(何かが大きく動き出す、時代とやらが動こうとしているのだろうか？)

動乱の時代が訪れる予感におもわずため息をつく。

(その渦中にいられぬことを喜べば良いのか、部下がそれに立ち向かわなければならん事を悲しむべきか)

いずれにせよ自身は関わることすらできまい、見通せぬ未来だがそれだけは確定だろう。

あの真面目な若者にせめて良き明日が訪れるよう祈る隊長であった。

気づけば辺りは暗くなっており、見たこともない場所に立っていた。

周囲の足元は草で覆われており人はおろか動物の痕跡さえろくにみえない、おそらくは森の相当深い場所にまで入り込んだのだろう。くやつと起きた。もう、あのままだったら捕まっていたからね>

(え? ああ、おはよう? ツクヨ。えっと、ここは……?)

寝起きの記憶の混乱が収まらず、なぜこんなところにいるのかがさっぱり分からない。

<もう! 私残り少ない魔力を振り絞ってここまで飛んできたんだよ? 大変だったんだからね!>

(ああ、うん、ありがとう。ごめん、ちよつと頭が回ってないんだ)

意識を失う前の記憶を思い出そうと頭を回す、たしかとても恐ろしい目にあつて……

「うぐっ!」

<どうしたの!>

一時的な記憶の混濁が収まり気を失う直前の記憶が鮮明に蘇る。

「殺人つてのは嫌なもんだって身をもって知っただけ……」

<サルーシャ!>

なんとか説明しようとしてここまで口にしたが、込み上げる嘔吐感に耐えられずその場で胃の中をひっくり返す。

吐瀉物を見るとまだ原型を留める物がある、ならそこまで時間は経っていないな。

「ぐっ……ツクヨ、追手は来てないのか?」

<うん、ここまで飛んで来たけど、ヒトらしき気配はまったくくないよ

>  
「そうか、なら他の動物に襲われない所に隠れよう、何処かい場所は  
ないか？」

<サルーシャ、ちよつとなにを言ってるの？>

「人間は数がいてこそ自然と戦える生き物なんだ、一人だけの、しかも  
ガキでしかない奴なんてただのエサだろ。早いとこ身を守る場所  
を見つけないと……」

<しつかりしてよサルーシャ！ 私がいる所に他の動物が来るわけ  
ないって言ったのはサルーシャでしょ!?!>

その通りだ、他の動物からみれば精霊は強い、食えない、最悪乗っ  
取られて同種族が根こそぎ殺されるという近寄るわけのない存在な  
のだ。

だからこそ好き勝手森の中を行き来していたのだ、今更忘れるわけ  
がない。

ただ、今はなにかしていないと殺人の重圧に潰されそうだから都合  
のいい理由付けとして言っていたに過ぎない。

「そうだ、な、ああそうだよ、ツクヨの言う通りだ。だけど雨に降られ  
たら体が冷えちまう、雨に濡れない場所探しだけはしておこう」  
<う、うん、それなら、まあ……>

それらを見抜かれてもまだ言い訳をして考えない理由を作る、我な  
がら救い難いと思う。

思うが、今はその事を考えたくない思いが強かった。

安全そうな場所はすぐに見つかった、ちよつどいい大きさの木のウ  
口が近くにあったのだ。

子供の俺より少し大きい程度の穴の大ききで、肉食獣なんかだと  
つつかえて入れそうにない、一晩の宿には文句のない場所であった。

(ここなら寝ても大丈夫そうだな、雨も入り込みづらそうだし)  
<そうだね、でもまだ外は明るいよ?>

ツクヨの言う通り日は傾き始めているが暗くもなっていない程度  
であり、普段ならまだまだ外での作業をしている時間帯であった。

（そうだよな、旅のために集めた物、全部使えなくなったんだから、また集めたり作ったりしなきゃ、なんだよな）

くうんうん、特に食べ物は今夜の分もないんだよ？ 集めないとダメだよ。さっき吐いちゃってるんだし、しっかり食べとかないとね>

（そうだ、吐いた分も食べないと……うぐえっ！）

そう考えた途端吐いた原因まで思い出してしまい、えずいてしまいウロの中でひっくり返る。

<サルーシャ!? なにやってるの?>

（バ、バランス崩しただけ、だよ）

驚いた声を上げるツクヨに答えながら体を再度ひっくり返し座る姿勢へと整える。

そこから食料を探すために立ちあがろうとするが……力が入らず体は座り込んだままだった。

<? 食べ物取りに行かないの?>

（その、思ったより疲れてるみたいだ。少し休んでからにするよ）

<そう? まあ、サルーシャがそう言うならいいけど>

ツクヨの声は訝しげだ、体力的にみれば動けるのは間違いないのだから当然と言えば当然だろう。

安全面では先程までと変わらないのだし、無理にでも動いたさつきとの違いがツクヨにはわからないのだ。

だが、俺はもう動けそうにない、体ではなく心が休みを欲しているのだ。

座ったまま膝を抱え顔を埋める、こうして止まってしまえば考えたくない事でも考えてしまう。

婆の最期を、あの鬼気迫る表情の意味を。

なぜ婆はあそこまで魔力を振り絞れたのだろう、使命感? それとも国への忠誠心? はたまた精霊への憎悪や敵愾心?

仕えているにしてもどういう立場かすら知らない、こんな辺境にまで送られるぐらいだからそこまで強い立場じゃないだろうけど、行ったり来たりだったからそうでもないんだろうか?

「俺、婆の事なんにも知らないんだな……」

<あのヒトの事を知りたいの?>

「そうだな、知ってどうなるわけでもないけど、知りたいとは思う」  
<じゃあちよつと待ってて、今引き出すから>

「は? いや、何を……」

疑問を口にする前に俺の意識はもたらされた莫大な情報の波にさらわれていった。

その女性はこの国の中心、王の住まう城のある都市の城下町にて生を受けた。

幼い頃から賢い子供であり、将来は学者か役人になるだろうと言われていた。

しかし、ある時魔法の存在を知り、強く憧れて終いには当時の宮廷魔術師に弟子入りを認めさせてしまった。

砂が水を吸うように知識を吸収していく少女に師匠である魔術師は困り果てた、自分の持つ知識はすでに全て伝えてしまったからだ。

悩みに悩んだ師匠は王へと願い出る、彼女に最高の環境を与えるためラテベア教と冒険者組合が共同で経営する学院へ彼女を留学させることを。

元々魔法使いの数が少ない王国は喜んで彼女を送りだす、学院は誰でも入学試験は受けられるからだ。

だがその入学基準は厳しく、王国からの入学者はほぼいなかった。そして彼女は見事試験を合格してみせた。

学院での日々はとても充実しており彼女はめきめきと頭角を表していった、同時期に学院に所属した者の中で一、二位を争うほどに。最終的に三位以下を取ることなく卒業した彼女は王国へと戻り、その力を持って王国を強大な物へと生まれ変わらせた。

王国としては是非伴侶を国の所属者からとってもらいたくて色々で見合い攻勢を繰り広げた。

夫は要らぬ魔法が伴侶であり子供であると公言して憚らぬ彼女はそれに辟易し、ある時二年ばかり国から出ていった。

当然国は上を下への大騒動となり、見合い攻勢の中心者は王から

直々に叱責を受け失脚、市井でその生涯を終えたという。

その後はそれ関係の話をする者はいなくなり、彼女はやりたい事を好きにやれる立場を手に入れたのだ。

そして、そんな彼女の生涯最期のやりたい事がこの村だ。

彼女の功績によって幼い頃から魔法を学ばせた方が大成するとう事が常識になっていた。

ならば、もつともつと幼い頃から教育できたなら？

魔法というものの新たな境地を生み出す者が誕生するかもしれない、そんな期待を持って開拓村を作らせる事を認めさせたのだ。

領主の座は丁重に断った、もう先が長くない上に子のいない自分になっても相続で揉めるだけと思ったからだ。

そして、待望の新たな境地を生み出す者、自身の後継者と言える子が現れた。

その子供は理屈っぽく半年かけても魔力を感じ取れない鈍い子供であったが、感じとれた後は驚くべき速度で魔法を使いこなしていた。

風で刃を作るのは一番早く、魔力の最大値を増やすための魔法を一年で自力でできるようになったのは一人だけ、研究者でもなければ思いつかない事も聞いてきたし、ポーション作りに興味を示したのだからその子供だけだ。

そのせいで期待をかけすぎて色々やらせすぎたのは少々反省する点だ。

だが、それすらその子は超えてきた、だけでなく自主練までこなすほど。

きつと、自分さえも超えていく、そう確信できる子供だったのだ。

だから、精霊に誑かされたと聞いた時は頭に血が登った。

現領主である騎士にもラテベア教からの協力者である司祭にも邪魔しないように言い放って飛び出した。

見つけた瞬間に制圧のため風で抑えつけたが、操りづらい筈の土を操つての脱出と壁の生成。

才能を遺憾無く発揮する姿に喜びすら覚えるが逃がすわけにはい

かない、一気に詰めて首根っこ抑えようとする。

しかし、精霊に邪魔をされ思うようにいかない。

放たれた火は飛ばしやすい球形、精霊のくせに考えられた魔法の使い方をする。

ならば、最大級の魔法でもって抵抗できないほど魔力を削るしかない、歴戦の勘で素早くそう判断する。

思惑通り奴は防戦一方に追い込んだ、後は魔法が切れぬように集中するだけ、だったはずなのだ。

突如土の杭が飛び出し自分の胸を貫くまでは。

精霊は防ぐのに精一杯のはず、なのになぜ？ そんな疑問はすぐに解けた。

先程だって行使していたではないか、見事なまでの速さで生成される土壁を、だ。

死に際し恐怖はなかった、それよりも自分を超えていく子供によくぞという賞賛だけがあった。

だが、それだけに惜しい、このままではこの子は人間の敵になってしまう。

それだけは嫌だと全ての魔力を振り絞る、魔力が尽きて動けなくなれば後からくる騎士達に保護させる事も可能はずだ。

この子を人間社会に留める、その願いを込めて魔法を維持し続ける。

どうか、どうかこの祈りが届きますように。

それだけを想い、二度と目覚めぬ眠りについた。

「あああああ!!」

叫んでいた、遺体を見た時と同じように。

どうして、どうして、どうして！ 俺は逃げてしまった！ 殺してしまった！ どれだけの想いを向けられていたか理解しなかった！

少しでも冷静さを保つことができていればこんな事態にはならなかったはずなのに！ 本当の祖母のような愛情を向けてくれた人を、なぜ!?

<サルーシャ！ どうしたの！ なんて叫んでるの!?!>

だが、その時はこいつを見捨てる羽目になつていたので？ 核を個人が所有するような真似を組織が許すか？

あるわけがない、確実にこいつは排除される。

そう、俺はすでに選んでしまったのだ、人間側ではなく精霊側に立つ事を。

婆を殺したという事はそういう事だと理解してしまう、最早後戻りなどできないのだ。

叫びが止まり放心するように膝に顔を埋める、失ってしまったものの大きさに打ちのめされる。

<サルーシャ？ なんで今度は泣いているの>

気づかぬうちに涙が出ていたらしい、感情が限界を超えてしまったのだ。

<あ、こういう時はこうすればいいんだよね>

もう何も考えたくない、そう思い心を閉ざす直前、何かが耳に聞こえてきた。

「眠れ良い子よ、父さん明日には帰るだろ。

坊やにお土産沢山で、優しく抱きに帰るだろ。

眠れ良い子よ、母さん隣で歌うだろ。

坊やが寒くないように、優しく抱いてくれるだろ。

眠れ良い子よ、明日も良き日になるだろう」

ツクヨが歌っている、驚きのあまり涙が止まった。

<眠かったんでしょ？ 眠るまで鳴らしておくから、寝ちやつていいよ?>

頭を撫でるように風が吹いた、いや、ツクヨが撫でているのだ。

<大丈夫、大丈夫だよ。心配しなくても明日は来るよ、ゆっくりお休みね>

ああ、プルケさんがサティを寝かしつける時そのままじゃないか、対象の年齢が違うぞ。

そう思うが、今はこの心地よさに身を委ねていたい。ゆっくり目を閉じて眠るとする。



「眠れ良い子よ……」  
俺が眠るまで静かな歌と頭を撫でる優しい風は途切れることは無  
かった。

## 独り立ち

「隊長！　どういう事ですかこれは！」

領主の執務室に朝早くから飛び込んできたのは騎士ドルス、真面目な彼にしては珍しくノックもなしの入室だ。

「騎士ドルス、私は入室の許可を出した覚えはないが？」

「はっ！　申し訳ありません！　ですが、納得出来かねる辞令が来ましたので問い正したく思い参りました！　質問の許可をお願いいたします！」

からかい混じりの叱責にも動じず自分の要求を口にする、どうやらよっぽど納得できないようである。

「まったく、そんなに不思議か？　元々次期領主として研鑽を積んできた身だろう、その時が来たからといって動揺してどうする。どつしりと構えて謹んで拝命いたしますと言えればいいだけだぞ」

「その拝命理由が納得いかないと申し上げているのです！　なぜ精霊排除の功が私に与えられているのですか！　本来なら無闇に現場を混乱させた罪により解任か死を賜るべき事例のはずです！」

彼の主張としてはこうだ、今回の精霊事件は自分が無思慮に感知器について話したが故の暴走でありその責は全て自分にある、精霊を退けられたのもモルモン氏の命がけの行動の賜物であり功は全て故人のもの、それを掠め盗るがごとき行いは国に対する裏切りに等しい、と。

「ふむ、貴様の主張はよくわかった。そこまで言うならば詳しい事情を説明するでしょう」

一つ頷くと隊長は奥の部屋へと向かう、無論余人に聞かせないためである。

部屋に入るとウエルを座らせ棚からグラスを二つと酒瓶を一つ取り出した。

「隊長、まだ昼にもなっておりませんが……」

「そう固いことを言うな、こんな話、素面で話せるものか」

そういうとウエルと自分の前にグラスを置き少々乱暴に酒瓶から

中身を注いだ。

「生憎とそこまで給金が高くないのでな、安酒だが悪くない味だぞ」

「はあ、それではいただきます」

飲まなければ話を進める気がないことを悟った彼は仕方なくグラスに口をつける。

「!! ゴホツ、ゴホツ!!」

その途端酒精の強さにむせ返った。

「はっはっはー！ 強い酒を飲むのは慣れていないか？ これからは酒宴に参加する機会も多くなる、慣れておかんと辛いぞ？」

「です、から、私にはまだ早いと……」

「そう言っていられんのだ、ウエルよ」

自身の未熟を自覚するウエルはそれをも含めて今回の辞令に反対なのだが、隊長の悲しげな声で息を呑む。

「よいか？ 此度の件、本来なら責任者達全ての首がすげ替えられて然るべき事態なのだ、貴様も含めてな」

それはウエルとて重々承知だ、だからこそ自分だけがそこから逃れ栄達するなどもつての外だと主張するのだ。

なんといつても自分の迂闊な行いによって起きたも同然なのだ、むしろ自分のみに責を負わせる形にするのが当然とまで思っていた。

「貴様のみに責を負わせればいいと思っっているようだが、それは不可能だな。そもそも精霊付きに気づかない時点で領主としては大失態だ、村が無事だったのはただの偶然でしかないと言える。

しかし、ここで疑問なのだがいつ精霊が憑いたのか？」

「いつ、ですか？」

「そうだ、普通ならば精霊は憑いた時から虐殺を始めるものだろう？」

だが、あの子が森に行ったのは朝早く、そこから教会までに何人かの村人と挨拶を交わしていると証言がある。

おかしいのだ、精霊に憑かれたにしてはな」

言われれば確におかしいと思うのだが、それがいったいどう繋がっているのだろう。

「そこで、だ、私と司祭殿は大胆な推論をたててみた」

ピンと指を立てて心なしかドヤ顔で隊長は推論とやらを口にした。  
「あの子が迷い子になった5歳の時、その時にはすでに憑かれていた  
のではないのか? とな」

「……はあ?」

呆れで物も言えない、そんな気分であった。

「隊長、精霊にそんな知恵があつたら人はもう滅んでいるでしょう。  
あの時隊長も司祭殿もそう言っていたではないですか」

「おう、その通りだな。では、いつ憑いたのだ?」

「いや、それは分かりませんが……それにしたつて無茶がありすぎま  
せんか」

「その通り、無茶がある。しかしだな、精霊が村の中に突如発生し、  
偶々そこにいたサルーシヤ君に憑依、すぐに気づかれたので即逃亡。  
なんていう推理よりかは納得できんか?」

『偶々そこに発生した』よりかは『偶々知恵の回る精霊がいた』の方が  
まだ安心できるしな」

確かに前者よりかは後者の方がまだ対処のしようがある。

前者は精霊の発生条件を調べなければならぬが、後者は感知器を  
活用すればいいだけだからだ。

「隊長の推論は理解できました。ですが、それが私が責任を問われな  
い理由とどう繋がるのです?」

「何を言う、貴様だけだろうが憑かれているのではと疑ったのは。更  
にその精霊の邪悪な企みを暴いたのも貴様だ、功があるといつていい  
だろう」

「無理を通せば道理は引つ込む、でしたか、詭弁を弄してまで私を庇う  
のはなぜなのです? 父への配慮でしたらやめていただききたい、逆に  
そんな卑怯者に育てた覚えはないと絶縁されかねません」

ウエルの言う通り騎士団長は清廉な人だ、詭弁を弄してまで子を庇  
われれば逆に不快に思うだろう。

だが、それを無視してでもやらねばならない。

「先程貴様は言ったな、功があるのはモルモン殿だけだ」と

「ええ、言いましたか……?」

「では、モルモン殿の願いを叶えるのは当然の事、そうだな？」

何が言いたいのかウエルにはわからない、わからないが故人の願いを叶えたいという意見には賛同できた故に頷く。

「モルモン殿の願い、それは魔法の新境地を開拓できる者が、自身の後継者が生まれることだ。」

そのための場所がここであったのだがな……知っているか？ 魔力が集まる場所には精霊が現れやすい、という話を。俗説ではあるが信じる者も多い説であり、それを根拠にこの村を廃するべきと主張する者もいるのだ。モルモン殿が実力で黙らせてきたが、それでもなくなるならぬ程度には根強い意見だよ」

そこまで語ると隊長はグラスの酒を一気にあおり、あとは黙り込んでしまった。

ここまで説明されればこの後の流れはいやでもわかる、この間の一件で反対意見を力で封じてた本人がいなくなったのだ。当然反対勢力は勢いづくだろう、事の原因が反対派の主張する意見に近いのもまた悪い。

裏の話を今日初めて聞いたウエルであったが、放置すればこの村は確実に廃村となる事がよく理解できた。

「それを防ぐために無理にでも私に功績があると主張されたのですね、この村を守らせるために」

「そういうことだ、すまんが頼めるか？ モルモン殿には世話になったのでな、出来る限りあの人の夢を残したいのだ」

「そうであれば無能非才の身ではありますが、全霊を以て挑ませていただきます」

「すまんな、助かる」

改めてグラスを掲げ合う二人、強い人であった女性魔法使いへの献杯であった。

「それにしても……先に詳しい説明をしてくれてもよかったのでは？」

「ああ、それは、なあ、こうすれば村を守れると思つてすぐさま報告を上げたのだがな、それで安堵してしまい、つい……」

「つい、ではありませんよ。私が父や騎士団に先に行ってたらどうするつもりだったのです」

「……先にこちらに来てくれたのだ、問題ない！」

「気まずいからといって黙っておくとより酷いことになる、よく言われる事だったはずですが？」

「すまんすまん、反省しているので司祭殿と同じような事を言わなくてくれ」

「その言い様、すでに怒られた後ですな。なぜすぐに行動されなかったのです」

「悪かった、本当に反省している、だからこれ以上は勘弁してくれ。まったく、説教くさい事を言い出すのは司祭殿の影響か？」

「でしようね、司祭殿と隊長には沢山学ばせていただきましたから」

「そうか……」

「そうですよ……」

それからこの朝方の飲み交わしは兵が報告に来るまで続いた。

そして、これがウエルにとって騎士から領主へと意識が変わるきっかけであったのである。

<おはよう、よく寝てたよ。元気出た？>

「……おはようツクヨ、お陰で大分気が楽になってるよ」

朝ツクヨに起こされて目を覚まし、ゆっくりとウロから出て体を伸ばす。

あれだけ重かった手足が軽い、一晩木のうろの中で休みんだおかげで多少は気力が戻ってきたようだ。

軽く朝食となる木の実やキノコを焙つたりして腹に収めた後今後について考える。

「これからどうするかな……」

<はい、私はヒトになりたいです>

そこはブレないよな、ならどっかに紛れ込む必要がある。

森に引きこもるのは不可能じゃないし、もしかしたら隠れ里みたいなところがあるかもしれない。

だが、やっぱり大都市に、それも治安がある程度悪い場所に潜り込むのがいいと思う。

<どうして？ ヒトがいるところならどこでもいいけど、襲い掛かってくる奴がいけないほうがよくない？>

「治安がいい場所には教会もあるだろうからな。一人と複数名、襲ってくる相手としてどっちが対処が楽かって話だよ」

<……一人の方が怖かったんだけど>

「へい、ツクヨ、婆は例外枠だ。いくらなんでもゴロゴロいるってクラスじゃないと思うぞ」

多分国に一人とかそのクラスだと思うんだよな、ちらつと婆の記憶を見た感じわがままを力で押し通してたし。

ゴロゴロいたらおとなしく森に隠れ住もうとは思うけど……。

「とは言ってもろくに地理を知らないからな、とりあえずは村から離れる方向に向かって進んで人が多い場所を探そう」

探す方法は高く飛んで広く見渡す、名付けて『自分がドローンになる』作戦である。

<ドローン？>

「鳥の一種と思えばだいたいあってるぞ、なんでそれにしたかは特に理由はないから気にするな」

高空を飛んでも魔法で寒さを防げばいい、俺が無理でもツクヨにやってもらえばいいしな。

「なあツクヨ、人になった後何したいってのはあるか？」

<くんー？ 考えたことないなあ。ヒトの生き方ってよくわからないことも多いし、ちよつと想像できないや>

「そんならさ、魔法の研究者になるのはどうだ？ ツクヨなら魔法の新境地ってやつを開けると思うし、俺も協力するし、どうだ？」

<……それは、婆の願いだったから？>

「やっぱり、わかるよなあ。ああ、婆は俺に後継者になって欲しかったみたいだけど、魔力操作って面だとツクヨにや及ばないからな」

婆は最後に俺が人間社会から離れないよう祈ってた、故人の最後の願いぐらい叶えるべきだと思う。

人に有用な存在でいられば人外であっても受け入れられるのではないかとおもうし、な。

＜発想だとサルーシャにまったく及ばないんだけどなあ。まあ、サルーシャのお願いならいいよ、研究者っていうのを目指してあげる＞  
「ああ、ありがとうなツクヨ。できる限りの協力するから、よろしく頼むわ」

ツクヨに感謝しながら歩き始める、まずはこの森の中である程度食料を集めよう。

二、三日分ぐらい集まったら出発だ、村から遠くを目指して歩き出そう。

ずっと先の未来でこの時を振り返った時思った、俺とツクヨの世界を巡る旅はこの時が第一歩だったのかもしれない、と。



## 1章

### 猿、荒野を超えて

かろうじて草がまばらに生えている程度の荒野、時折姿を見せる動物は自らが生きられる場所を探す放浪者。

そんな命の営みが乏しい場所に小さな影、それもまた自身の居場所を探す放浪者であった。

「あー！ まったく景色が変わらんのキツツイ！」

くだから飛ばうって言ったのに、徒歩こそ旅の醍醐味なんて言うからだよ>

……放浪者すべてが余裕のない悲壮感だらけなわけではない、たまにはこんな例外もある。

しかし、こんな子供が荒野で大声を出していたら肉食動物に襲われないだろうか？

「くっそ、この辺の動物はもう襲ってこねえか。学習能力高えじゃねえか」

<食料補給兼実戦経験のいい相手だったんだけどね>

言動と行動がほとんど蛮族である。

いや、意味もなくやっている訳ではないのだ、森から出る辺りでの会話だがこういうものがあつた。

「ツクヨ、これから俺らは治安の悪い場所に行く、その時丁寧な口調では目立つと思うんだ」

<丁寧さが必要な相手はまともなヒトのみだからだったっけ？>

「そうだ、そして治安の悪い場所ではまともなヒトの割合は非常に低い。必然的に丁寧な口調の人は少なくなるわけだ」

<ふむふむなるほど>

「なので、これからしばらくは乱暴な口調になれるため丁寧な口調は使わないようにしようと思う、違和感あっても我慢してくれ」

<はい、了解だよ>

これも目立つことで精霊であるツクヨの存在がバレないようにす

るための行動である。

ちなみに、ツクヨはサルーシヤの中で自分の気配や魔力を感知できないようにする結界の練習中である。

表に出て魔力を出したら生き物が近くに来る事はないので仕方ないのだ、また感知器にあつても大丈夫にするためでもある。

そのための動物の相手はサルーシヤが一人でやってるのだが……。

「お、待ち伏せだな。ハイエナの仲間っぽいな、草もまばらな場所で上手く隠れてるもんだ」

ちようど今野生動物に囲まれ襲われるところである。

ちよつと野生を舐めた態度じゃないかって？ その通りであるが、ある意味仕方ないのだ。

サルーシヤの後ろから死角をついて飛びかかるハイエナ（の近種）が一匹。

その爪が届くかという瞬間、サルーシヤとハイエナの間閃光が走った。

バヂイ、と明らかにやばい音を立てた後、肉の焼ける匂いが辺りに漂い始める。

「うーん、ちよつと出力が過剰だったかな？ もうちょい弱めないと対人には殺害目的にしか使えねーや」

<でも便利でいいんじゃない？ 耐えられる奴はそうはいないよ？>

「それが問題なんだよ。後魔力効率はよくないしな、要改良だわ」

何が起こったかわからず戸惑う残りのハイエナたち、彼らが飛びかからずにいたのは正解である。

目を凝らしてよく見れば見えたかもしれない、サルーシヤの周りに浮かぶ時たま光る球状のなにかが。

それがサルーシヤにとびかかろうとすれば避けるのは難しいぐらいの数が一定の間隔で並んでいた。

「結界だところちから攻撃できないし魔力の消費は激しいしと欠点が多かったからやってみたんだが、消費がおんなじぐらいじゃ意味ないな」

＜間スツカスカだからヒトが使う武器とかだとあっさり抜けちゃうしね＞

「面白いアイディアだと思っただけどなあ、真空で閉じ込めた雷を浮かべるのって。使えない訳ではないが、上位互換がいくらでもあるってところだな」

術者の動きに合わせて動くようにするの苦労したただけどなあ、などとぼやきつつ氷の礫を生み出すサルーシャ。

手の上に生み出したそれらを無造作に投げてハイエナ達の鼻先にぶつけていく、ただでさえ先の一頭が返り討ちにあつたのもあつて群れはあっさり散っていった。

「さすが野生動物、少しでも危険だと判断したら即逃走にかかるか。そうじゃなきゃ野生じゃ生きていけないってこつたな」

逃げ散つた群れからあっさり意識を外し、残されたハイエナに目を向ける。

「多少火が通ってるが、ま、問題ないか」

浮かべていた雷球を消し、代わりに右手に刃を生み出す。

サルーシャは残されたハイエナから魔力が抜けるのを確認すると、徐に解体を始めるのだった。

「まずは血抜きっと」

首に切り傷をつけ血を出させる、心臓が止まっているのだろう、その勢いはたいしたことはない。

これでは血が中に残り酷く臭う肉になってしまいうだろう、魔法がなかったらであるが。

血が流れている傷口に手を当て村にいた頃習った魔法を使う、すると流れ出る血の勢いが一気に激しくなった。

狩った獲物の血抜きに欠かせない『血抜きの魔法』である。

本来ならこの血は捨ててしまうのだが、放浪中のサルーシャには貴重な塩分補給手段である。

噴き出す血を落とす事なく球状に丸め宙に浮かべると、なにやら板状の結界を四つ並べて電気を流す。

少し待った後五分割された血の球の真ん中に口をつけ、思いつきり

啜り込んだ。

「あー、血の匂いがキツツイ」

「これも魔力効率悪いよね、やっぱり塩を直接取り出す魔法の方がよくない?」

「否定できないがな、一応物理法則が同じか調べるって目的もあるんだよ」

「イオン膜製法だっけ、魔法でやるなら水分を奪う方がイメージしやすい分効率良さげだよ?」

「いつか大規模な塩田作る時が来るかもしれないだろ? その時のための実験だよ、将来への布石って奴さ」

「やれるか試したいが8割とみた!」

「残念、9割5分だ」

軽口を叩きあいながらも手を止めずに、スムーズに内蔵を外し皮を剥いでいく。

荷物になるので毛皮と一部の肉（それでも8歳の子供には大分多い）のみ持って後は捨て置く。

持っていく肉にしても水分を奪ってカラカラに乾かし、保存性を上げなるべく軽くしてからだ。

「結構な大物だったぜ、水分飛ばしても重いもんなあ」

「そろそろ森で作ったズタ袋が皮でいっぱいになりそうだよ? 食

料入れる場所を考えるとこれ以降は捨てちゃった方が良さそう」

「金になりそうもんなんてこれぐらいだから、なるべくとつときたかったんだが……仕方ないか、次からは肉だけでもらつてこう」

なお、毛皮はなめしてからしまっている……魔法で、であるが。

できない事はないのだが魔力の消費量と、普通になめす労力を比べるとそんな魔力の無駄遣いのようなことはだれもやらない。

悠長になめしていられる時間もないし安全な場所もないので、仕方なしにやっているのだ。

「まあ、空気中の魔力を貰ってくるの限界そうだったしちようどいいか」

「サルーシヤの魔力量だと一枚ですつからかんだもんね。やった後

は数時間は魔力を空気からもらい続けなきやだし、おかげでこの周囲の魔力もすっかり薄くなっちゃってるよ。むしろやめられてよかつたかもね」

「魔力操作の練習にはびったりだったけどな」

ケラケラと笑ってみせる余裕すらある。

荒野に行く旅なのに割と気楽そうなサルーシャとツクヨであった。

そんな風に魔法の実験と動物の撃退経験を積みながら荒野を進む事数週間、サルーシャはとうとう人の住む都市の見えるところまでやってきていた。

「ようやく見えてきたな……」

＜声に力がないけど大丈夫？＞

ツクヨの指摘通りサルーシャの声は弱々しい、魔法を使って気楽な旅をしていたはずなのに何故だろうか？

「考えればわかる話だよな、魔力の使いすぎは体力を削るなんて事……」

＜考えてなかったんだ……＞

そう、調子に乗って魔法を使いすぎたサルーシャは今くったくたに疲れているのだ！……ただの間抜けである。

必要なことにのみ使っていればこうはならなかっただろうに、欲張って技術の習熟を上げようとした結果である。

向上心が高いのだとフォローする余地もあるが……

「周囲から集めるばかりだと使用感が薄いのもあるかもな。限界のライン見極めるためにももうちよい慣れたい、とっとと安全に休める場所見つけないとダメだな」

それよりもサルーシャが持つ危機感が薄すぎるのかもしれない。

いや、警戒心がないわけではない。持っていたズタ袋は盗まれないように少し離れた場所に埋めて保管しているぐらいだ。

……また土の下かよ、リスかお前は、などと言わないであげてほしい、誰にも見つからないように隠せる場所など根無し草にあるわけないのだ。

閑話休題、見える範囲をざつと見渡したサルーシヤは都市壁へとこつそりと近づいていく、なるべく門から離れた昼でも薄暗い方へとだ。というのも、自分ぐらいの子供が門番に見つかったら誰何するだろうと思っただからというのと、

(遠目からだどわかりづらかったが、やっぱりあつたな都市内に入れない奴らのたまり場)

このように貧民窟といえるような場所があればと期待したからだ。くなんで直接中に入らないの？ このぐらゐの壁なら上を飛ばばいいんじゃない？<

(んー、門のところに入らなればたろ、あれって怪しい奴や危険な奴を入れさせないためのものなんだよ。だから、そういうことする奴は自分は怪しい奴ですって自白してるも同然なんだな。ついでに俺は今絶賛怪しく危険な奴扱いされる可能性が高い、つまり都市内に入るのは現状無理ってわけだ)

<村で精霊を警戒してたのと同じなのかな？>

(そんな感じだな。都市内にはいれない、けど寝るとき体が冷えない、襲われないもしくは襲われづらゐ場所が欲しいとなると、こういう場所しかないわけだ)

<ここホントに冷えない、襲われづらゐ場所なの？>

目の前には廃材の群れにしか見えないような瓦礫の山、ツクヨの今までの記憶からするととてもヒトの家には見えない。

(いや、俺らからすると森の中の方が安全で襲われにくい場所だけだな、……婆の事を考えると人里から離れたくないんだよ)

懐疑的なツクヨに苦笑しながら返すサルーシヤ、今を生きるならば森で暮らした方が正解であるのは間違いない。

だが二人の目的を考えれば人里から離れて生きるのは悪手、多少の環境の悪さを飲み込んででも都市の近くで生活すべきなのだ。

(わかってくれたなら早速この中から多少でもましな板とか探そう、土に直接寝転がるのはもうやめときたい)

<待つてサルーシヤ、周り囲まれてるよ>

(やっぱいるか、同じような境遇で同じ思考にたどり着く奴なんて)

周囲にはいつの間にか多くの人影、余所者が近づいてきたらこうなるだろう予想はできていた、ただ少し予想と違う部分もあった。

「おい、余所者が何の用だ？　ここら辺がこのローグ様の縄張りを知ってのことか？」

周囲を取り囲む者たちは全員子供であり、目の前の瓦礫の山の上から声をかけてきたのもどうみても子供だったことである。

## 強みで押すのが戦いの基本

「おう、ビビっちまって声も出ねえのかよ。何とか言ったらどうだ、ああ？」

こちらを見下ろし凄む小汚いガキ、あいつがこの集団のトップなのだろう。

ローグとか言ってたが意外と整った顔立ちをしている、今はチンピラにしか見えんが多分身綺麗にしてたら良いとこのおぼっちゃんつて言っても通じる気がする、今はチンピラにしか見えんが。

「いやいや、すみません。こんな沢山の方々に囲まれるなんて滅多にないことですから、ついブルっちゃってます。ローグさん、あいや、ローグさまの縄張りだなんて知らなかったんですよ。この辺には初めてきたんですが、こんな大勢を率いる方がいるとは思っても見なかったですわ」

<サルーシャ、変>

(うっさい、集団に紛れ込むのが目的なんだ、トップに気に入られるのは必要な事なんだよ！)

自分でもわかってることを指摘されるのはイラっとくるものだぞ！

ゴマ擦って太鼓持っていい気にさせるのが一番だから仕方ないのだ。

下手に出る俺を見て周囲のガキがニヤニヤしてるのが不快だが、こは我慢の一手。

逆に考えろ、この程度で侮る奴らなら騙すのなんてわけないこと、むしろ楽できてラッキーだと。

内心のイラつきは表に出さず、卑屈に見えるように振る舞う。

さあ騙されろ、子分にしても問題ない奴だと思え、お前らをいい気分にするぐらいどうって事ないんだからな。

そう思いながらヘコヘコしていたんだが……

「……舐めやがって」

ローグの奴がなにか呟き、近くのカキどもに向けて顎をしゃくつ



た。

その途端取り巻き連中が山から降りてくる、なにやら物騒な雰囲気  
を漂わせながら、だ。

「あの、なにか、気に障った事でも……？」

「気に障る？ ああ、気に障るなあ」

「ギリギリと包囲を縮めてくる奴らに目を向けつつ訊ねれば不機嫌  
そうな声。

「おめえみてーな目はいやんなるほど見てきてんだよ」

逃げられないように取り囲む、大分慣れが見えるのは気のせいじゃ  
ないだろう。

「腹の底で俺らをバカにしてやがる奴の目はな！」

その声を合図にガキどもは一切に殴りかかってきた！

<サルーシャ！>

（手を出すなよ！ お前じゃどう考えてもオーバーキルだ！）

大振りのテレフォンパンチを繰り出そうとしている前側のガキに体  
当たりをかましつつ、ツクヨに手出し無用を告げる。

（後、魔法使う気はないから後の治療用に魔力練つとけ！）

<ええっ！ なんで!?!>

後ろから掴みかかろうとした奴に馬みたいな後ろ蹴りで撃退。

（大事になるとか、仲間になるつもりだとか色々あるけど！）

蹴った脚を横からきた奴に取られそいつごととずっこける。

（一番は、子供の喧嘩に武器は御法度だからだよ！）

<……なにそれ、わけわかんない。いいよ、なら私はこもってるから  
終わったら呼んで！>

馬乗りになられ顔を殴られたのでその拳に噛み付いた時を境に、  
ツクヨは中に閉じこもってしまった。

ついでに俺の反撃もそこまで、そっからはひたすらボッコボコにさ  
れるだけであった。

数の差はちよつと体格がいい程度では覆せない、当たり前前であるが  
世界の真理の一つをその身で味わった俺であった。

目が覚めた時に言う定番と化したネタに『知らない天井だ』って奴があるだろ？ あれって仰向けで寝てたからそう言えるんだよな。

なにが言いたいのかって？ 簡単な話だ、俺が気絶から目覚めた時仰向けじゃなかったってことと、

「おらあー！ いつまで寝てんだこらー！」

モーニングコールは顔面への蹴りだったてことだ。

「おい、起きたならなんとか言ってみろ」

「……知らない靴底だ」

「ああ、っ！ まだ余裕そうじゃねえかよ……」

なんとかかって返そうかと思っただが、喧嘩売りすぎかなあって思っただのにしたんだが……あんま変わんなかったか。

「テメエ、自分がどういう状況なのかわかんねえのか？」

ふむ、自分の状況か……

「とりあえず、ふん縛られてどっかの家の中にでも居るってところか？」

「わかっててその態度とは、テメエやっぱ俺らをバカにしてんだろ」

相当ピキピキきてるなこれは。バカにはもうしてないんだけどなあ、素で対応してるのがその証拠だ。

「それよか、あんた一人か？ ローグさんよ」

「おうよ。テメエにや聞きてえことがあつからなあ、他の子分どもに見せたらビビっちゃうこともできるように俺一人だけ？」

おっと、逃げようなんて思うなよ。この家の周りには沢山の子分がいつからな、すぐに捕まえられるぜ？」

逃げようとは考えてないんだよなあ、だって手段を選ばなければ殲滅も全員拘束もあつさりできたんだから。

「で、俺に聞きたいことって？」

「なあに、簡単なことだぜ。テメエ、金をどこに隠した」

「金……？」

「惚けんな！ そんないい服着てるくせに体のどこにも金がねえ、ここにくる前にどっかに隠したんだろうが！ 素直に吐きやよし、吐かねえんならもつと痛い目に遭ってもらうぜ……！」

そういえば村だと金ってほぼ使わなかったなあ、子供だから持たさ

れなかつただけで村に貨幣経済が浸透してないわけではないが。

必要な物は自作か譲ってもらうかで、金銭取引は全然やってなかったわ。大人たちの間では普通にやってたけど、子供にはお金を持たせない方針だったのだろうか。

いや、それって俺だけか？ よく思い出すと他の子は行商人から玩具買ったとか言ってた気がする。

というかい服なのか？ 確かに俺の体に合わせて採寸した新品だったけど、擦り切れたり穴が開いてないだけなんだが。

「おいおい、ダンマリかよ。どうやらもつと痛い目にあいてえみてえだな！」

「まあまあ、ちよいと待ってくれ、そっちの期待するような物は残念ながら隠してないんだ。そのあたりどう説明すつかなと悩んでたんだよ」

「ふん、判断するのは俺だ、いいからとつと隠し場所を吐くんだよ」  
凄まれたんで素直に考えてた事をしゃべってみせるが、どうやらお為ごかしと思われたようだ。優位に立っているという考えからくる優越感と、それなのに怯えない俺への苛立ちと半々ぐらいで再度命令してきた。

「多分それ専門の業者じゃないと買い取ってもらえんと思うけど、いる？」

「あん？ 宝石とか美術品って奴か？ ちつ、いけすかねえくそ野郎に頼むしかねえか」

「違う違う、毛皮だよ」

「……？ ああ、貴重な種類の奴か。そういうもんも美術品に近い扱いだと思っぜ」

「いや、普通の肉食動物。荒野に生息してる群れで狩をする奴の」

目をパチクリさせるローグ、そうしてるとほんと顔立ちがいいのが際立つな。

「テメエ、ふざけてんのか！ そんなもん後生大事に取っとく奴がいるか！」

「狩人にとっては飯の種の一つだぞ？」

「テメエは狩人じゃ……」

ローグの奴が言い終わる前に魔法で周りの空気を固めてやる、呼吸は最低限できるぐらいにしてあるがかなり苦しい筈だ。

ついでに俺を縛る縄を切って自由に動けるようにしておく、もう縛られてる必要がないからな。

「……！」

「おっと、悪いが逃がさないよ」

その状態でも冷静な判断ができるようで、素早く出口に行こうとするのを空気を固めて壁にして止める。

「危害を加えるつもりはないさ、狩人やれる実力がある事を証明しただけで」

「テ……メエ……どつかの……回しもんか……!? 上等だ、俺を、殺れるもんならやってみろ！」

うっわ、すげえ根性。辛うじて呼吸ができるかってぐらいに空気を固めているのにそんなに叫べるなんて。

叫べば周りの奴らが何事かと思つて入ってくるはず、そう判断したから多少無茶でも叫んだんだろうな。

「残念、外には聞こえないようにしてるんだな」

ローグの顔色が悪い、外の反応がまったくない事で俺の言葉が真実だとわかつたらしい。

「……なにが望みだ？」

「おっ？ どうしてそんな事を聞くんだ？」

「ふぎけん、圧倒的な有利に立ってたはずなのにわざわざ子分どもにボコられてたのはこの状況を作るためだろうが。俺にだけ聞かせたいなにかがあるなら、勿体ぶつてないでとつとと言え」

ふうむ、期待以上に頭がいいなこいつ、なら簡潔にいこう。

「そんじゃあ俺をあんたの下に置いてくれ、大つぴらに使う気はないが俺の力は便利だろ？」

「大つぴらに使う気がないって、俺に利がねえだろ。誤魔化しをひたすらやれってか、ああ？ 体のいいテメエのための隠れ蓑扱いかよ」

言うべきは言うか、こつちにも押し切れない事情があるって気づい

ているんだろうな。

これはいい頭かしらを見つけたのかもしれないな。

「基本俺の仕業つてばれなきやいいき、いざつて時は少数になら、ばれでもいい。それに俺の方が力があるつてばれないほうがいいだろ？」  
「で、俺が頭なことが都合が悪くなつたら切り捨てるんだろ？ それで子分ども丸まる奪われたら間抜けつてレベルじゃねえぜ」

うーむ、リスク管理がしつかりしてやがる、そのくらいじゃないとこの辺りで子供たちだけで生きてけないんだろうな。

「そんな事はしない、つていうかできない。俺の方の事情でな」

「へえ、なら話せよ。知らねえうちに巻き込まれた、なんて冗談じゃねえからな」

「話してもいいんだが……」

言葉をそこで切つて目をじつと見つめる、このローグつて奴を信用できるのか？ それを考えるのに自分だけでは無理だ、頼りになる相棒と相談が必要だ。

（ツクヨ、呼ぶのが遅くなつた、すまん。こもるのをやめて話を聞いてくれるか？）

くやつと終わったの……つてとつくに終わつてるじゃん！ なんですぐに呼んでくれなかつたの！く

（悪かつたつて、つていうか気絶してたし目覚めてからそんな経つてないし、あとこんな状況だしな）

くむむむ、気にする余裕がなかつた、そういうことなんだね。……こいつに私の存在を明かすのはサルーシャの好きにしていよいよ、私じゃ裏切るかどうかなんてわかんないしく

（おいおい、信用してくれるのは嬉しいがちゃんと考えてんのか？）  
くだつて私としてはヒトの群れの中より森の方が生きやすそうだし、サルーシャと一緒に逃げるぐらいならできから裏切られても別にいいしく

人になるならもうちよい他人に興味持つてほしい、これは情操教育がもつと必要ですね。

そのために、つてわけではないができればこいつが信用できる奴で

あつてほしい、巻き込める人間の選択肢は少ないってレベルじゃないしな。

だから、最低でも口だけでも裏切らないといえるかどうかぐらいは確認しときたい。

「なんとなく程度は想像ついてると思うが、俺は追われる立場の人間で、俺の事情を知ったら突き出すか最後まで隠し通すかの二択しかない。ここまではいいか？」

「ふん、そんなもんすぐに分かるってんだよ、こんな場所に来る奴なんて脛に傷がある奴ばっかき。さすがにテメエみたいなガキでそんな奴は見たことなかったけどな」

「だから、事情を聞いて決して裏切らない味方になってくれるってんなら、相応のメリツトは提示する」

鼻を鳴らすローグ、どんなもんを出すんだ？ とつとと言ってみろ、って顔だな。

少し息を整え自分の中の考えを整理する。

「お前には選択肢が四つある。一つはこのまま事情を聞かずに俺を追い出すこと」

無難っちゃ無難、一番安全だけど毒にも薬にもならない選択だ。

「二つ目は事情を聞かずに俺を下につけること。これのメリツトは俺の事がばれたとき知らなかったで済ませられること、そのかわり俺がこの力をお前のために使うことはない」

「おいおい、テメエの追手はそんな優しい奴らなのかよ、知ってて匿ってたに違いないって言って皆殺しすんじゃないやねえのか？」

「お優しい連中だからそりゃないな、あつちの目的を達成できるなら俺の罪ですら問わなそうな連中だぞ」

王国の方はここは別の国だから追手を気にする必要はない、あるとしたらラテベア教の方だ。

そつちにしたってツクヨを突き出せば精霊付きじゃなくなるからな、ラテベア教が婆の記憶通りの組織だったらだが、監視はつくだろうが命までは取らないだろう。

そもそも追手があるかどうかがあやしい、実は一番いい選択がこれ

かもしれない。

「三つ目は事情聞いて俺を突き出す選択、これをこの場で選ぶことはないだろうからメリットは割愛する」

「そりやそうだ、そんな馬鹿正直に裏切るって言うやつがいるかよ」

「私の事を知ったら選ぶ可能性もあるんだよね?」

（あるだろうけど、その場合は逃げるだけだ、また別の町に行ってみようぜ）

「んで、最後の奴は?」

「おう、最後に四つ目、事情を聞いて俺を下に置く選択。詳しいデメリットは後にして、提供できるメリットは……」

見せつけるように手の中に光球を作り出す、薄暗かった室内が明るく照らされログがまぶしそうに眼を細める。

「この力、使えるようにしてやるよ」

「……いかれてんのかテメエ、自分の強みを他の奴に分けてやるとか何考えてやがる?」

「そんなぐらいいじゃないとデメリットに釣り合わないんだよ。で、どうする? 正直おすすめとしては二つ目だ、一つ目を選んでも報復とかはしないし敵対することもない。まあ三つ目は少しは覚悟してもらおうが……多分そんな余裕ないだろうしな」

眉間にしわを寄せ考え込むログ、きつとこいつの中では忙しく損得計算が行われているのだろう。

「……そいつはすぐに使えるようになるのか?」

「お前のセンス次第だな、俺は習い始めてから半年つてところだ」

（魔力を認識できなかった期間ってだけで、きっかけになったのはツクヨの魔力いじりだけだな）

「嘘ではないけど正確ではない情報ってやつだね。平均はそのぐらいだっついてたってたっけ?」

「その期間でテメエの追手が来るか?」

「保証はできないが、おそらくはないと思う」

本格的に考え込み始めた、あとはこいつの状況次第。

こいつが現状に満足していて未来に展望があるなら四つ目は選ば

ないだろう、だがそうでないならば……

「上等じゃねえか……！ 四つ目だ！ テメエの持つ力、事情ごと呑み込んでやろうじゃねえか！」

博打にみえるような選択だっけてしてくるわけだ。

「いい啖呵だ、俺の身の上聞いて腰を抜かさないでくれよ？」

（それじゃあ挨拶してやってくれツクヨ、声を出して、な）

<はーい、了解だよー>

先ほど作って出しっぱなしであった光球を消すと同時にツクヨを同じ場所に出す。

見た目的には何も変わっていないように見えるかもしれない、せいぜい光量が落ちた程度の物だろう。

だが、その場にいる生き物には違うことなど即座にわかることだ。

魔力を感知できずとも本能でわかるのだろう、自身より圧倒的な強者がそこにいることが。

「はじめまして、私は精霊ジンのツクヨ、よろしくね？」

「これが俺の事情、精霊付きだつてことさ」

あまりにも予想外だったのだろう、二の句が告げられない様子のローグの顔はただの子供にしか見えなかった。



## 猿、誘いをかける

「精霊<sup>ジン</sup>ってあれだよな、三大生物災害の……」

引き攣った笑いを浮かべながら震え声で聞いてくるローグ。

ビビりすぎじゃないですかねえ、君が選んだことなんだしもうちよつとどつしり構えていなさいよ。

〈無茶振りってやつだよね、それって〉

(その通りだけどなあ、自分で選んだ道なんだからもうちよい動揺隠せないもんかねえ)

精霊<sup>ジン</sup>だったっていきなり噛みついてくるわけじゃないぞ？

「災害とは言われてるけど、無闇に襲ってくるもんじゃあないさ。ほれ、触ってみ？」

手に触れさせようとツクヨを持っていくとローグは慌てて後ろへ飛び、その拍子に壁へとぶつかってしまった。

「ぐえっ！」

「？ 親分、どうしやした？」

「な、なんでもねえ！ 生意気にもちよいと抵抗しやがっただけだ！

おらあ！ 大人しく吐くんだよ！」

誤魔化すためにもそのパンチは受けておく、狭い小屋なんだから暴れるなよ。

「壁に触ったりぶつかったりした音は誤魔化せないぞ、そんな泡食って逃げんなよ」

「う、うるせえ！ 逃げてなんかいねえよ！」

「さっきの子分への声は通してるから大丈夫、変に思ったりしてないよ子分」

うーむ、流石ツクヨだ。誰に向けての言葉か判別して通す通さないを判断するような結界魔法をいつの間にか使ってやがる。

〈サルーシャが固めた空気に一手間加えただけだよ、たいしたことしてないって〉

(たいしたことだと思っけどなあ……)

改めてローグへと視線を向ける、まだ顔色は血の気の引いた青い様

子だが精神的に立て直すことはできたようだ。

なので、再度覚悟のほどを聞いてみよう。

「で、どうする？　三つ目に変えるか？　変えるんならラテベア教に駆け込むのがオススメだぞ？」

「るっせえ！　この都市に教会はねえよ、ついでに組合もねえから俺らはこんなところで群れてんだよ！」

あの二つの組織って孤児や浮浪児の保護もしてたんだっけ、ますます目の敵にされる精霊のヤバさが浮き上がるな。

「他の都市に行こうにもどれだけかかんのかもわかんねえ、どこにあるのかも知らねえ。だから、逃げることもできずここで身を寄せ合うしかねえんだ。例え、いつゴミみてえに殺されるかわからなくてもだ……」

そう言つて俯いてしまうローグ、こいつはこいつなりに仲間を助けるようとしてんだな。

やっぱりいい頭だなこいつ、そんな奴を一発目で引き当てるとは俺の運も捨てたもんじゃない。

「……なあ、その力は半年ぐらいで使えるようになるんだよな」

「俺ぐらいまでになるには時間かかるぞ？」

「それでも、殺されるのに抗うことはできるようになるよな？」

「少なくとも抗うための力にはなるな」

一つ頷き顔を上げ、真っ直ぐ俺の目を見てくる。

決意に満ちたいい目をしていたローグは勢いよく頭を下げる。

「頼む、そいつを俺だけじゃなく、みんなに教えてやってくれ！」

「つまり、お前だけじゃなく、お前の子分にも四つ目を選ばせるってことか？」

「ああ、飲ませる、飲ませてみせる。だから、俺らに生き抜ける力をくれ！」

流星に悩ましいな、秘密つてやつは知る人間が多くなればなるほどバレやすくなる。

〈なら解決方法は一つじゃない？〉

(そうだな、それしかないか)

どうするかを決め、頭を下げっぱなしのローグの両手をとって頭を上げさせる。

「ローグ、悪いんだけど無闇に秘密は明かせない。理由はお前ならわかってくれると思う」

「……だよな、全員が精霊付きなお前を売ろうとしないなんて、俺には約束できねえ。せいぜいが売ろうとしないよう目を光らせとくぐらいただ」

「だろうな。だから……」

俯きかける『頭』の頬を両手で挟み、しっかりと目を合わせて言うてやる。

「頭だけでいいさ、秘密を知るのは。この力、魔法は全員に教えてやるよ」

「! いいのかよ?! 力をつけた後で裏切るかもって思わねえのかよ!?!」

「俺だってここまですることができるようになるのに数年はかかっているんだ、そんなに早く裏切れるまで上達しねえって」

安心させるためにニカッと笑って言うてやる。

「それに、教えるのは親分の命令で、自分はそれに従うのが当然だろ？」

他の子分どもを抑えられるって信じてやるから、頑張ってくれよ頭!」

「……ああ! もちろんだぜ! その程度できねえローグ様じゃねえってみせてやろうじゃねえか!」

そう言うて本気で嬉しそうに笑うローグ。

この反応を見せてなお、裏切る算段を腹の底でできる奴ならとつくにこんなところから抜け出していると思う。

(信用していいと思うぞ、こいつは)

<サルーシヤの好きにすればいいって言ったじゃん、どっちでもいいよ私は>

(拗ねてんのか? 触れるのを拒否されたから?)

<くっついていかどうでもいいかな? サルーシヤさえいれば私は肉の体を得られるだろうし>

だからもうちよい他人に興味持てつて、まだ人じゃないから仕方ないのかもしれないけどさあ。

まあ村と違って俺以外とも話せる人がいるんだ、こっから持てばいいだけだな。

こうして、俺は安全な寝床と新しい仲間を手に入れることができたのだった。

前のような失敗はしないように努めようと思う、二回も同じことするのは馬鹿のやることだからである。

その後、埋めて置いた毛皮を取りに行き、それを渡す代わりに仲間に入れさせてもらった。

そう他の仲間達には説明した、真実を話すと自動的に俺の事情を教える羽目になるから仕方ない。

魔法を教える事に関しては、先ずローグが使えるようになってから他の奴に教える。

この孤児と浮浪児の集団は、ローグの知恵と腕力でまとめているらしいのでそれ以上になられたら下剋上されてしまうからだ。

「それなら自分だけ使えるようになってた方がよくない?」

「俺が都市の中の奴より強かったらわざわざかかってこねえよ、そいつらから奪った方が楽なんだからな」

「それはそっか、動物だって狩りにくいのを狙うより狩りやすいのを狙うもんね」

「食べる奴を見つけるのってかなり難しいみたいだから狩りにくそうでも襲う時はあるけどな。」

それにしても……意外と仲良くなったな、お前ら二人>

「話してみりやなんてことはねえ、単にものを知らねえガキっただけだ。魔法の腕がやべえつてのも使ったとこ見たことねえからな、実感湧かなくてビビるのバカみてえに思えるんだよ」

「他の精霊はどうか知らないけど、私は意味なく殺したりしないよ?」  
「待ちたまえツクヨ君、その言い方は意味があつたら殺すつて取られかねないぞ?」>

「他のチンピラどもと比べりゃこいつの方がよっぽど理性的だぜ、少なくとも意味なく殺しにこねえ」

「あ、はい、下には下がいるもんなんすね。」

「というか意味なく殺しにくるってどういうことですか?」

「あいつらの目に止まったら、殴ったり蹴ったりとか普通にやられるぜ? 下っ端な奴であればあるほどな」

「なんで疲れるような事をわざわざやるの?」

「楽しいからじゃね? 自分より弱い奴を殴る蹴るぐらいしか好きにやれる事ないんだろ」

「自分より弱い奴にはなにしてもいいのかよ?」

「? そういうもんだろ、世の中ってやつは。いかに上の奴の機嫌を損ねないように力をつけられるか、それができる奴だけが生き残るのが当たり前だろ。」

外の連中は俺らをどうこうしねえが、そりゃ別の場所の奴に手を出すのは別グループ丸ごと敵に回さないためだろ?」

「……この都市の構造が垣間見えるな、上の方には下から巻き上げるばっかの奴しかいないだろう。」

そんな場所だからろくな奴が入ってこないし、力のあるまともな奴はとつとと逃げるか殺されるかであつという間にいなくなる。」

結果、都市の荒廃っぷりは加速する、と」

ため息つきたくなるぐらいクソな場所だな、ここ。」

「サルーシャ、口使ってる」

「あ」

「今日もサルーシャの負けだな、これでサルーシャの3勝14敗だったか?」

「やべえ、五倍差つけられる寸前じゃねえか」

ちなみに今はローグの魔法の修練が終わつての休憩中だ。

その時間を使ってツクヨと勝負をしているのだが……お察しの通り惨敗中である。

勝負内容は俺が念話に慣れるのとツクヨが空気を震わせての会話に慣れるのはどちらが先か、というもの。

「そもそもこの勝負自体が無謀だったんじゃないやねえの？ 精霊の真似を人間がするのと、人間の真似を精霊がやるってんじゃないやなあ」

「お互い慣れ親しんだこととは別の方法で意思を伝えるようになるのが目的だからな、その日その日の勝敗はそこまで気にする必要はないんだよ」

〈勝ち負けの数一番気にしてるのサルーシャだよね？〉

ツクヨは数えてもいない、ローグは参加してない状況だからその通りではある。

そう、俺が負けず嫌いなのではなくツクヨが気にしなすぎるだけと主張したい、口に出したらどう考えても負け惜しみにしか聞こえないので言わないが。

「まあその話は置いといてだ、今日も都市内の色々を話してくれよ」

「あからさまに話をそらしてきたな……いつも通りの流れっちゃ流れだけだよ」

魔法の修練をローグに教える代わりに、この都市自体や訪れる人々の事を教えてもらっているのだ。

世間知らずな俺たちのせいで、常識であってわざわざ口にしないことまで文章化させられてるローグの苦労は実は結構なものかもしれない。

「んじやあ今日は金の話だな、まずは種類からだ」

懐から何種類かの銅貨を取り出し並べる、表も裏も同じ数字が彫られているものが4種類ほどだ。

「小さいのから順に、1モネ銅貨、5モネ銅貨、10モネ銅貨、50モネ銅貨な。聞いた話じゃ銀貨と金貨も同じように分かれてるらしいぜ」

よく見れば彫られている数字そのままだ、シンプルなデザインすぎないだろうか？

特徴といえれば数字部分だけが白っぽい色から黒っぽい色まで違いがあるぐらいである。

「どこの国が作ったかが知りたいんだが、これってどこの貨幣なんだ？」

「は？ 金は金だろ、どこでも一緒なはずだぜ？」

「どこでも一緒？ まさか通貨の統一がされている？ いやいや国がたくさんあるのにそんな事できるのか？」

「あてこの真ん中の奴……たしか数字つったつたよな？ こいつが黒ずんでるやつ見つけたら俺に渡せよ、ラテベア教の奴に渡すと新品のと交換した上で1モネ貰えっからな」

「なんでラテベア教はそんな事してるんだ？」

「さあな？ 俺は興味ないから知らねえよ」

銅貨を一枚手に取ってみるが詳しく見ても複雑な彫は全くない、これなら偽造しようと思えばできてしまうのでは？

「サルーシャ、これ何か魔力がこもってない？」

「ん？ ほんとだ、なんでこんな手間をかけてんだろ？」

試しに魔力を奪い取ってみる、すると数字の色が周りと同じ色へと変わってしまった。

「ああ!? 何やってんだよ、そこまでになったやつは交換してもらえねえぞ?!」

「え？ ……ああ！ これ偽造防止の細工か！」

だんだん白から黒に変化する魔法をかけておいて黒になったら補充のため交換、魔法の効果に色々仕込んでおけばその術式がばれなければ偽造はできないようになっていると。

「ついでに交換するタイミングを遅めにしておけば、貨幣自体の劣化からちやんと長年使用された物であるとわかる。だから勝手に作られてもすぐばれると、よく考えられているもんだ」

「テメエの考察はどうでもいいから、そのダメになった金どうすんだよ？ それ持ってつと貨幣の偽造を疑われるぞ、縛り首ですみやいい方だ」

「……溶かして何かに作り替えとくわ」

そこまで古く見えないもんなこれ、偽造しようとして失敗した物にしか見えんわ。

「ったく、いきなりやばいことをしやがって。ほんとにお前はどんな田舎から来たんだよ、金に関して全然知らねえじゃねえか」

「いやあ、お金を使う場所も持つこともなかったし、仕方ないんだよ、うん」

「お金？ サルーシャ持ってた事あったよ？」

「……修錬や勉強で忙しくてお金を渡されたことも忘れてた模様。」

「結局テメエが間抜けだってだけじゃねえか、作り替えるのは売れるモンにしるよ？ そっから銅貨分を回収すつからな」

「へーい」

「こんな感じでログとの仲は遠慮の必要ない友人という形になっていた。」

「なお、魔法を他の奴にまで教えていくのは、大分後の話になったことを蛇足として記しておく。」



## 猿、現状を憂う

さて、このスラムの子供の一日の流れを説明しよう。

朝は日が昇るより早く起きて動き出す、路上に放り出された酔っぱらいどもの懐を漁るためだ。

大抵は飲み屋の店主に粗方奪われているもんだが、たまに取り残した分があったりするのでそれ狙いだ。

運がいいと喧嘩で双方共倒れがあるので、その時はありがたく双方の懐を漁っていく。

ちなみに武器なんかには手を出さない、それを持っていくとガチで殺しにくるし、大抵なまくらなので中古屋に持っていつても二束三文なんで旨味がないのだ。

武器防具まで持っていくのは俺らみたいな浮浪児が、死体を相手にした時だけだ。

その後は子供でもできる仕事を探して町中を彷徨い歩く、運が良ければ仕事を見つけてその日の飯を確保して終わり。

普通なら見つからずに生ゴミ漁りへと移行する、店の人間に見つくと殴る蹴るの暴行を受けるのでかなり危険だ。

ついでに飯を出す店は少ないので大人の浮浪者とも奪い合いになる。

夜は飯を確保できた奴はとつと寝てしまおうが、確保できなかった奴は町中で粘ることになる。

狙いは朝と昼のものと変わらない、つまり酔っぱらいと残飯狙いだある。

危険度は朝と昼より跳ね上がる、まだ動いている奴が多いのだ。

酒が入っている分加減がなくなっていたり、忙しく働く店の人間も時間がないからやはり容赦がない。

それでもやはり人類全体に殺しに対する忌避感があるらしくそこで死ぬ事は少ない、暴行が元で動けなくなりそれで死ぬ事例は掃いて捨てるほどある事だが。

幸運にも絡まれず、不幸にも飯にありつけなかった者はすきつ腹を

抱えてスラムへと帰って眠る。

そしてまた朝早くから起きる、というサイクルで体がある程度大きくなるまで過ごすわけだ。

「ちよつとこれだと死ぬ奴多すぎるからどうにか変えようぜ？」

「だから今魔法を覚えようとしてんじやねえか」

「ああ、うん、力をつけければ盗むのも楽って言い出した時点でアウトです」

よくわからんって顔をするんじゃない、何かを手に入れようとする時他人から無理やり奪うのは一番の下策なんだぞ。

<ヒトは盗んだ相手を恨むから、だっけ？>

「そうそう、人間は感情で生きる生き物だから、一度感情で否定しちゃうとずーつと続くからな。敵を増やすとろくなことにならないのはよくわかるだろ？」

「そりゃわかるが、やらなかったら飯が食べねえだろ。結局喰えずに死ぬぜ？」

「いや、言いたいのは仕事をいつでも見つけられる状況を作ろうって事だよ」

「それができりやあ苦勞はねえだろ、なんにもできねえ孤児をずっと雇う奴なんていやしねえぜ」

その通りだとは思う、思うがそこで終わってたら言い出した意味がない。

「なんにもずつと雇われようってんじゃないんだ、店を構えている奴だけに絞る事はないんだよ」

呆れ混じりの目だったローグが姿勢を整える、どうやら興味を持つてくれたらしい。

「今考えてるのはここまで来た旅人相手の商売だな、いい宿への案内とかどうだ？」

「探す時間なら俺らにはいくらでもあるし、なんだったら宿の店主と結託してもいい。悪くはねえな、やる価値はあると思うぜ」

おお好感触、これならいけそう……

「で、そいつは何人でやるんだ？ 一人二人だと手が回らねえだろう

が五人六人と食えるぐらい儲かるのか？」

むう、確かに大勢を食わせるほどにはならない。

「後はそうだな、この都市にくる奴なんてそう多くはないぜ？ それだけでいつでも仕事があるって状況にはできねえんじやねえかな」

「このアイディアは駄目かあ……」

わりといけると思ったんだが、仕方ないから別のアイディア考えないとな。

「何人か宿の奴と話した事ある奴にこれはやらせるとして……、おい、次のアイディア言ってみろよ？」

「ん？ 駄目って言わなかったか？」

「なんで全員まとめて同じことやんなきやいけねえんだよ、どうせ俺らは襲われにくいように固まつてるだけだぜ？ やれることがある奴はそれやつてりやいいんだよ」

「お前の子分達じゃないのか？」

「喰えねえ奴同士で奪い合う馬鹿ばつかだったから俺が親分としてまとめただけだ、テメエで生きられる奴はテメエで生きろつてんだよ」

いい大将してんじやんこいつ、案外成長したら大勢を率いる立場に立ってるかもな。

「おい、にやついてないで次を話せよ。休憩中だったって時間無駄にする気はねえぞ？」

「悪い悪い、考えてる最中だったんだよ。やっぱ食えるもんを育てるのは基本だよな、この辺りの農民はなに作ってたんだ？」

「そりや小麦じやねえの？ 見た事も調べた事もねえから知ってるわけじやねえけど」

知らないか、全部を知ってるわけないが畑の場所から調べなきやいけないかもしれないのは少し手間だな。

「このへんでなにが育つのか知りたかったんだが、要調査つてとこか。近くに森はあったっけか？」

「結構遠いぜ？ 四半日ぐらいは歩かなきゃつかねえよ」

「そりや好都合だな、ちよつとぐらいなら狩り場に入り込んでもちつちが疑われることは無さそうだ」

「おいおい、さつき敵を作るなって言ったのテメエだろうが」

軽い調子のツツコミに肩をすくめながら答える。

「生きる糧を直接奪わなきゃ大丈夫さ。狩や採取をするのは森の奥、人が滅多に入らない場所にするつもりだし、そんな場所が無かったら種だけ採るつもりだしな」

「んー、なら大丈夫なのか？ まあ、その辺は任せるわ、上手くやってくれや。で、他にはあんのか？」

少しつまらなそうなのはなんでどころ、問題をワザと起こす気は俺にはないぞ。

問題が起こることを期待しているのではなく、俺が、ひいては魔法という力がどこまでのものなのか知りたいだけだと思うが。

「他か……、俺たちみたいなガキの集団じゃまともな仕事にやありつけない、それは確かだよな」

前提とも言える事を言い出した俺に怪訝な顔をするローグ、だがある程度は信用してくれてるのだろう、口を挟まず黙って続きを待っている。

「だが、覚悟さえすりゃあまともじゃない仕事も俺らはできる、そうだな？」

スツとローグの目が座る、俺が提案しようとしている事がどんなものでもたじろがないように覚悟を決めているのだろう。

「だけど俺がしようとしてるのは、斜め下な提案なんだよなあ。」

「俺が魔法を使う姿を見せる事が前提なんだがな、きつとこれなら仕事になる。お前と子分達にやってほしいのは……」

俺の提案を聞いたローグの顔がみるみるうちに歪んでいく、当然の反応と言えるだろう。

だが、だからこそ俺たちでも金が取れる仕事になるはずだ。

「魔法を使えば仕事の後始末は楽にできる、これの担当になる奴には優先的に魔法を教えてやると言えば成り手がないって事もないはずだ。っていうかこれぐらいの特典がないと成り手がないかもだが」

「ついでに言えばそこまでの覚悟がある奴なら信頼して魔法を教える事もできる。」

……俺とローグは強制参加になるが。

「どうする？　なるべく下げるつもりだが、病気の危険だつてある。辞めとく、つてのも悪い判断じゃないと思うぞ」

「……………！　や、やるぞ。背に腹はかえられねえ、まともによつてちや死ぬのが俺らだ、ならまともじゃない手段だつて選ばなきやいけねえ時がある！」

いい覚悟である、提案した甲斐があるというものだ。

……できれば蹴つて欲しかったという本音はしまつておくことにする。

ローグが魔法を多少とはいえ使えるようになった頃、俺が出した三つの案は動き出し順調に回り始めていた。

都市内の宿は多く無かつたから話しを通すのはわりと楽にいったし、旅人の案内も数こそ少ないもののしつかりチップを貰えるいい仕事になった。

食べられる奴を育てるのもムカゴを見つけることができ、すくすくと葉を伸ばしてくれている。

世話をする奴も真剣そのものでやってるので、時期がくればムカゴや山芋が食えるだろう。

そして最後に提案したアイディアだが、極めて順調に稼げている。都市内でも嫌がる人間ばかりであり、それ用の処理システムが無かつた事が決め手である。

そして、今俺はその処理を行なっている。

「熱よー」

掛け声と共に目の前の、都市中から集められ穴に放り込まれたそれが熱される。

同時に風も操り、『悪臭』が撒き散らされないようにする。

「本当に、ホントーにこれで臭いが消えて危険もなくなるんだらうなあー！」

鼻をつまみながらローグが涙目で叫ぶ。

そんなもん微生物に言ってくれ、俺ができるのは彼らが活発に活動

できる環境を整えてやるだけだ。

「大丈夫だよ、段々土に変わっていつてるよ」

「本当だなツクヨ！ 信じたからな、嘘だって言うのは無しだかな!?」

ちなみに、今いるのは俺とツクヨとローグだけなのでツクヨが堂々と喋っても他の誰かにバレる事はない。

「最初に説明したろ？ つうか、乾いていきや土になるなんて誰だつて知ってるだろうに」

「うるせえ！ こんだけの量があつたら腐つて悪臭やらばら撒く方が先だろうが普通！」

そろそろ想像ついていると思うが、俺が出した三つ目の提案、それは、

「う〇こ回収とか誰もやりたがらねえよなあ、そりゃ！ チキシヨウ！ 俺だつてやりたくなかったぞ！」

「結局志願者ゼロだったからな、俺とお前の二人だけで回収する羽目になるとは……！」

「クソがつ！ こうなつたら腹一杯美味いもん食つてやる！ 羨ましがらせてやるつて言う奴増やすぞ！」

「忘れたいしな、臭いとか」  
「思い出させんなああ!!!」

だが、誰かがやらなきゃならないことなんだよなあ。

今まで裏道とかちよつと外れたところに好き勝手に埋めてたらしく、嫌な落とし穴がそこら中に作られているような状態だったもんなあ。

「あ、後これで燃料に困らないぞ。俺とツクヨ限定だけど」

「めたんがす、だったか？ そんなもん使つて臭い移らねえのか？」

「もちろん移る、だから俺とツクヨ限定なんだよ」

今のところ採つてもすぐ横の穴を暖めるぐらいしかしてないが、冬になればありがたみが分かると思う。

「ありがたみと魔法の利便性が知られれば、交代要員もできるだろうから、それまでの辛抱だなあ」

「コレのお陰でお湯を作る魔法と乾かす魔法はあつという間に覚えたぞクソが！」

「必要は発明の母という奴だな、喜べばいいじゃないか」

「うるせえよ！ 後で一発殴らせろ！」

「どうぞご自由に、ただし決断したのはお前自身だというのはお忘れなく」

むぎやおー！ というローグの叫びが暗くなっていく空に響き渡る。

俺らの未来は確実に明るくなったはずなのだが、それに反比例する勢いで気分が落ち込んでいく夕暮れ時であった。

集団は率いるものによっていかようにも変わる

「子供だけを対象にした炊き出しがあるんだってよ、ローグは行くのか？」

「……オメエは行く気か？」

「人が多く集まるところに行けるわけないだろ、感知器とか感知できる魔法使いとかいたらどうすんだよ」

「感知器はともかく、そんな触れずにそんな事できる魔法使いは婆の記憶にもいなかったけどなあ」

技術つてのは日進月歩、いつそんな技術持ちが現れるかわからないんだから警戒するに越した事はないのだ。

「そうか、ならいい。俺も行く気はねえからな」

「ん？ なんでだ？ ただ飯食う機会なんてそうはないだろ」

当然の話だが、孤児と浮浪児の集まりである俺たちは今日食う飯にも事欠く有り様だ。

なんで、炊き出しなんてあれば喜んで飛びつきそうなものだが……。

「テラートウスの名前で作ってるやつだろ、それ。やべえ噂があんだよ、その炊き出しには」

「噂？」

「ああ、ここの都市長は一代でここを築き上げたすげえ人らしいんだが、やべえ手段でも気にせず使っちゃうって話はしたよな？」

「ああ、ついでにいい話をする奴は子飼いの奴ばつかで、悪いうわさを流す奴はいつの間にか消されてるって話も聞いたな」

「それと同じようにまことしやかにささやかれてんだよ、ガキをさらって売り飛ばす商売やってんじやねえかってな」

「……行くときは背に腹は代えられない時だけだな」

肩をすくめあつてそんな時が来ない事を祈る俺とローグだった。

「あ、来ないでくれって子分どもに頼まれたぞ俺」

「遠巻きにされかけてる現実を思い出させんなボケ！」



ここは都市国家ローウエス・テラートウス、サルーシヤがたどり着いた都市である。

その中の最も豪華な屋敷、その一室で怒号が響いていた。

「ですから、このような状況を放置してしまいましたら大きな災害が起きるの確実だと言っているのです!」

立ち上がりテーブルにこぶしを叩きつけながら叫ぶラテベア教の司祭服を纏う男、近くの都市国家の教会を任されている者である。

「そうラテベア教の方々が主張されてはや15年、いまだにそれらしき予兆すら起こっておりませんよ。」

災害の詳細に関しても口をつぐまれるばかり……これはいつたいどう判断すればよいのでしょうかあ?」

その怒号にどこ吹く風という風情でふてぶてしい態度で問い返すのは、この都市国家の代表であるクピディアス・テラートウスその人である。

「我々がやっていることが、不安を煽り心の隙をついて利益をかすめ取るためのものだとでも?」

「いやいやそんなまさか、そのようなことなど一つも考えておりませんとも。……まあ、そのように解釈する者がいないと申せませんが、ね」

司祭がクピディアスの煽るような言葉に苛立たし気な目とともに低い声で問うが、当の本人はにやにやと笑いながら更なる煽りを入れるのみ。

思わずといった雰囲気です。司祭が拳をもう一度テーブルにたたきつけようと振り上げたが、後ろに控えていた者にそっとその腕を止められた。

「司祭殿、苛立ちをお納め下さい。我々は協力を申し出に来たのであつて強制をしに来たものではありません」

ん、ローウエスの方々が望まぬとあればおとなしく引き下がるべきです」

がっしりとした腕で思ったより優しく止められた司祭だがそれでも激した感情は収まらなかったらしい、騎士のごとき装いの彼に向

かつて感情のまま声を張り上げる。

「だが、このままでは」

「ラテベア教は善意の協力者たれ、善意であるなら押し付けるな。アーク様の残した言葉です」

「……」

しかしその声は途中で遮られ冷や水を浴びせかけられた、ラテベア教の司祭として恥ずかしい行動であると言外に指摘を受けたからである。

先ほどまでは激情によって赤くなっていた司祭の顔が今度は羞恥で赤くなる、咳ばらいを一つ鳴らすとゆっくりと席へと戻った。

「大変失礼いたしました、クピディアス殿。わが身の未熟ゆえの醜態、お許しただければ幸いです」

「いえいえかまいませんですとも、お若い司祭殿の使命感ゆえの事でしょう。こちらこそ言葉が過ぎましたな謝罪いたしましたよう」

席に戻るとすぐに謝罪を口にする司祭、それに対しクピディアスは鷹揚に理解を示し逆に自分の言い方が悪かったと謝罪をした。

最も内心では余計なことをした男に向けて盛大に舌打ちをしている、あのまま激発させていれば二度と口出しをさせないことすら可能だったろうにと。

「素晴らしい落ち着きようですなメズ殿、さすがはラテベア教の誇る治安維持部隊といったところですか？」

「いえ、差し出口を挟みました。お忘れただければ、と」

「差し出口などと、誉れある貴方がたのお言葉です、横で聞けたのは自慢になりますとも」

クピディアスの言っていることは当然皮肉である、彼はつまりこう言っているのだ『治安維持部隊に諫められるとは、司祭殿は犯罪者かね？』と。

あからさまな当て擦りに司祭は内心はともかく表面上は無表情で流す、ゆえにクピディアスに答えたのは話しかけられたメズだった。

「クピディアス殿は一つ勘違いをされているようだ」

「はて？ 勘違いですか？」

「ええ、我々が声をかける相手が犯罪者であることは多くありません。むしろ無辜の民の慰撫のためにこそ、我々の口は使われることが多い。そして……」

それまで波一つない水面のごとき様相を見せていたメズの雰囲気が一変する。

「罪人には速やかなる処理を、それが我ら獄卒の役目であります」

表情はまったく変化がないのに地獄の悪鬼のごとく恐ろしい気配を漂わせる。

クピディアスにはそれが必ずや貴様の罪を暴いてやると言っているように思えた。

「はっはっは、頼もしいことですねえ。無辜の民の一人たる私としては、メズ殿のそれは安心できるといふものです」

それでも決して表には出さない、弱みを見せてはつけいられるだけだからだ。

話し合いはそれからも続いたが言質を取られぬやりとりで終始し、その日は結局双方にとって実りなく終わったのだった。

「まったく、あの宗教狂いどもめ、ここはようやく手に入れた私の国だぞ？ 貴様らなどに好き勝手させてやるものか！」

自室へと戻ったクピディアスは憤懣やる方ないとばかりに吐き捨てた。

「ここを廃墟から建て直しここまでにしたのは私だぞ！ ここに住む事を許してやっているのだ、私の思い通りにやってなにが悪い！ やれ、殴る蹴るを禁止しろだの、奪うな殺すなを徹底しろと！ 何様のつもりだ！ 自分達が秩序の全てであるつもりか!!」

誤解のないように言っておくが彼自身には暴力を直接振るう趣味はない、ただそれらを好むの方が安く雇えるから禁止していないだけだ。

当然評判が下がり真面な者は雇いづらくなるが、それでも十分元手が取れる程度にはなった。

たまに足元を見て高い給金を要求する者もいたが、もっと安く雇え

る者を上手く煽ってぶつけ合わせた。

それを繰り返してこの廃墟に都市国家を作り上げられるほどの金を稼いでみせたのだ。

今さら品行方正には戻れないし、戻り方も知らない、ただひたすらこの道突き進むだけである。

それに彼にはそれらを禁止しない最大の理由がある、ちょうどその事を思い浮かべていた時ドアをノックする音が聞こえた。

「誰だ！　今は誰も入るなど言っておいたろう！」

「ひつ、ご、ごめんなさいパパ、でも、ち、ちよつとお願いが、あつて……」

「おお！　お前だったかチーズオ！　パパが悪かった、さあ、入って来なさい」

先程までの不機嫌はどこへやら、満面の笑みと猫撫で声でノックの主を部屋へと招き入れる。

ドアを開けて入ってきたのは、やけに細い十二、三歳ほどの少年。チーズオと呼ばれた彼は、盛大に吃りながらとてもか細い声でお願いを口にした。

「だ、大事なお話しで、疲れているところ、に、ごめん、ねパパ。あ、あのね、お、オモチャが、壊れちゃ、つて、新しいのが欲しい、なつて……」

「そうかそうか、偉いぞチーズオ、自分でお願いすることができるようになったのだな！　今度はどんなオモチャがいい？　大きいのか？　頑丈なのか？　それとももつと小さいやつを多くか？」

語りかけるクピディアスの顔は話し合いの時の狸のようなものとはかけ離れ、親馬鹿丸出しであり愛着で目が完全に曇っていた。

「う、うん！　あの、ね、今度は、ぼ、僕、直接、見て、え、選びたいな、つて！」

よほど嬉しかったのか、興奮のあまりさらにひどい吃りとつつかえながら話すチーズオ。

「うむうむ、ならば色んなやつをそろえさせねばな。待っていないさい、パパがたくさんの種類を集めてやるからな？」

「そ、それ、なんだけど、捕まえる、前のも、見たいなつて……」

驚きに目を見張るクピディアス、チージオが外に出たいと言うのは初めてだからだ。

「チージオ……！ 外へ出て大丈夫なのか!？」

「こ、怖い、けど、パパ達が、守ってくれるから」

引きこもりの子供が勇気を出して外へ出てみると言い出した感動の光景である、……一つの問題点が無ければ完璧であったのだが。

テラートウス親子が抱き合っていると部屋のドアがノックする音の後開かれた。

クピディアスの部屋に許可を出る前に入室するような者はほぼいない。

「失礼いたします、クピディアス様、チージオ様。チージオ様のお部屋の清掃が完了した事を報告に参りました」

だが今入ってきた男は例外だ、それだけの信頼をテラートウス親子から与えられている。

男の名はソレティア、最も古くからクピディアスに仕える腹心中の腹心であり、チージオの教育係でもある。

「む、そうか。チージオ、そろそろお部屋に戻るかい?」

「うん、き、今日は、もう、戻って寝ちゃう、ね。お休みなさい、パパ」

そう言つてソレティアに連れられ部屋へと戻るチージオ。

それを笑顔で見送った後、別の部下へとクピディアスは支持を出す。

「おい、チージオが生のままを見たいと言っている、通りや広場に集まるように炊き出しでも準備しておけ」

「はっ、規模はどの程度にいたしますか?」

「ふむ、チージオが怯えてはいかんからな、ごく小さい規模で構わん」

「承知しました、いつでも始められるように準備しておきます」

親子二人の心温まるやりとりだった先の光景、その問題点とは、

「チージオのためだ、知らないガキの十や二十死んだところでなんの問題もない」

オモチャとは、捕らえられた人間を指す事であった。

## 猿、強要する

炊き出しをしている場所周りを軽く歩き周って見たのだが、怪しい点が出るわ出るわで困った。

なんでか知らんが妙に暗く狭い場所でやっていたり、行けるルートが不自然なほど少なかったり、そのルートの間には待ち伏せに便利そうな場所があったり、炊き出しを与えてくれるのが子供にだけだったりち枚挙にいとまがない。

噂はあくまでも噂でしかない、そう思っていたんだので一応程度の備えだったんだが……それであっさりと成果が出るとは思わなかった。

「炊き出しの場所辺り見て周ったけど怪しすぎて笑えるぞローグ、噂が本当だという前提で考えるとしっくりくるわ」

「……マジかよ」

ローグも噂が真実とは思っていなかったのか、顔を引き攣らせて呻くように声を出した。

ただ、違和感が正直あるんだよな。

「なあ、奴隷って連れてる奴いなくはなかったよな？」

「ああ、この都市だと少なえけど、それは貧乏な奴が多いだけで他のとこだとわりとみるらしいぜ」

「子供の奴隷って、売れるのか？」

意外な事を聞かれたって顔だな、そこから辺考えなかったのか？

「子供と大人じゃ当然大人の方が労働力として上だよな？」

「そりゃそうだろ、そのせいで俺らが仕事探すの苦労してんだから」

「じゃあ、大人を拐った方が金にならないか？」

「大人を拐うのは面倒が多いんじゃないか？ 子供だったら大人一人で拐えっけど、大人だと複数人必要だろ」

「炊き出しなんてして大規模に誘き寄せてか？ そこまでやるなら二、三人使うのも変わらないだろ」

慈善事業やって民に配慮してますよってポーズ？ なら大人を排除する理由はないし、そもそももつと目立つ場所でやる。

百歩譲って子供メインで配慮しますって言ったとして大人向けにやらない理由がない。

子供だけじゃなきゃだめな理由でもあるのか？ 逆に大人がだめな理由でも？

「判断材料が足りないな、これは。もうちよい聞いて周ってみるか？ それともなんかありそうなどこまで潜り込んでみるか……」

いずれにせよ、解決までもっていくなら危険に踏み込む必要があるだろう。とすればどこで踏み込むか、だが……

「くねえ、踏み込む必要ってあるの？」

「んん？」

「避ければいいだけじゃない？ わざわざ深掘りして危険を犯す必要ある？」

「むう、たしかに言われてみれば必要性は薄い、のか？」

「そう、だな。自分にもなるべく行かないように言い聞かせてっし、無理に暴いても俺らじゃ返り討ちが関の山だよな」

「ログも別に暴きたてたい訳では無さそうだ、噂のことを話してきたのログだからどうかしたのかと思ったんだが……どうやら違ったらしい。」

「んじゃあ、子どもには行かないよう言っついて、他の奴らなるべく自分に勧誘するって感じでいいか？」

「うん、それでいいぜ！ ついでに俺らのやってるところやる奴を増やそう！」

俺の言った方針に元気に返事を返すログ、よっぽど嫌なんだろうか今の作業……。

別にやめてもいいと思うんだけどなあ、都市の衛生環境がよくなっているのは事実だけどそれこそ俺たちの考えるべきことじゃないしな。

「結構稼げてもいるし、具体的な金額でも公開してみるか？」

「額につられる奴がでりや御の字だな、俺も魔法を少しは使えるようになったから襲われてもどうにかできそうだし」

宿案内の仕事がチップ付きでもパン2個買えるぐらいの50モネ

が一日の最高記録（しかも孤児への同情心ありのチップ込み）だったのに対し、こつちの仕事は5日に一回、一日走り回れば500モネ、銀貨5枚は固いのだ！

……どれだけ困ったことであり、どれだけ敬遠される仕事であるかわかるうというものである。

ここまで汚れ仕事が嫌われる理由は、おそらくだが衛生概念が下の方にまで浸透している事が原因の一つだと思う。みんな汚物は触れてはいけないと理解しているのにこの都市は処理施設がろくにない、だからここまで稼げるんだろう。

そしてなぜ処理施設がろくにないのかは、『古い廃墟の再利用』なのと『都市長がそこを軽視する人間だった』のが原因だと思われる、今の都市長は一から都市を作る器ではなかったということだと思う。しかし、それで金を稼いでる人間としては言うべきではないかもしれない、ローグもこの話をしたとき複雑そうな顔してたしな。

「んじゃあ、稼ぎの一部を子分に撒きながら話してくるぜ、ついでに飯買ってくるが何がいい？」

「肉だな、贅沢したって困らないぐらいは稼げてるし」

この後、遠慮なしに食いまくる子分どものせいで散財しすぎたらし、買ってきてくれた飯はパン一個だけであった……ちきしょうめ。

さて、めでたく汚れ仕事でもやってくれると言い出した奴が数名出てきたので俺とローグは頻度が格段に下がった……わけではなかった。

正確にはローグの方は下がったし俺も回収の仕事はやらなくなった、ただ熱する作業の交代要員がいなくてだけである。

く仕方ないんじゃない？ だって、風を操るのも同時にやらないと爆発しかねないし」

「魔力が持たねえんだよ、魔力が。テメエらはなんでそんなに魔力が持つんだよ!？」

そう、魔力量の壁が俺らとローグらとの間に分厚くそびえたつたのである。



考えればわかるが、俺は5歳のころから魔力量を増やしてきたし、魔法技術も磨いてきた。

ひるがえってローグたちは覚えたばかりの付け焼刃、同じことができるわけがなかったのである。

「魔力を増やしてきたのと技を磨いてきたから、なんだよなあ魔力が持つ理由は」

「なんだ、そんな簡単に理由がわかんのかよ。だったらテメエと同じことを俺らにもやらせりやいいじゃねえか」

お気楽に言ってくれるなあ、技術に関しては地道に練習あるのみなのである意味簡単なんだが……。

「魔力を増やす方法は、生き物が死んだ時その近くにいる事、だぞ。用意しなきゃいけないのは死んでもいい生き物、どうやって調達しろって?」

「い!」

明らかにたじろぐローグ、なんか日本語だったらダジャレになつたなこの状況。

そしてここにも浸透しているようだ、死への忌避感ってやつは。

「どうしたよ、誰かが死ぬなんて日常茶飯事だろうが、なんでそこまで嫌そうな顔してんだよ」

「いや、だって、お前、死体だぞ、死体。誰だって嫌なもんだろ、それは!」

「嫌なのはわかるけど、それでもこれ以外に魔力の最大量を増やす方法ないぞ? 最大値が低ければ当然練習時間も減るし、拒否してたら話にならないものだぜ?」

「そう、なの、か? いや、待って待って、調達できねえんだろ今! なら無理に考える必要ないだろ、な? だから、この話は終わり! いいな!」

うーむ、結局俺がやるか危険を承知でツクヨにやらせるかしかないのか、どっかでやめるか、もっと広範囲に場所を広げるか……。

やめたら金が入らない、広範囲でやると悪臭が広がって追い散らされかねない、うーむ、夜逃げの準備でもしといた方がいいか?

これ。

〈くねえねえ、何を悩んでるの?〉

「ん? だから、魔力を増やす機会がないなあって悩んでるんだが……何か思いついたとか?」

〈うん、つていうかサルーシヤも私もずっとやってるじゃない?〉

「サルーシヤとツクヨがずっとやっている? なんだ? 何を言いてえんだ?」

うーん、何のことだろ? ずっとやってることで、俺とツクヨだけがやってること?

「あつ」

〈気づけた? うつとうしいなあって言いながらずっとやってたじゃない?〉

「なんだよ、もったいぶらずに早く言えよ」

効率よくないしその自覚もなかったから頭に浮かばなかったけど、確かに俺とツクヨはずっとやっていたな。

俺らが処理してるのは有機物だ、それが外に大量にあり、しかもその周囲は常に暖かだったら……

「虫の退治はずっとやってたわ、そーいや。延々と湧いてくるあいつらに何度もげんなりさせられてたっけ」

〈そーうそう、一匹一匹は少ないけどそれでも数をこなせば少しは足しになると思うよ?〉

「……さてよ、お前らが言ってる虫の湧いてる場所って、あそこだよな?」

泣きそうに顔を引きつらせながらの問いかけに笑顔で深くうなずく。

「魔力を増やすには生き物が死んだときに近くにいなきやならねえって言ったよな?」

二回目の質問にも深く、深くうなずく。

「つまり、あれか? テメエらは、あそこに、処理中に、近くにいろと、そーういつてんのか?」

笑顔でサムズアップしてみせると、即座に逃亡しようとしたので足

元を崩して即席の落とし穴にする。

「わーっ!!」

「なぜ逃げるのかね?」

まるで漫画のように落ちてったローグに上から声をかけると、奴は半ば以上泣きながら叫んだ。

「嫌だああ! 回収するときでさえ死んにそうなのにそんなところにずっといたら臭さで死んじまうう!!」

「安心しろ、嗅覚っていうのはマヒするの早いぞ。一分もしないうちに何も感じなくなるさ、俺も毎回そうだからな」

「何一つ安心できねえよ! それってそのぐらい悪臭がするってことじゃねえか!」

「はっはっは、ローグは賢いなあ、賢い君なら逃げられない事、いや、逃がさない事ぐらい理解してくれるよね?」

「理解したくないいいいい!! 俺を巻き込むなあああ!!」

「残念だが君が選んだ道なのだよローグ君、恨むならあの時これをやると決めた自分を恨みたまえ」

その日ローグの悲痛な悲鳴がスラムの一面に響き渡った。

後日、処理場で死んだ目で穴のふちに立ち続けさせられるローグの姿があつたそうなの。

「……俺だけこんな目にあうなんて理不尽だよな……作るか、巻き添えを……」

しばらく後、処理場担当の交代要員は劇的に増え、その増えた全員が消臭と体の洗浄、そして風を操る魔法が得意であつたという。

## 猿、未来を語る

その日チーズオ・テラートウスは荒れていた。

ここしばらく大切に使用してきた玩具がとうとう壊れて動かなくなってしまうからだ。

父に言われた通り鞭を使わずなるべく素手や素足で遊んでいたのだが、今日遊ぼうとした時にはもう動かなくなってしまうていた。

新しい玩具をねだりたいところであつたが調達が大変な事を知っていたので我慢した、したが、それでもイライラは抑えられずに物にあたっていた。

「ソレティアよ、どうにかならんのか？ あの子の荒れようはもう見ておれんぞ」

「申し訳ございませんクピディアス様、私も手を尽くしているのですが近頃のガキどもはそもそも炊き出しにも近づかず、一人の時を狙おうにも大通りばかり通っておりまして……」

それを聞いたクピディアスはソレティアに聞き、ソレティアは眉根をよせて申し訳なさそうに答えた。

これらはサルーシャのやった事が原因だ、十分に食べられるなら炊き出しに行く必要はないし、洗浄の魔法が得意になった子供達が練習がてらに仲間達にかけて周っているため裏道を通ると逆に危なくなってしまうた。そして、十分に食わせてくれるトツプがいるとなればそこに入る者は多くなる、さらに入らない者は玩具として拐われてしまったり食うことができずに餓死してしまったりで減っていく一方。

結果ローグのグループは膨れ上がり、大きいグループなら入りたがる者も増えていき今では孤児のグループとしては唯一と言っているものにまで肥大化していた。

「ガキどもは今や大きな一つのグループを作り上げておりまして、しかもどうやったのか妙に小綺麗にしたやつばかりなのです。おかげで個人でやっているような人買いどもが目をつける事が多く、こうなりますとラテベア教の連中に気づかれぬように調達するのは困難な

事かと……」

ちなみにラテベア教の人間は貧しい孤児の方に目が行きがちで、人買いの者どもは綺麗な格好の子供に目をつける事が多い。

これはラテベア教が死にそうな子供を救う事を目的にしており、人買いどもは劣悪な環境でも生き残れる子供を探しているからである。

どちらも人死にがなるべくでないようにと考えているために起こっている現象なのだが……ラテベア教の人間からすれば人買いの考えは殺意の湧くものであるだろう。

人買いどもにしてもラテベア教の考えは知っているため彼らが目を向ける事が多い子供は避けたいし、そもそも小綺麗な格好の子供の方が高く売れる。

そしてラテベア教の目を避けるため、教会のないローウエス・テラトウスのような都市を中心に活動するのである。

「ちっ！ ケチな小遣い稼ぎみたいな事しかできない人買いどもめ！ ああ、そのガキどものグループは都市の商売の邪魔にはなっていないのだったな？ それなら放っておけばいいか、いや、むしろ上手く取り込めればより儲かるのではないか……？」

「クピディアス様、今は商売よりもチーズオ様の方が……」

「む、そうだったな。……豪腹ではあるが、木端な人買いどもを儲けさせてやろう。奴らからガキを買い、もちろん直接ではなく何人か間に挟めよ？ ラテベア教の奴らは目敏いからな」

「承知致しました、手配いたします」

この後の事は詳しくは伏せる、ただ数日後にはチーズオの機嫌は直ったとだけ。

「サルーシャ、新入りの奴の話聞いたか？」

「ああ、聞いたよ。ったく、ろくでもない人買いってやつは」

ウンザリといった口調になるのは許してほしい、あの手この手どうちらのグループから人を誘拐しようとしてくる人買いども対策に追われていた上に、更なる方向で面倒くさい事が起きたのだ。

「近くの農村から誘拐されたんだろ？ そいつは。よく逃げ出せたも

んだよ、運が良かったって言えるだろうな」

「まだ余裕はあるけどどうすんだ？　うちで受け入れるのか？」

「お前が乗り気じゃないだろ？　なら、ラテベア教の奴にでも押しつけろよ」

わりとちよくちよく来るんだよな、あいつら。まあ、この都市の現状を、人買いどもの温床になってるって事実を知ってればそりゃ拠点を置きたがるか。

「いいのかよ、テメエはなるべく関わりたくねえんじゃねえのか？」

「そうだな、だから押しつけるのは他の誰かにやらせてくれよ、目をつけられたらコトだからな」

まあ、魔法を使ってるのがバレなきや大丈夫だと思うけどな。

「んじゃあ、ちようど来てるらしいから誰かに押し付けさせてくるわ、ついでにパンの一個も土産に持たせてやつか」

「余裕はあるからな、そのぐらいはどうとでなるだろ」

さてと、俺は新しい金稼ぎの方法でも探さなきやな、儲かるっていつてもそれだけじゃどうにもならない人数になりそうだし……。

さて、どうしてこうなった。

「はじめましてだね、ローグ君にサルーシヤ君。私はラテベア教に仕えるメズというおっさんだ、君たちが誘拐された子供を保護してくれたと聞いてお礼を言いにきたんだ」

目の前には俺たちの目線に合わせるため片膝をついているおっさんが一人、ニコニコと人好きのする笑みで機嫌良さそうに笑いかけてきていた。

いや、ほんとになんでこんなところに来てんだこのおっさんは。

「あの子が嬉しそうに話してくれてね、怖いおじさん達から逃げ出した後助けてくれた上に、体を綺麗にしてくれたり色々食べさせてくれたり途中でお腹が空いてしまわないようにパンを持たせてくれませんでしたらしいじゃないか。そんな子達がいるなんて嬉しくなっちゃってつい押しかけてしまったんだ、すまないね」

いかん、このおっさん本気で語ってやがる、混じりっ気なしの喜び

でここに来ていやがる。

「ええと、ここに来たのはそれを言うためだけ？　だつたらもう行っていいか？　俺らも暇つてわけじゃねえし」

普段と比べれば遠慮がちにローグが口を開く、いかついおっさんが笑顔で目の前にいるという状況に慣れていないのだ。

それに慣れてるってどんな奴だよ、と内心のみでツッコみつつどうするか考える。メズと名乗ったこのおっさんが何を目的としてここに来たのか、まさか今口にしたのが全てな訳はないだろうし。

「む？　そうなのか？　いや、そうだろうな、子供たちだけで生きていくというなら休む暇などそうそうないだろう。今回のこと、本当に助かったよ。君たちの余裕があるうちはだれかをたすけてあげてくれ、ではまた会おう」

そう言つて手を振りながら笑顔で帰っていくメズとかいうおっさん、残された俺たちは見送るしかできなかった。

「あっさり帰ったよあのおっさん……。何がしたかったんだ、アレ？」「ええつと、いくつかあげてみるぞ？　一つは純粹にお礼を言いに来ただけ」

「ねえだろ、どんだけ暇人なんだよそいつは」

まあないよな、この理由で来られたら正直困る、対処のしようがないが必要もないので忘れるのが正解になってしまう。

「二つ目は俺らみたいな現地で有力なグループと面識を得ること」「有力……まあ、ガキのグループって俺ら以外じゃほぼねえもんな」

これが目的ならまた会いにくるだろう、目的がどうであれまずは協力を得られるように成らなければいけないんだから。

「三つ目は魔法を使つてることへの警戒。魔法を使える人間つてすごくないのな、この前初めて知ったわ」

「知らなかったのかよ……お前がやったみたいに、すぐ魔力を感じとれるようにできるならもうちょい多そうだけどなあ」

もしかしたら無理なのか？　体内の魔力を外から動かして魔力を動かす感覚覚えさせるのつて。

くサルーシャ、自分が習った時の事忘れてない？　延々と瞑想させる

のが普通だと思おうよ？」

「……やっぱ、やつちまったか、俺」

「お前なあ、自分が目立っちゃまずいってわかってねえのかよ」

ぐうの音も出ない。いや、言い訳をさせて欲しい、生きるため、生きさせるためには仕方なかったのだ。俺一人だけではどうやったって人間社会というものをツクヨに見せることはできはしないし、一人では『人』の『間』にはなれないだろう？

「つうかツクヨも外でしゃべんじやねえよ。……中でしゃべろうぜ、ちようどいいからお前らの事情詳しく聞かせろよ」

そういえばなんで精霊付きになったのかだとか、俺らの目的とか何にも話してなかったな。

ちようどいい機会だから全部話してしまおう、それで追い出されるならそれまでだ、退職金でも貰って別の場所を探すとするか。

「……バカだろお前」

村での事とかツクヨの事とか全部話した後の第一声がこれである、ひどくない？

「ひどくねえよ、ひどいのはお前のツクヨと出会った時の行動だよ、どこに寝起きだからって精霊が体の中に入ること許容するバカがいんだよ」

「やっぱり変だよ、サルーシャって」

「まちたまえ、まちたまえツクヨ君、やっぱりってなんだ、やっぱりって」

ツクヨの物言いに思わず突っ込みを入れるが、帰ってきたのは呆れたような視線とため息。

「日頃の行いってやつだろ。だいたい、変じゃない奴があんなものの処理で稼ごうなんて思いつくか！」

「前に炊き出しの噂の話し合ったじゃん、アレ私が止めてなかったらサルーシャ自分がさらわれるつもりだったんだよ、信じられる？」

「普通ならやらねえことだがこいつならやりかねないと思わせるな……！」



「いったい俺のイメージはどんなものになっているのか、ちょっと問い詰めたくなるな、ここまでの反応されると。」

「面倒見はいいけど無茶苦茶な奴」

「ぶっ飛んだ発想をして、それをやっちゃう人」

「俺がいつ無茶苦茶やぶっ飛んだ発想を行動に移したというのか」

「蛆が湧いて蠅が飛び交うアレの淵に立って言ったの誰だ？」

「精霊を人に生まれ変わらせようとするのはぶっ飛んだ発想だと思うよ？」

「はいこの話題は終了な、終わり終わり！」

「事実でしかないから文句も言えん、くそっ、今日のところはこれで勘弁してやるぜ。」

「あ、逃げた」

「勝ち目がどう考えてもないからだね、退き際がどうのとか言い出すよきつと」

「名将は退き際を……よーし、別の話題を出せ、別の話題を！ じゃなきゃ俺は今から森まで飛んでいく！」

「すねんなよ、からかいすぎたのは謝るからよ」

「笑いながら謝るといわれても謝罪してるとは取れないんだが？ いや、俺はすねてなどいないので謝罪自体不要であると主張したい」

「わかったわかった、すねてなんかいないよな」

「ええい俺とお前は同い年だろうが、年下の子供が駄々をこねるのを宥めるみたいに対応するんじゃない！」

「はいはい、別の話題にしよーな、別の話題」

「臍を噛む思いでいらんでも迫力が足りないのかあやすように流された、ちきしょう前世から数えりや記憶が残ってる分俺のが年上なのに……早く大人の肉体が欲しい。」

「そーいやさ、お前は大人になつたらどうすんだ？」

「心の声が聞こえたわけではないだろうに、なぜか思い浮かべたことと被る話題を出してきたな。」

「とりあえずツクヨを人にする以外は決めてないなあ」

「んじゃあ、嫁さん見つけてどっかで暮らすって感じか？」

「最終的にはそうなるかな？　そうなる前にやりたいことはあるが」「やりたいこと？」

＜世界最強になるんだっけ、たしか＞

それもある、あるんだが今言いたいのはそれじゃない。

実はずっと前、魔力から記憶を引き出せると聞いて試した時からの野望が俺にはあるのだ。

「誰も見たことのない景色を見たいんだよ、例えばどこまでも広がる大海原とか、雲の上に出て見る雲海の広がる姿とか、……月を近くで見るとどうなっているのか、とかな」

話している間無意識に腕を上には伸ばしていた、その先にあるはずの月をこの手に収めたいという思いがそうさせたのだろう。

前世の死因になったり精霊なんて危険物を自分の中に抱え込む羽目になったというのにいまだに懲りていないらしい、原風景というやつだろうか？　前世の子供の時見た大きな、とても大きな月が俺の心の奥底に焼き付いているのだろう。

「そういうのを記憶に収めたいから旅をしたい、そのために冒険者になるつもりだよ」

「……………意外と大きな夢を持ってたんだな、お前」

「まあな、現状から考えると遠い将来の話だが」

なんてつつたって俺がいないとまだ食ってけないからなこのグループ、それをどうにかしないと旅に出られやしない。

「いい夢だと思うぜ、俺は、俺だけは応援してやるよ」

「ありがたいな、お前のはなんかないのかよ？　大人になったらやりたいことの二つや二つぐらいあんじやないのか？」

「正直考えたこともねえんだよ、いつ死ぬかわからなかったからな。今を生きているので精いっぱいだったんだ、だけど、なにか考えてもいいのかもな」

そう言って笑うローグの顔は今まで一番自然な笑顔であったように思えた。

## 治安を守る者

「お疲れ様ですメズ隊長、現地協力者のあてはいかがでしたか？」  
「良さそうな集団があったよ、今回の件が片づいた後も是非懇意になりたいぐらいのな」

ローウェス・テラートウスでは上等な部類に入る宿の一室、ラテベア教に所属するメズとその部下がにこやかに会話を交わしていた。

「ほう？ 長く協力者になつていただけそうですね？」

「いや、長く持つグループではないだろうな」

「えっと、早晚つぶれそうな集団となぜ懇意になりたいの？」

「ごくあつさりとした否定に面食らう部下、さすがに真意が理解できず疑問を口にした。」

「簡単なことだ、彼の集団は二人でまとめている物であり、片割れが表に出てくるのにためらっているからだ」

「？ その程度でしたらもう一人が代表に、表に出たがらないほうが腹心として組織を支えればいいだけでは？」

「そうだな、その者が私を見て緊張しなければ私もそう思ったろう」

部下の目が鋭さを帯びる、自分たちの役割を十分に理解しそれに忠実に行動してきたが故の反応である。

「ほう、組織を動かす立場であれば後ろ暗いことはあるでしょうが、我々の姿を見て緊張するとは少々穏やかではありませんな」

「相当不味い事をやっている……と思うだろう？ しかし、彼らの年齢を考えると我々の事を知らない可能性が思い浮かぶのだ」

「知らない、ですか？ 若くとも組織を束ねる立場に立つ者であれば我々の役割と活動は知っていて然るべきでは？」

部下がそこまで話したところでメズは部下の勘違いに気づいた。

「すまんすまん、協力者という事で勘違いをさせたようだ。今日私がいに行つたのは孤児のグループだよ」

苦笑しながらの謝罪に対し部下の困惑は深いものになった。

協力者と言っていたのになぜ孤児のグループが？ そこで一つの可能性が部下の脳裏をよぎる。

「メズ隊長、まさかとは思いますが、囿捜査をさせるつもりではないでしょうな？」

部下の目が先程のものより鋭く冷たいものへと変わっていく、体も一見変わらぬ姿勢であるが見る者が見ればいつでも飛びかかれるものに変わっていた。

「その懸念を持つのは正しいな、だが我々の誇りにかけてその気はないと言おう。無論、被害にあいかけた子供から話程度は聞こうと思うが」

「……信じましょう、貴方がそういう手段を選ばぬ人でないと思っはいますので」

ふうと息を吐き部下は体から力を抜く、実力でも立場でも上位の人間に立ち向かうのは緊張するものである。

「重ねてすまん、一から説明すべきであった、無用のプレッシャーを与えてしまったな」

「いえ、構いませんよ。自身の役割を自覚できた貴重な機会と考えておきます」

部下が言っているのはもちろん皮肉である、メズも気づいているが自分に非があるので指摘はできなかった。

「あー、なぜ孤児のグループが良い協力者になるかだったな？」

それはな、彼らの中の何人もが魔法を使えるからだだよ」

「……にわかには信じられませんが、専門的な教育と受ける側の努力と才能があつて初めて使えるものでしょうに」

確かにラテベア教や冒険者組合には魔法を使える人間は多くいる、ただそれは教育体制をがっちり固めたからこそその成果だ。

普通の都市国家であれば都市全体で数名のみというのが平均であり、ここローウェス・テラートウスのようにゼロであることだって珍しくない。

そこまで考えて気づいた、なぜ隊長が懇意になりたいと言っていたのかを。

「なるほど、貴重な魔法使いを確保したい、という事ですね？」

「それも、あるが、な」

メズはそこで口ごもる、にわかにとどろか笑い飛ばすのが常識レベルの話をする事になるからだ。

「その子供らだがな、一年前までは魔法自体知らなかったそうなのだよ」

「そんな馬鹿な話をまさか信じていらっしやるので？　魔法のためと知らずに修練をしていたとでも？」

案の定部下も呆れた様子で否定してきた、予想できた反応であるが『このおっさんついにボケたか』という目で見られるのは少し辛い。

「信じられんだろうが事実なのだ、魔法を使える全員が揃ってそう話しているようなのだよ」

「感知と操作が可能になるまで半年から一年、そこからまともに使えるようになるまでは二、三年というのが通常でしょう。それが四分の一から三分の一程度に短縮ですか、夢のある話で結構な事ですな」

部下のしらけた目が本当に辛い、他者から聞かされたら自分も寝言は寝て言えと言いたくなるので理解はできるが、辛いものは辛いのである。

「まあ待て、正気をを疑う気持ちはよくわかる。だが思い出してくれ、私をみて緊張していたという事実をだ」

「短縮させることができる技術を持つているからこそその態度だと？」

辻褄は合いますな、辻褄だけは。で、孤児の集団と、我々の事を知らないような年齢の子供だと仰ったはずですか？　その年齢の子供にそんな方法を編み出されてたまりますか！　各国や組合、そしてラテベア教の教育機関の全員が卒倒しますよ!？」

「卒倒するような技術だからこそその態度、とは考えられんかね？」

む、と眉根を寄せ考え込む、これもまた辻褄だけは合う話だ。

だが、メズが言いたいことはそこではない。

「その子供は方法の発案者ではなく、被験者ではないのか。そうおっしやりたいのですね？」

「そうだ、私をみて緊張した理由も大人という存在自体に警戒しているのならば理解できるだろう？」

隊長が言いたいのはこういうことだ、その子供は被験者であり、脱

走者ではないのか？ 脱走したはいいが生きる糧を得るためには受けた実験の成果ぐらいしか持つていない状況、当然使わざるを得ない、しかし使えば注目を集める、脱走した場所に連れ戻されるのはいやだから表に出たがらない、そして緊張していたのは『もしや追手なのでは？』という想像をしてしまったから……。

「ずいぶんと物語的な話ですな」

「だがあの年齢の子供が編み出したというよりは納得できるだろう？」

「まあ、幾分かは」

実際に魔法を使える子供がそんなにいるのか、いたとしてどの程度の人数なのか、どのぐらいの期間で習得できたのか、まずはそのあたりを調べることが必要だろう。

「人買いどもを調べる片手間程度に、ですが」

「おう、まずは地の獄に繋がれるべき人非人どもを片付けるとしよう」  
この世界では奴隷制度は確かに存在する、だが子供がその対象になる事は少ない。

理由としては、労働力としてあてにできないというのが一つ、そもそも育てる費用がかかりすぎるといえるものが一つ。

「それこそが我々の役割ですからね、いつものように隊規の復唱を？」  
「そうだな、初心忘るべからず、アーク様の残した言葉に背かぬようにもな」

腰の剣を鞘ごと外し胸の前で掲げると、両者は声をそろえて唱和し始めた。

「我らは罪を裁く罪を負う者、人の身に過ぎたる業を負う者なり」

「我らは善にあらず、我らに誉れなし、我らは許されざる罪人、なれど歩みを止めぬ者」

「全ては善良なる民のため、悪を成す者に断罪を、人に仇成す者に鉄槌を」

「より善き社会のため我らは礎となる、人々の笑顔こそが我らの誇りにして救い」

「いつか我らが罪を重ねる要なき世の訪れんことを」

そして最も大きいのがラテベア教所属の彼らに目を付けられやすいことだ。

彼らの名は地獄の獄卒隊、犯罪者をその場で断罪することを多くの国家から認めさせている悪人の最も恐れる者たちである。

ローグたちのグループでは処理担当希望を随時募集中である。

「おーいサルーシヤ、新しい処理担当希望者だぞー」

「お、お願いします」

「あいよー、んじゃ小屋の中へどーぞ」

そして今新たな希望者が小屋の中へと案内されていくところであつた。

「それじゃまず確認させてくれ、とにかく臭くって汚いのを処理しなきゃならないんだが、覚悟はできてるな?」

「はいっ、ここひと月ぐらい回収やってましたけど、どうせ汚いんならもっと稼げる方がいいっす」

「処理担当になつたらそこから外れることはできない、これも聞いているな?」

「はいっ! 逃げ出したら他全員で捕まえにくるって聞いたっす」

この辺りは仕方ない処置だ、うっかりツクヨの事がばれたときに逃げ出されても多数で追いかけられるようにするためものだからである。

後、純粹にきつい仕事なので交代要員を減らすとか冗談じゃないという感情もある、というか表向きはそういう理由である。

「じゃあこれから処理に必要な技能を使えるようにするから、まずは目を閉じて指先に意識を集中しておいてくれ」

そういつて目を閉じさせた少年の手をとって、サルーシヤも彼の指先に集中する。

そして魔力を指先に集中させ、彼の指先の中の魔力を無理やり揺り動かした。

「うっひゃあああ! なに、何をしてんすか!? 指先がすっげー熱いんすけど!」

（外から無理やり魔力を動かして魔力が動く感覚を覚えさせようとしてるんだが、説明はする気はありません。熱く感じるってことはおそらく熱を発生させる役をやらせた方がいいな）

しばらくそれを続けた後、魔力だけを顔にぶつける。

「うわっぷ?! 今なにしたんすか!?! 風? いやなんか違ったすよねえ!?!」

「はい、処置成功。目を開けていいよ」

今回は一発で成功したが感知できない奴はどこまでできなかったりする、それでも二三日でできるようになるので従来と比べると途轍もない期間短縮である。

「なんなすか、もー……うわあ! なんか部屋の中が変な感じに!?!」  
「それが魔力つてやつだ、詳しく説明するからしつかり聞いて覚えてくれ」

ここからは魔力に関する説明と魔法を使う方法についての説明が行われる。

「えーつと、すいません、さっぱりわかんねえつす」

「あー、うん、みんなそんなもんだから気にすんな。少しずつ分かるようになってくれりゃいいから」

なおここでは思いつきり躓く奴しかいないので時間がたつぷりとられる、とはいっても平均半年から一年程度であるので教育関係の人間が聞いたら目をむくことだろう。

そのあとは幻影を使つてのイメージ訓練なども行いつつ、魔力量を増やすことも並行して行つていく。

使えるようになり処理担当の当番に入っているのは未だに数名、それも熱を発生させる役、風を操つて臭いを漏らさない役、虫を退治する役の三つに分けてようやくサルーシャの代わりを務められるようになっていった程度。

そんな仕事配分であるためこの仕事で入る金の分け前は、教育役と処理担当三人分を同時にこなすサルーシャが4、親分にしてサルーシャに次ぐ腕前で二つ分は担当できるローグが2、残りの担当者全員で1（修行中でまだ担当できない奴はできる奴の1/3）という配分



である。

文句を言ったやつもいたがローグの『ならサルーシャの役割をやるようになれ』という一言で黙らされている。

なお、サルーシャが貰った報酬の半分くらいは稼げなかった子のために使われているためその文句は割と的外れでもある。

「俺の仕事一向に減らないんだけど、どうにかなんないかね？」

くサルーシャの担当の時私が全部変わってることもおおいじゃん、あとはみんながうまくなるまで待つしかないんじゃない？」

「他の稼ぎ方見つからんかねえ……」

見つかったとしてもサルーシャの負担は減らないだろうとはローグとツクヨの共通見解である。

とはいえこの仕事安定しているおかげでローウエス・テラートウスの孤児グループは完全に統一され、都市内の孤児が飢え死ぬことがなくなっているので都市への貢献度で見るとトップクラスなサルーシャであった。

## 猿、後続に道を作る

あのおっさんまた来たんだけど！　なんかたくさんのパンを持ってだから邪険にもできねえ！

「やあ、ローグ君にサルージャ君だったね。今日はラテベア教の者として義務を果たしに来たんだ、受け取ってくれるかな？」

爽やかに笑いながらきっちり全員にいきわたる量持つてきやがった、もう人数調査完了してるってことだよな？　怖っ！

「ちよつと夜逃げの準備が必要かもしれない……！」

「いや、余るぐらいの量持つてきただけだろ。この間来た時大まかな人数聞いたらしいし、考えすぎだろ」

「つつても警戒しないわけにはいかないんだよ、あのおっさんがラテベア教である以上獄卒部隊を呼び寄せる可能性については考えなきやまずい」

婆の記憶から知ったことだが、獄卒部隊つてのは生物災害対応のための部隊でそこ所属の人間は徹底的に戦闘訓練をやらされるらしい。

武芸十八般と魔法の両方を納めさせられる鬼のように厳しい訓練であり、所属の者はそれこそ無双ゲーのキャラのごとき真似ができるそうなの。

さらに治安維持の役割も持つているので悪人には容赦がない、そんなおっそろしい奴らを抱えているようなところは避けるべきだろ？

「いや、悪人じゃなきや大丈夫なんじゃ……そうだな、俺が間違つてた。お前はあまり関わらないほうがいいな」

「気づいてくれて嬉しいよ、基本的にあのおっさんへの対応は任せろわ」

俺もツクヨも自分から悪事を働く気はないが、初見の他人がそれを信じられるわけがない。

三大生物災害に数えられる精霊がいたら当然対応部隊呼ぶだろうし、それを人里近くに連れてきた奴とかただのテロリストだからな。

くあのおっさん魔力量もすごいし、襲われたら逃げるか殺すかの二択だろうね」

「三択かもな、殺されるっていう最悪の選択だけだ」

それを選ぶぐらいなら婆相手に抵抗してないが。

「そんな強いのかあのおっさん、もしかしてその獄卒部隊の人だったりな」

「……え？」

何気なく、からかい半分でローグは言ったんだろうがその可能性は考えてなかったぞ。

なにか特徴がなかったっけ？ たしか左胸のあたりになんか隊章をつけてたのかなんとか……。

「……あのおっさんさあ、左胸のあたりに金棒と鎖の意匠の物をつけてた？」

「ん？ ああ、確かつけてたな。あのちよつと派手目の奴だろ？」

「……記憶をさらってみただけさあ、上の立場の人間の方が派手にした方がわかりやすいからそうしてるんだよね？」

「ああ、けどあまり派手なやつにすると無駄に威圧感が増えるからって変化が乏しく、トップでもない限り区別が尽きづらいとも記憶は言ってるな」

「……あれ、かなり派手だよな？」

「記憶にあるものと比べて、金で縁取りしてあったりと一目でわかるぐらいには」

「<……>」

さて、となると忙しくなるな。

「んじや俺はいろいろと旅に必要な物を集めてくるから」

「さてさて、ノータイムで諦めんな。誤魔化す方法とか見抜かれない方法とかもうちよい考えやがれ」

「って言われてもなあ」

長くいればいるほどバレる危険も上がるし、匿っていたってことこいつらに迷惑が掛かるのも嫌だ。ラテベア教は知らなかったって言えば責めてくるような奴らじゃないのは知ってるが、それはそれとして精霊の存在を許すほど甘い奴らでもない。

だから早めに俺はここから離れるべきだと思うんだが……

「いやいやいや、アレの処理とかお前がいなかったらあつという間にやめることになるぞ」

「んん？　なんでだ？」

「アレやる奴らかなり嫌気さしてるからな？　親分の俺と一番強いお前が率先してやってるからついてきてるだけで、いなかったらみんな投げだしてるぞ」

「ええつと、なんで？　毎日確実に食えてはいるだろ？」

「もつと贅沢ができると思ってたんじゃねえの？　あと、死ぬくらいまで食えない奴って今いねえからな」

「ああ、苦勞して飯をいつでも食えるようになったのに、そうじゃない奴も死なない程度に食えるようになってるから不満が出るのか」

「つっても二三日食えなかつた時にしか飯食わせてないんだけどな、そこまでの金はさすがに捻出できない」

「……もつと待遇のいい場所にいたらそいつらの不満もなくなるよな。そいつらをおっさんに引き取ってもらおうのってどうだ？」

「おいおい、なにを考えてやがんだよ？　ラテベア教はお前にとつて危険な相手だろ、そこに顔を知ってる奴らを送り込むって……」

「そこまで口にしたところで俺の狙いに気づいたらしい」

「くつまり、ラテベア教の中にすぐに襲い掛かってこない人を送り込むうとしてるんだね？」

「間違っていないけどもうちよい表現を柔らかくしてくれツクヨ、事実を知った時話し合いから始めてくれる人を増やすって感じで」

「ついでにもつといい場所に行けるとわかれば今やってる処理仕事にも身が入るわけか、だけどお前の負担結局減らねえんじやねえのか？」

「増えないんなら上等じゃないかね、負担云々考えるならそもそも森にこもってた方が楽だったしな」

「人間社会で生きるための必要経費ってことで納得しとくのが一番丸いってもんだな」

「あとはおっさんとの交渉だけど、一緒にやってくれるだろ？」

「このグループの親分は俺だぞ？　俺が出ないでどうすんだよ」

くそれじゃ、私はその間サルーシャの奥に引っ込んでるから。終わったらすぐに呼んでね？ 私も結果が気になるから〜  
そうして俺らは帰ろうとしていたメズさんに声をかけ小屋の中へと案内するのだった。

ローグとサルーシャから話を聞いたメズは少々戸惑っていた、不都合だからというわけではない、むしろそうなればいいと考えていた通りだったからこそその戸惑いである。

正直都合がよすぎて何かの罫ではないかと一瞬思ったほどだ、彼らにメリットがないだろうとすぐに否定したが。

「すまない、なぜ私に引き抜きをしてほしいのか、それをもう一度説明してくれないか？」

「んー、端的に言っちゃまうと『上がり』がほしいんだよ。ラテベア教所属ならここよりまともに生きられるし、俺らより上に行けると考えるだろうからさ」

「君らが引き抜いてほしいという子は君らのグループの中でも上位の子だろう、彼らが抜けて大丈夫なのかね？」

「全員をいっぺんに引き抜かれるわけでもないし、最悪でも最初のころみたいに俺が処理に張り付くだけで済みますよ」

なんでもないことのように言うが彼らだがメズは知っているのだ、引き抜いてほしいという子らがその作業に根を上げている事を。そして、その子たちが彼らに不満を抱いている事も、だ。

「人数が増えすぎたつても引き抜いてほしい理由の一つだな、食べねえ奴にも食わせてつから結構やべーんだわ、金が。それでもまだ最初の方の分を使うだけで済んでんだけどな」

簡単に言ってみせるがそれがどれだけ辛い事か、何かあればすぐに飢えて死ぬのが彼ら孤児というものだ。いや、死ぬ事など当たり前前に近いはずなのだ、それなのに彼ら二人は笑ってみせている。

崖を登っている最中にジリジリと命綱をが切れようとしているに近いはずなのに笑って他者を助けようとしているのだ。

事ここに至ってメズは覚悟を決めた、救うべき命を取捨選択する

と。

「ローグ君、サルーシャ君、引き抜きならば私はまず……」

「俺らは残ります、気持ちはありませんけどまだやる事があるんです」

しかし、その決意はサルーシャによって止められてしまった。

「俺らはどうとでも生きていけるんです、でもあいつらは無理なんですよ。理由はメズさんならわかりますよね？」

魔法を使えるのは極一部の人間だけだ、そして魔法を使ったからといって無敵になれるわけではない。

心折れるまで打ちのめして反抗心を叩き潰せば、いくら鋭い武器を持っていても危険はなくなるのである。

「あいつらにはそんな目にあってほしくはないので」

少し傍げに笑ってみせるサルーシャにメズは自分の想像が当たっていた事を確信する、同時にそのような境遇におかれながらもなお優しさを失わない姿に感動を覚えていた。

ちなみにこの時のサルーシャの内心はこうだ、

（あいつら無闇に魔法を使ったがるんだよな、そんな事やってたらあつという間にこのおっさんとかに捕まるってーの。是非ともこのおっさんの下で矯正されてほしい、物を壊したり人を傷つけるのは犯罪なんだぞー）

拐われる危険性には一応気づいてはいるがそこまで高いとは思っていない、小綺麗にしてりやどつかの丁稚だと思うだろと考えているからだ。

最初に誘拐の可能性をみた炊き出しでの一件が、ボロボロの死にそうな子供を対象にしてたせいでそれ以外に目が向かなかつたためである。

そんなサルーシャの内心とは裏腹にメズは決意を固めていた、この都市に蔓延る人買いどもを根絶やしにするという決意である。

「わかったよサルーシャ君、彼らは私が責任を持って守り抜こう。そして、君らにこれ以上の労苦を負わせない事を約束しよう」

メズが勢いよくそう言ってみせると二人は驚きに目を丸くする、丸

くした後顔を見合わせて笑いあい丁寧に頭を下げるのであった。

くで、定期的に来てくれる事になったわけなんだ」

「そ、しっかしあいっらの喜びようを見ると悪いことした気がするな。まさかあのおっさんがそこまで教育熱心な人だったとは、あいっらの自由に魔法を使える時期はもう終わっちゃったんだなあ」

「守るってそういう意味なのか？ 普通危険から遠ざける時に使う言葉だろ？」

「だって、あいっら乱暴者なんですよ、って意味で言ったのにそういうって事はおそらく叩きのめされないようにするって事だろ、しっかり躰される事だろうさ」

「そうかねえ？ なんか勘違いがある気がするんだけどなあ……」

とりあえず当面の危機は抜けた事に満足しているサルーシャはローグの言葉をあえて無視した。

処理作業にしたって自分だけでなくツクヨもいる、そこまで近づく必要もないしむしろ遠くからやった方が魔法の練習になる。虫退治は風を操ってメタンガスと一緒に巻き上げて別の穴で焼けばいいし、とサルーシャだけは処理作業をあまり苦にしてないのだ。

「回収作業の方がよっぽど嫌なんだよな俺」

「もしかして、金を半分くらい食えない奴に回してんのそれが理由か？」

「みんなは食えるようになる、俺は罪悪感が薄れる上に感謝される、いい事づくめだろ」

「それが原因でやれるようになった奴から不満が出たんだが？」

「……力ある奴こそ苦労すべき、そう思わないか？」

「実践もしてるから文句はねえけど、考えてなかっただけだろ？」

「おっと、そろそろ引き抜きの話をみんなにしないとな」

そそくさと逃げていくサルーシャの背に思いつきりため息を吐くローグであった。

なお、この後メズが逃げ出すことの禁止について『君らが誘拐されないようにするためだ』と言いだしたため、めでたくサルーシャの勘違

いは正された。

ポーカーフェイスを保つのにとてつもなく苦勞したらしい。



## 間違いは、隠れひそみ気づけぬもの

暗い裏路地を男が全力で走っている、男の頭の中ではなぜの二文字がずっと飛び交い続けていた。

男はいつも通りに仕事をしようとしていた、通りをちよこまかと走り抜けるそれをみて狙い目だと思ひ仲間と共に追い詰められる場所へと先回りしてのだ。

ここ半年から一年ほどこの副業は成果が芳しくなかった、その前まではちよこちよここと成功させその度にちよつと贅沢な酒やツマミにありつけていたというのに。

ここには厄介な奴らの拠点がない、だからこそ苦労なく大手を振ってそれをやってこれた。

そう、いないはずだったのだ、あいつらは。

「どちらまで行かれるのかな？ よければ君が行くべき場所へとご案内したいのだが」

角を曲がったところで前からそう声をかけられた、このごろ随分と綺麗になって汚物処理の穴を気にする必要のなくなった裏路地を全力で走っていたはずなのに。

「なに、驚くことではないよ。君の全速力より私の走る速さが上だっただけさ」

男は逃げ足自慢だった、なんなら荒野に住むハイエナからも走って逃げ切ってみせたほどだ。

それなのに息も切らさず汗の一つもかかずに追い抜き、立ち塞がってみせるなんて……

「お、お願いだ、命だけは助けてくれ！ 知ってる事は全部話す！ 俺は小遣い稼ぎ程度でしかやってないんだ！」

「語るに落ちるとはこの事だな。今回だけなら未遂という事で見逃す可能性もあったが……詳しい話を聞かせてもらおうか、誰にも迷惑のかからぬ場所だな」

夕暮れの中鋭い悲鳴が響き渡る、小悪党の断末魔に悪人はおびえ善人は過ちを犯さぬよう引き締める。

そうして治安が安定することこそ獄卒部隊の存在意義なのであった。

「これはどういうことか！ 私はこの都市内での貴方がたの活動を認めた覚えはありませんぞ！」

「ですからこのように謝罪に参っているのですよクピディアス殿。図らずも治安維持活動を行った形になりましたからな、報告せぬわけにいかぬと思いきうして参ったわけです」

口角泡を吹いて講義するクピディアスに慇懃無礼に頭を下げるメズ、頭を下げたまま昨晚の事情とやらを話し始めた。

「いえ、我らの隊に入れるかもしれないぬ新人候補になにやら付け回す不審者がおりましたな、誰何するためには声をかけたのですがいきなり逃げ出されたのですよ。これは怪しいと追いかけて捕まえてみればなんと、人買いの一味だということではないですか。さすがにそれを見逃すことはできず捕縛しまして、こちらまでしよつ引いてきた次第です」

新人候補というのは嘘ではない、ただこの都市の孤児グループはローグたちのグループ一本にまとまっているため孤児全員に適應されるわけだが。

誰何のために声をかけたのも間違いではない、威圧的な声を出していた点を言つたないだけである。

捕まえた後何も聞いていないわけがない、もちろん尋問している。起こったことのすべてを話していないのはクピディアスも想像がついているがそれを指摘しては、

『この都市の治安の悪さが原因です、この機に我らが活動を許可しては？ 無論全力を尽くすことをお約束いたしますよ？』

などと言ってくるのは明白だから口をつぐまざるを得ないのである。

「そ、そういうことならば致し方ありませんな、ですが今後はお控えいただきたい。でなければこの都市への出入りをお断りさせていただきますぞ！」

「そうですね、身内に危険が及ばない事態には手を出さないことをお

約束いたしましたしょう」

「そんな曖昧な条件で許可できるとでも……」

「本来ならば！ 我々は罪人すべてを切つて捨てる判断が許されている！ この都市内では我々の活動許可が出ていない故今回も捕縛のみで終えたのだ!! これ以上の譲歩を望むのならば、ラテベア教の上層部と直接交渉していただくよう」

後からどうとでも言い逃れできそうな条件に鼻白み、さすがにそれは許可できないとクピディアスが口にする前にメズは大上段から切つて捨てた。

恫喝にも似た物言いに文句の一つも言いたいところであったがさすがにラテベア教を丸々敵に回すわけにはいかない、渋々追及を諦めるクピディアスであった。

そのあとは話すべきこともないということできさつさとメズは退出していき、屋敷の門前で待っていた部下と合流した。

「お疲れ様です隊長、奴らのそつ首落とす許可はもらえました？」

そして開口一番の部下の言動に眉間に皺を寄せる羽目になった。

「……アーク様の残した言葉にこういうものがある、『罪を憎んで人を憎まず』と。彼らは悪人であり罪人であるが、同時に人でもあるのだ。あまり怒りや憎しみをぶつけるのはやめなさい」

「はっ、申し訳ありません」

ため息を吐きたい気分を抑え經典の言葉でもって注意をすると素直に過ちは認める、無論言葉だけで、だが。

(我が隊の者は本当にどいつもこいつも……)

彼の部下がこういう性格なのはある意味仕方ない話ではある、隊の性質上こういう性格の者が多く集まるのだ。入隊してから、いや、する前から再三再四言われることは『我々は正義ではない』『悪を断つだけの別の悪である』『罪人であれ悪人であれ殺人には変わりない』『正義であるという思いに酔うな』などである。それらに反するのであれば自身が悪として裁かれる、そういう覚悟を常に持ち続けなければいけない部隊なのである。

それでも入隊するような奴は筋金入りの悪事嫌いか正義感が暴走しがちな熱血漢、あとは厳しい隊規で雁字搦めに縛り上げなければならないような訳ありの人物ぐらいである。

そしてそんな奴らが都市国家の長程度に臆するような可愛げがあるだろうか？ 答えは否だ、なんだったら都市を幾つも抱えるような大国の王相手にも平然と歯向かうような連中ばかりである。

(平隊員のころは私も隊長に同じように思われていたのだろうか)

なお、当然のごとくメズ自身も同類である。

ただ、隊長になつたら自重が効く、あるいは一番自重が効くものが隊長になるといった方がいいのかも知れない。

そうやってメズが感慨にふけていると、注意した後そのまま動かないメズを心配したのか部下が声をかけた。

「どうされたのです隊長？ どこかに討ち入りする計画でも考えていましたか？」

訂正、心配ではなく期待であつた模様。そのような前例でもあつたのだろうか？ いや、そこまで強引な手段はとるわけがないので、部下がよほどの都市内の治安状況に不満があるだけだろう。

「俺はもう隊長だぞ、そんな勢い任せな真似ができるか」

「確か前回やったのはメズ隊長が副隊長であつた時では？」

「だからこそだ、あの後どれだけ絞られたと思つてる。そういえばあの時は俺だけ代表殿に直接お叱りの言葉をもらったんだが、その前は受けなかつたということはあれはある意味洗礼なのかもしれない」

「どうやら前例があり、なおかつ前回の首謀者はメズ自身だつたらしい。」

しかも複数回あつたようで、その時教団のトップに直接怒られるのが隊長になる者への洗礼とすらなっているようだ。

「あれつてその時の責任者だけが呼び出されるんですかね？ それとも一番自重ができる人間が呼ばれるんですかね？」

「前者だと思いたい……後者の可能性を否定できんのが我らが隊の酷さだな」

獄卒部隊、それはラテベア教外からは最大の武闘派だと見られてい

るが、内部からは一番の問題児部隊と認識されている部隊である。

「いかがでしたかクピディアス様、奴らへの牽制の効果のほどは……」  
メズが退出し部下と物騒な雰囲気を含んだ会話していたころ、クピディアスの下にはソレティアが訪れていた。

「ふん、予想通り、いや予想より強行的であつたわ。奴らめ、ガキどもの中に自分達の子飼いを潜り込ませたようだぞ？」

「子飼い、でございますか？」

ソレティアが訝しげに聞き返す、ラテベア教とはあまり繋がりが無い言葉であつたからだ。

「ああ、新人候補などと言つておつたからな、ラテベア教が困い込んだ孤児でも連れて来たんだらうよ。そこまでしてここに影響力を持ちたいとはな、築き上げた者としては誇らしいではないか」

嫌らしい顔で嘲笑うクピディアス、今日までの獄卒部隊の行いにはわずらわしさしか感じていなかった。

だが、今回の囚捜査のようなことをしたということはそうするしかなかったわけで、綺麗事ばかり口にしていた相手が自分と同じところにまで落ちたということではないか。

そう考えると多少は溜飲が下がるというもの、暗い感情とともに満足を感じるクピディアスである。

言うまでもないがそんな事実はない、現地の孤児をこじつけで新人候補と言い張っているだけなのでクピディアスの考えていることは的外れである。

しかし、人は自分を基準にして考えるもの、そして彼からすれば無理に新人候補と言い張るより別のところから連れてきたという方が納得できるのである。

「ソレティアよ、奴らが送り込んできたであろうガキを特定しておけ。いざとなつたら人質、いや、それを木っ端の人買いどもに狙わせて目くらましとして使うぞ」

「はい、ですがどういう基準で特定いたしますか？ ガキどもなど違いもほぼありませんが」

「ふうむ、目立つようにはしてはおらんだろうが……潜り込ませた時期にもよるだろうがラテベア教所属だ、浮いた部分が出てくるであろうな。隠していたとしてもふとした時に育ちというものは出るものだ、そういうガキを探せばみつかるだろう。かならず見つけ出せ？ その奴の存在こそが奴らのアキレス腱となるはずだ」

クピディアスの指示に恭しく頭を下げ了解の意を示すソレティア、いもしないスパイを探しだす羽目になった彼に同情すべきだろうか？

一応弁護しておくと彼らは別に無能ではない、廃墟であったこの場所を曲がりなりにも人の住む場所に変えたのだから商売などには有能であったといえるだろう。

ただ、今回の件は別畑であるうえ実際に起こったことや関係者の性格が普通とはかけ離れていただけである、というか孤児の集団と治安維持が使命の部署がつながりをあんな方法で持つと想像する方がおかしい。

この後、ソレティアの放った調査員は見事にサルーシャという大外れをラテベア教からのスパイと断定するという大チョンボをかますのだが、幸いにも時期が来るまで監視でとどめるとしたため間違っているという事実が明るみになることはなかった。

知られたくない事ぐらいある

「なんか俺の事を探っている大人がいたって?」

「そうそう、でもお前自身を探そうとしてたわけじゃないかもな、最近から少し前ぐらいに加わった奴でちよつと変な奴を探していたらしいから」

〈それサルーシヤの事じゃないの?〉

「それだったらもつと直接猿顔の奴っていうだろ、こんなに猿っぽい顔なんだしよ」

〈それもそつか、こんなに分かりやすい特徴あるんだからそれを目印にするよね〉

ここしばらくで猿呼ばわりがすっかり定着してしまった、前世ではさんざん言われてたから慣れているし気にすることでもないんだが、なんか違和感があるな。

村ではそんなこと一切言われなかったんだが、なんでいきなりそう呼ばれるようになったんだろう? と、というか、猿つてこの世界にいるのか?

「直接見たことはねえんだけどよ、この前おっさんが凶鑑持ってきてたぜ。あれすつげーよな、綺麗な絵が何十枚も使われててよ、たつかいんだらうーなって思ったぜ」

おっさん、あんたか原因は。つっーかなんでこんなところにそんな高価なもの持ってきてきてんだあのおっさんは、ドルスさんの書庫にもそんな絵をたくさん納めた凶鑑なんてなかったぞ。

「あんときお前来たかったけどさ、お前の名前の由来がこれじゃないかってわざわざ持ってきたんだってよ」

「なんでサルーシヤで猿が出てくるんだよ……」

この世界での猿の発音は『シーミヤ』もしくは『シミヤ』だ、間違っても『サル』ではない。

「なんでもラテベア教を作った一番偉い人の故郷での呼び名らしいぞ」

「それを聞かされてなにをしろと?」

「押揃われる材料にしかならんと思うんだがなあ。」

「いや、お前のルーツ探しだつてよ」

「はい？ 俺のルーツ？」

「おっさんの予想するところ、俺は結構いい家庭に生まれたのではないかとのことだ。」

「その根拠となるのが俺の名前、顔が猿そっくりでそこから名付けられたのでは？ そして、猿が生息する地域はもつと南の方、知るためにはそのあたりに住むか高価な凶鑑を見るかのどちらか。」

「そして、俺の能力の高さからは良い教育を受けたことが予想される。」

「子供に高度な教育を施せるのは裕福な家庭のみ、なので俺はいいとこのお坊ちゃんだったのでは？ と予想された。」

「ついでにラテベア教の関係者だったのかもしれないって言つてたな、じゃなきや『猿』<sup>シムル</sup>の別の呼び名は知ることには難しいってよ」

「いや、俺への名付けは偶然だと思ふが……」

「両親の名前を足して2で割るとちょうどそうなるんだよな、俺の名前つて。いや、そんな単純すぎる名付けするか？ もしかしたら司祭さんとかに改めてつけてもらったとか……って、ないなそれは。」

「ほつとんど忘れてるけど産まれる前から俺の名付けは決まってたわ、じゃなきやあの時『誰が猿じゃー！』とは思わないもん。」

「お、考えこんでるってことは思い当たる節でもあったか？」

「ちげーよ、ちよいと記憶を漁つてただけだ。とりあえず名付けは産まれる前からだと思ふからおっさんの予想は外れだな」

「ちえつ、産まれた時から猿顔ヤローだつてからかつてやろうと思つたのによ」

「つまらなそうな声を出しやがつて、俺を押揃うネタなんぞツクヨからいくらでも引き出してるとじゃねえか。」

「というかだ、いいとこの産まれていうならお前だろローグ」

「は？ なにを言つてんだオメー」

「思いつきり顔を歪めてメンチを切ってくるローグ、凄んで黙らせるつもりだろうが無駄である。美形なこいつが凄めばそれなりの迫力



が出るが、悲しいかな婆の方が素の顔で迫力あったんだよなあ。なので俺には効果がないのである。

「お前視野が広いよな、最初に金稼ぎの方法提案した時すぐに欠点指摘してたし」

「そんなぐらい生きてく上で必須だろ、長く稼げなきゃ生きてけねえんだからよ」

「子どもや酒場で管巻く破落戸を見てもそう言えるか？ あいつら結構刹那的に生きてるぞ」

「くそつ、反論し辛え……いや、運がなきゃ無理だろあんな生き方。俺がそうしなきゃ生きてけなかつたってこと間違いはねえ筈だ」

「逆だ、逆。運が無くてもそうやって生きてけたって事が能力の高さ、ひいては教育の高さを示してんだよ。腕っ節ならともかく頭の良さ、それも長期的な視点で見れるタイプの良さって知らなければ発揮できるともんじゃないからな」

知識が必要な類のもんだからな、少なくともただの小作人や単純労働ひに従事する奴にや必要ない能力だ。

必要ない能力を子供に教育できるわけがないので、こいつの親はそこから辺ではないと断定できる。

「ついでにお前って相当美形だよな」

「！ い、いきなりなにを抜かしてやがる！ 変態かテメエ!!」

そんな顔に顔を赤らめるなよ、可愛くみえて変な気分になるだろうが。

「権力者ってのは美形が好きなんだそうよ、で容姿って親に似るものだろ？ これを遺伝して言うんだが、美形ばつかを嫁だの婿だのにするから自然と遺伝して子孫も美形ばつかになるんだってよ」

「残念だったな、俺は母親似で母さんは普通の町人だよ。偶々美形に産まれたっただけだろうさ」

語るに落ちるってこの事だよな、母親はそうかもしれないがこいつが言及してない部分が丸わかりだ。

「父親が権力者な訳だな」

俺の断定する口調で失言を悟ったらしい、悔しそうに顔を歪める

ローグ。

別に隠さなくてもいいだろうに、それとも母親からなにか言い聞かされているんだろうか。

「大体想像ついたけどそんな気にしなくていいぞ？　言いふらす気もそれでどうこうする気もないし」

「なっ、ならなんで……」

「追求されたくないもん持つてるのはこっちだけじゃないだろ？　つて言いたかっただけだよ」

「あつ！　……悪かったよ、ごめん、な」

さつきとは別の理由、今度は羞恥で顔を赤らめた後しおらしく謝罪してくるローグ。

なんだか、美形な奴がシユンってなってるのを見ると、こう、くるものがあるな。サディストの気持ちってこういうものなのだろうか？　それともただの優越感か？

とりあえず、罪悪感が湧いてくる前に空気を変えよう。

「変に落ち込むなよ。知りたいんだったらお前だけになら教えていいから、探りをいれるんじやなくて直接聞いてこいって」

「！　いいのかよ!？」

「お前だけならな、っていうかツクヨの件と比べりや小さな事だろ」

「確かにそうだな、んじやあさあ……」

それから俺の昔の事を根掘り葉掘り聞かれた。

「米？　食った事ねえなあ、美味しいのかそれ？」

「そんな小さい頃から魔法の勉強してたのかよ！　通りで上手いわけだぜ」

「婆って奴はなんだってそんなキツツイ事を……、え？　植物ってそんな死にくいのか？」

「魔法ってそんな身近な事に使うもんなのか？　多分、その村だけだと思っぞ」

「へー、騎士の人の家に入り浸って、か。それで色々知ってんだな」

婆の一件とツクヨがどうバレた以外はほとんど喋った気がする。

我ながら随分とこいつを信用していたみたいで、その二つ以外黙っ

ている気になれなかったのである。

まあ問題はない、ツクヨと仲良くやってくれてるし、そこそこ長い付き合いだしな。

そう、気づけばここで過ごした時間も三年を超え、四年目に入ろうとしていた。

もう数年したら旅立とう、その時はこいつも一緒かもしれないが、それも、きつと悪くない。

「本当か、それは」

部下の何気ない話を聞いたソレティアの声は固く冷たいものであった。

「ひっ！ は、はい！ 少なくとも俺にはそう思えました」

この部下は大分長く仕える者であり屋敷にもよく出入りしている、なので彼女を見た事があっても不思議ではない。

不思議ではないが、問題はそこではない。

「本当にその潜入工作人員の近くにいたガキに見覚えがあつたんだな？」

「そ、そうっす、やめたメイドが産んだ子なんじゃねえかって思ったただけで、べ、別にソレティア様のお手つきがどうってことじゃ……」

「黙ってる！ ……この事は誰にも言つてないな？」

「はい、誰にも話してねえっす！」

「それならいい、とつとと下がれ！」

そう言われた途端逃げるように、いや、実際に逃げている気分だろう。

ソレティアはクピディアスやチーゾオの相手をしている時とは全く違う顔、酷く酷薄な目で彼を見ていたのだから。

「そのガキの年齢から考えると……あり得るな。あの女、突然やめたのは正妻が孕んだからだと思つていたが、なぜこの都市に残つていやがつた？」

妾が正妻の怒りを恐れて逃げ出す、別段不思議な事ではない。

だが、それならば違う都市にまで逃げ出さないだろうか？ ガキも

物心がつき長旅もできなくはない年齢だったはず、ならばなぜ？

「まさか、とは思うがな」

自分の野望を察知して子供を守るために逃げ出した、それなのにこの都市に残っていたのはいざという時には予備と言える子供をすぐ近くにおいておくため……。

「考えすぎだな、他の都市に行くのに伝手が無かったただけだ」

とはいえ排除しておくに越した事はない、早速その手の仕事担当を呼び出す事にする。

程なくして彼の部下の中では腕利きの男が彼の下へとやってきた、細身でぱつと見では地味で目立たない、そしてどこかくたびれたような印象を与える男だった。

彼が自分の前にひざまずき頭を下げるとソレティアは早速仕事の内容を話し始めた。

「今回の対象はスラムのガキだ、さらって遊んでも構わんが消しそびれるのだけは無しだ、わかったな？」

「旦那あ、勘弁してくださいよ。獄卒の長が彷徨ってる辺りじゃないすか、あつしじゃ出会った時点で詰みですぜ？ あつしは結局そこそこどまり、ガキや破落戸相手ならともかく人間の中でも指折りの奴相手はちよいと……」

頭を下げたまま卑屈そうな声で拒否したそうに語る男、名をメビという者の訴えを一顧だにせずソレティアは重ねて命じる。

「やれと言っている、わかったな？ それに別段急ぎではないのだ、奴がいない時を狙うぐらい訳はなかるう？」

メビはため息をつくと頷いて了解の意を示す。

「あつしもそろそろやばいんで、下っ端にやらせたいんですがかまいませんかね？ もしくは川に流すか、荒野に四肢を折って放り込むかにしときたいんですが」

「死んだことを確認しておきたい、とどめだけは下っ端にでもやらせろ」

最後の抵抗とばかりに多少の条件をつけるが、それすらもほぼ却下されて最低限しか通せなかったことにながつくり肩を落とす。

「へい、わかりやした。んじゃ、早速行ってきやすわ」

観念したようにのろのろと立ち上がり部屋から出ようとするメビの背中にソレティアが思い出したかのように追加の仕事を申し付ける。

「ああ、先に一人始末しておけ、目標は貴様の前にここに来ていた奴だ。ついでにとどめをささせる予定の下っ端が使えるかどうか確認しておくように」

長く従ってきた人間でも容赦なく切る、そんなんだからあんたは頭かしらになれないんですよ、そんな愚痴を心の中だけでつぶやきながら背中越しにへーいと気のない返事を返すのであった。

## 迫る魔手

「いない時を狙えって言われてもねえ、あの鬼さんってばちよくちよ  
く来てるみたいだし、そばにいるのも工作人員らしいしでろくに一人に  
なる事ないんだけど」

下調べをした時点で早くも降参したくなったメビだったが、そうい  
うわけにもいかない事を理解もしていた。

「幸いにも急がなくていいってご注文だ、ゆっくりと機会を待つとし  
ますかねえ」

メビは慎重派であった、ターゲットの行動パターンを割り出し、そ  
のパターン内でどこで実行するのが一番確実かを考え出し、更に気づ  
かれないように破落戸を唆して実行する日に騒ぎを起こさせるよう  
しむけ、暴れられても抑え込めるように破落戸ばかりだが人数を揃  
え、それを新入りの下っ端に率いさせ、最後に自分は後づめとして少  
し後ろから統率した。

特に前に出ないようにしたのはいざという時に破落戸を盾に逃げ  
出すためでもあった、なのでこの結果はある意味順当であったと言え  
る。

ローグは回収作業のため店の裏口へと向かう最中、前を塞ぐ破落戸  
を見て道を変えようとした。しかし横を向いても後ろを見てもにや  
にやと笑う破落戸に塞がれていることに気づき、自分が襲われようと  
していることに気づいた。

「ずいぶんと馬鹿な奴らだなテメエら、俺が孤児たちの親分だと知っ  
てのことか？」

「へへへっ、だから何だってんだ？ ガキ一匹で何かできるとでも  
思ってたのか？」

自分たちが優位であると思っている、これから弱者をなぶろうとし  
ている奴特有の声だ、すなわち嗜虐心と暗い優越感で濁った声であ  
る。

随分と久しぶりに聞く類の声だ、数年前までは聞きなれた声であっ

たのだが。

「こいつは親切心からの忠告なんだが……とつとつぽ巻いて逃げた方が身のためだぜ？ こわーい獄卒がうろついてっからな」

「へ、バーカ。昨日のうちに都市から出たのは知ってたよ、こっちは」

正面真ん中にいる少しだけましなかつこの破落戸が得意気に語る、多分こいつがこの中のリーダーだ。

……こいつ程度でこの人数を率いれることに違和感を感じ破落戸どもの向こうにも注意を向けておく、人間三人分くらいの距離など余裕で一足の間合いの奴を知っているからだ。

そしてわざと十字路の真ん中に身を置く、囲まれている現状で本来ならやってはいけない事だがなるべくたくさんの人数に一気に襲ってきてほしかったのだ。

「いい位置じゃねえか……おめえら、やっちまえー！」

そしてリーダーの声で四方の破落戸がとびかかっていき……

「んぎゃー！」

「ぐげっ！」

「あばばば!!」

ローグが自分の周り浮かべていた雷球に触れ気絶にまで追い込まれた。

「はあっ!?!」

想像もしてなかった結果に破落戸どもが固まる。

そしてそんな致命的な隙を見逃すほど甘いローグではなかった。

「しっー！」

気合一線、まずは頭をつぶそうとリーダーに襲い掛かる、とつさに防御しようとする姿からも周りの十把一絡げな連中よりはましだとわかる。

「ぐぎゃっー！」

先ほどの気絶させられた連中の様子を見ておいて防御しようとする時点で論外であるが。

浮かべた雷球があれだけであるはずがなくあえなく気絶するリー

ダー、それを確認するより前にすぐに正面にいた連中を雷球で気絶に追い込むローグ。

「……まだやるか？」

瞬く間にやられてしまったリーダーを見て明らかにたじろぐ他の破落戸をにらみつけ逃げるよう促してみる、できれば逃げ散ってほしいと思いつつながら。

そして破落戸たちに逃げそうな雰囲気が出たことでローグは少し安堵するが、別にこれ以上のけが人を出るの嫌がったとかそういう人道的な理由ではない。

「いやいや、なんで人数集めたと思ってんですあんなら。このガキがチンピラの数名ぐらいじゃどうにもならないからに決まってるでしょ」

隠すことなく舌打ちする、できればこの自分よりかは強いであろう男が出てくる前に雑魚が減ってほしかったからだ。

「き、聞いてねえぞ！ あのガキあんなに強かったのかよ!？」

「ダーカーラー、そうじゃなきゃわざわざあんたら集めないでしょ？ もうちよい考えなさいっての、そんな奴だから集めたんだけどねえ」

油断なく身構えながらじりじりと後ろへとさがるローグ、この場であれば切り抜けられる、大通りに出たっていい、店に飛び込むのもいい、とにかく人目がないここはまずい。

「あれの弱点ぐらいすぐにわかりそうなものだけどねえ」

そうつぶやきながら男、メビが砂を一つかみローグに向かって勢よく投げつける。

しまった、そう思うがもう遅い、投げつけられた砂に反応して雷球が一斉に放電してしまう。

「ほら、魔法たつて無敵でも何でもないんですよ。回数を使えるわけではないしとつとと捕まえてくださいな」

「へ、へいー」

サルーシャから教わったままの弱点をつかれ舌打ちを一つ。

（魔力量の関係から、俺だとちようどいい強さだったから楽だったん



だけどな)

向かってくる破落戸に氷をぶつけてやりながらメビを警戒し続ける、あいつもこいつらだけでどうこうできるとは思っていないだろう。

「ああもう、結局自分が動かなきゃどうしようもないんですねえ」

つぶやきながら腰から縄でつながれた石ころ、ボーラを取り出すメビ。そんなものをこの破落戸が前にいる状態で投げられるとは思わずローグはわざと破落戸たちを残す。

「ほいよっと」

「うおっ！ うそだろ!？」

しかし、ローグの予想とは裏腹に破落戸の間を抜けてローグのもとへとボーラは次々に襲い掛かる。

いや、よく見れば破落戸にもあたっている、誤射を恐れていないだけであった。

「マジかよ、味方にあたる方が多いだろうが！」

「そりゃへたくそがやるからですよ、それに半々程度で十分ですしねえ」

実際徐々に破落戸の数と一緒にローグの余力も減っていつている、メビの位置を常に頭に入れながら破落戸へ対処しなければならぬからだ。そして、この状況では破落戸の一発でも受けるわけにはいかない、体格差であっさりと体制が崩れてしまう。

そんな状況でもローグは粘った、粘って粘って破落戸どもを全員気絶させるまでは粘って見せたのだ。

「よく頑張りますねえ、ここまで強いとは思ってなかったですよ？」

「るっせえ、俺の強さがわかったなら諦めてどっか行っちゃまえ」

「ほんと立派なもんです、転がってる破落戸なんかよりあんだの方がよっぽど生き残るべきなんでしょうねえ」

ほとんど独り言のように話しながらメビの手がローグに迫る。

そして、ローグにはもはやそれにあらがう体力と魔力は残っていないかった。

「旦那あ、攫ってくるのには成功したんで、面の確認だけしてもらっていいですか？」

メビが報告に来ての開口一番のセリフにソレティアの眉間に皺がよる。

「なに？ なぜさつきと処分していないのだ？」

「いやあ、処理させる予定だった下っ端が思いの外使えなくってですね。まさか、あんなガキにのされるとは……」

詳しく話させると誘拐の場に連れて行き、これからの濡れ仕事のために場数を踏ませようとしたのだが……結果はまさかの返り討ち。

こりやダメだと仕方なくメビが出張って完遂したのだが、ターゲツトの強さが想像もしていなかったほどで雇った破落戸どもが全滅。

どうしようもないので苦渋の選択として、こちらまで持ってきたわけである。

「それらの処分は？ それと確認しなければならんわけは？」

「処分の方はさつき指示を出しやして川流しで、確認して懸念のガキでなかった時は坊ちゃんの玩具にでも、と」

「すぐに処分しなかった理由は？」

「ここまでやられたんです、少しでも回収したいのが人情つてもんですよ。報告あげた奴もいないわけですし人違いだったら二度手間だ、もう一度を気楽にできるわけでも無し、面の確認程度ぐらい労いの意味でもお願いできませんかね？」

珍しく顔を歪めて心のうちから何かを滲ませるメビに何かを察するソレティア。

「手酷くやられたか、ガキ程度に」

「言わねえでくださいよ旦那、ちよいとばかり地獄を見てもらいたって個人的な願望つすよ」

卑屈に、そして暗い喜びを微かに滲ませながら笑う姿に目を細める。

考えてもみればこいつには色々命じてばかりで労うことなどほぼ無かった、ならばたまにはいいか。

「いいだろう。だが、私の想像通りのガキだったらすぐに処分するな」

「へい、それもちろん！」

気まぐれにメビのストレス解消に一役買う気になったソレティアは地下室へと向かう、もうすぐ自分の野望が果たされるのだその程度の余分な事ぐらい問題なからうと考えながら。

ソレティアが来た時暗い地下室の中には壁際に子供が一人座らされ、その監視のためだろうかガタイのいい覆面男が静かに佇んでいた。

そしてそのガキを一目見た瞬間、彼は自分の予想した人物に違いな事を確信した。

故にバカ丁寧に、その子供の前で仕える者としての態度で接したのだ。

「お久しぶりでございます、ルシエツト様。私の事を覚えていらっしゃいますか？」

「……へっ、忘れたくても忘れられねえよ。母様からよく言い聞かされてるからな、この都市が滅ぶとしたらアンタが原因だってよ」

ソレティアの猫撫で声に嫌悪感を露わにして答える子供、ルシエツトと呼ばれたローグは淀みなく憎まれ口を返した。

「ふうむ、彼女は意外と賢い女性だったのですなあ、まさかあの頃に私の野望に勘づいていたとは。いやはや、クピディアス様のお手つきとなる前に手を出して抱え込むべきでしたな」

「けっ！ テメエが母様を、だって？ 気色悪くて仕方ねえや、父親がテメエみてえなクズの王様だったかもなんてよお」

自分の行っている事に疑問や違和感を感じている者がいたとは思わなかったソレティアは惜しむように呟く。

彼にとつては賞賛の言葉だったのだが、ローグ改めルシエツトにはおぞましいとしか言えず、当然悪態をついた。

「ほう、ではクピディアス様の方が父親として喜ばしいと？ あなたは屋敷にいた間、大層肩身の狭い思いをしていたと記憶しておりますがねえ？ 私としても可哀想だなと思っていたのですよ、戯れに手を出されただけの女が、貧乏人の買われた女の股から生まれたガキ風情

が、と陰口を叩かれるあなたたちのことはねえ」

同情めいた事を口にするソレティアだが只々嘲笑っているだけなのは目と口調でわかる、確かにあの頃は周囲の大人たちに怯えてばかりの日々であった。

「ああ、そう言われりやそうだったっけな、言われるまで忘れてたわ」  
だがルシエットの心には一切響かなかった。

「特にここ最近忙しくってよ、物心ついたばかりの頃とか思い出す暇もなかったぜ。懐かしい事思い出させてくれてありがとうってとこだな」

そのあまりの余裕さに何かがおかしいとソレティアの勘が疼く、これは早めに処分するのが正解だろう。

飛ばれる姿を見たがっていたメビには悪いが生かしておく価値がない、いや生かしては不味いと処分するよう指示をだそうと振り返った。

「メビ、こいつを殺す担当を……」

「彼ならば少し離れているよ、呼んできてほしい人がいるのでね」

そこにいたのはここに一番いては不味い者。

「さすがに言い逃れや情状の余地はない、それは理解できるな？ クピディアス殿の懐刀殿？」

獄卒部隊の長であるメズ隊長その人であった。

「こういう事ってあるんですね。こんなの物語の中だけの話だとばかり思っていましたよ」

「物語という物は現実を元に書かれる物らしいぞサルーシヤ君、私みたいな者には懐かしさすら感じる飽きるほど見てきたパターンだよ」  
そして、今しがた天井から降りてきたのは工員と目されていた子供。

事ここに至ってようやくソレティアは悟る、自分のはめられたのだと。

## 思惑

> 隠れてなんだけどき、ローグをつけ狙ってるっぽい奴がいるんだよ

> 事態の始まりはツクヨのそんな一言から始まった。

「え、えっと？　なんでわざわざ目立つローグを狙ってたんだ、そいつ」  
「なんだかんだこの孤児グループのトップはローグだ、だから一人だけでいるって時は少ない。」

「というか、うっかり処理担当の一人が人攫いを魔法でぶっ飛ばしたせいで都市内で攫おうとする奴は劇的に減っている。……物理的にも、だが。」

「なぜって？　そこに犯罪者に容赦しない獄卒部隊の長がおるじやろ？　それのお膝元でやらかす奴はただの自殺志願者でしかないだろう。」

「うーん、理由とかは喋ってないよ。あのおっきな屋敷の中までは魔法の影響与えるの無理だから」>

「ツクヨ、お前、おっさん達が感知器持ってないってわかってから魔法使うのに遠慮無くしてない？」

「やだなあ、これを使ったのはずいぶんと前からだし、それに空気の振動を感知できるようにしてるだけだから魔力の痕跡もほぼないし、大丈夫だよ？」>

「あれつきりさっぱり勝ちがないと思ったらお前……！　そんなにマウント取られたのが悔しかったのか!？」

「数年前に始めたどちらが先に慣れるか勝負だが、最終的に4勝696敗になった時点で俺がギブアップ、以降勝負形式ではやらなくなったのだ。」

「うん、あの動きは二度と、二度とさせない……！」

「わざわざ音を出してまで……そんなに嫌だったのか、NDKの動き付きのアレ。」

「いや、魔法まで使って再現して見せた俺も大概だと思うが、こいつの煽り耐性思ったより低いな！」

というより感情に対し素直なのかもしれないが……今はそれは置いておこう。

「で、ローグを狙ってる奴がいるって話だよな？　どんな感じ、つまりどんな風に動いてるのが知りたいんだが」

「音だけだから詳しくはわからないよ？　部下っぽいのとかチンピラっぽいのに話してたけど誤解かもしれないし」

そういつてツクヨが受け取った音のイメージを流されたんだが、町の中の音が無差別に拾ってきてるせいで最初は何が何だかわからなかった。そりやそうである、空気の振動をとらえているだけなんだから人の話し声どころか猫の足音、ネズミのかじる音、果ては風が吹き抜ける音まで拾ってきてたんだから。

「ごめん、この中から拾うのは無理だわ。どんな話か概要だけ説明してくれるか？」

＜くんとね、こんな感じ＞

で、ツクヨが話してくれた奴を俺なりに翻訳したのが以下の会話だ。

『この場所でやるんすよね』

『そうそう、おぜん立てはしてやったから上手くやってちょうだいね。ターゲットの顔は覚えてるでしょ？』

『へい、あの妙に顔の整ったガキっすよね？　やっぱあれっすか玩具とかにする奴っすか？』

『お前ね、話聞いてなさいよ。少し殴ったりけったりで遊ぶのはいいけど必ず殺すの、あと長生きしたかったら余計な詮索しない』

『そうでした、すいやせん』

これだけだと特定できないかもしれないが、注意してた方の声が別の時に破落戸に暴れるよう頼んでたのも聞いているんだよな。

「つうか、騒ぎまで起こして大丈夫なのかこいつら？　昨日町を出てったばっかだけど戻ってきたら下手人は地獄を見るぞ？」

そこまでは考えられないのか？　それともそれを考慮に入れてもやらかなきゃならないのか？　……詳しく聞いとくべきだったかな、あいつの生い立ち。

「ローグに注意するよう言ってやらないと、今どこにいるんだローグの奴」

<今日は回収作業だね、朝早くに寝床から出てったよ>

「つて事はまだ最初の店に着く辺りか」

あの辺りから裏道に入るんだよな、そんなでもって大通りに戻るの  
しばらく後……。

「急いだが良さそうだ、ちよつと走ろう」

<魔法は？>

「んー、殺傷以外解禁で」

少しでもいそぐため魔法で飛ばしてもらおう、飛ぶのはツクヨの方が  
上手いんだよな、跳ぶならまだなんとか勝負になるんだけど。

そうやって飛んだ先で見たのは今にも殺されそうなローグ、咄嗟の  
選択で氷を選んだ事は褒められてもいいと思う。

「そいつはつまり燃やされたり刺されたりしなかったただけ感謝しろつ  
て事ですかい？」

「うん、うっかり殺されなかった事を感謝してくれ」

あの後、首謀者っぽいこのくたびれたおっさん以外の連中はお店の  
人にお願いで済ませた。

報酬はこの老けて見えるおっさんも含めた見ぐるみ全部、お店の人  
は喜んで引き受けてくれました。

犯罪奴隷とまではいかないかもしかだが普通の奴隷として売り飛ばさ  
れるぐらいは覚悟してほしい。

「あつしもそうしてくんないですかねえ……」

「悪いんだけど無理だね、なんでローグを狙ったのかを洗いざらい吐  
いてもらってからラテベア教の人に突き出すから」

「ここで死んどいたほうが楽そうすねえ、それは」

うーむ、このおっさん観念してはいるんだが有益な情報を何一つ話  
す気がないぞ。

ローグが戻ってきたのはそんな風にするかなあとちよつと  
困っていたところだった。

「すまねえなサルーシャ、お前のおかげで助かった。情けねえところ見せちまったな」

「あの人数とこのおっさん相手だったら仕方ないんじゃないか？ 下手するとメズさんから逃げきれぬぞこのくたびれたおっさんは」

「はっはっは、買い被りですよお坊ちゃん、あっしじや十数える前にのされて終わりですって。ところでこれからどうするんです？ 獄卒の方々が戻るまで捕まえておく気ですか？」

もう一度こちらに来るのは早くて二週間後、そこそこ長い時間だが捕まえておくこと事態は難しくはない。難しいのは、

「はつきりと言いますが、戻る前に死ぬと思いませんか？ こんな土に下半身埋められた状態じゃ」

「今の時期ならまだなんとか凍死は免れるだろう？」

「その前に餓死するでしょうねえ……ほら、死体処理なんて面倒でしょ？ 他の奴と同じように奴隷として売り飛ばしましょうよ、ね？」

死んでも情報を吐く気はないし、できれば生き延びたい、こいつの思惑としてはそんなところだろう。

自分の中の魔力量とメズさんのいるであろう位置を時間と距離から少し考えてみる。

「メズさんは昨日の昼にこの都市を離れたばっかで今は昼前、つまり急げば追いつけるな」

「おっさん達を呼び戻すのかよ、大事な定期報告だと言ってたろ？ 戻ってくるのか？」

「もともとおっさんたちの管轄だろ、この辺の話は。むしろ話しとかないと泣くor怒るまでである、『我々の力が足りないばかりに子供たちに負担を……』か『子供だけで危ないことをするんじゃない！』とかいいそうだろう」

それに、ローグの雰囲気がかんたんと深刻なものに変わっていつてるのも気になる、よくわからないがあのおっさんを長くここに置いておかない方が良さそうだ。

そうやってなにやら天を仰ぐおっさんと決意を固めたっぽいロー



グを置いてメズさんらを追って飛び立ち、そこそこ長旅になるためゆつくりとしたペースで馬を走らせてたおっさんとその部下の人に追いついて事情を話した。

「来てほしいって言ったのは俺なんで聞くのはどうかと思いますけど、定期報告とかするんじゃないやなかつたんです?」

俺は部下の人の馬に相乗りさせてもらいながら、大声でメズさんに声をかける。

「なに、その辺りの事も戻った時に纏めて報告すればいい。むしろこれを放って報告する方が叱責物だろう」

「いや、二人いるんだから別ればいいのでは?」

俺が極当たり前の事を言えば部下の人が笑って答える。

「サルーシャ君と聞いたかな? 君は賢いが我々の事をよく知らないようだ。そんな常識的な判断をしたりしたら昇進させられてしまうじゃないか、そんなもの少なくとも私はごめんだよ」

さてはこの組織好き勝手する人間しかいないな? 無茶苦茶な鍛錬を繰り返すにはそれぐらい強烈な我が要るのだろうか? <納得だね、その理屈>

(ツッコまん、ツッコまんぞ、その独り言!)

誰の我が強いつてんだよ! あ、答えなくていいです。

そんな感じで夜になる前に戻ってすごく驚かれた、恐縮しながら感謝と謝罪をローグからもらったが……一番苦労したのは馬だと思う。なので、たっぷりの水と飼い葉をくれてやってほしい。

「飼い葉か? どこにあるんだよそんなもん」

「そりゃ厩がある宿にしろ、この際だからケチらず金使おうぜ」

あの人達は俺らのために戻ってきてくれたわけだからな……多分。

「……ありがとうな、サルーシャ」

「? なんだよ突然?」

「いや、言いたかっただけだ。気にせず受けといてくれよ、俺からの感謝を、さ」

「変な事言う奴だなあ?」

そんな会話を交わしながら馬の世話を終えて、監禁場所まで戻って

きた。

「む、戻ってきたかね二人とも。ローグ君、君の要望通り尋問はせずに待っていたよ」

「すみませんお二人とも、私の事情でお二方に無理をさせました。お二人のご厚意に感謝と謝罪をさせていただきます」

口調をがらりと変え丁寧な言葉を下げたローグに面食らう獄卒部隊の二人、俺はというとやっぱりなと言うのが正直な感想だった。

「そのぐらいできるって思ってたって事?」

（そういう事。それに口調程度で人は変わらないだろ、変わるのとは他人からの印象だけだ）

人間社会だとそれこそが大切だから、口調に気をつけなきゃいけないだけだな。

「んじや言うべきことも言ったし、慣れねえ言葉使いは終わらせてもらうぜ。とりあえず詳しくは言いたくねえが、俺はこいつの面を見た事あんだよ」

「はい?」

ローグのセリフで埋められてるメビ（名前だけは聞き出した）の顔が思いっきり引き攣った。

「ほう、どこで、と聞いてもいいかね」

「おう、いつつてのは言わねえが、都市長の屋敷内で見えた覚えがあんだよ。それも数回は、な」

「複数回見た覚えがあるということは、屋敷に出入りできる立場であるという事。道すがら聞いた話からすると、汚れ仕事担当だと考えるのが一番自然ですな」

獄卒二人の目が光る。都市長もしくは近い者による犯罪の証拠だ、大捕物になる可能性が出てきたわけである。

「では、洗いざらい喋ってもらおうか、メビとやら。沈黙はおすすめしないぞ?」

「喋ってもらおうかって言われましてもねえ、偉いさんだったらそんな暗部ぐらいあるもんでしょ? なにが悪いのか言ってくださいよ、どこもやってることでしょうに」

間違つてはいない、どこの統治機構も多かれ少なかれ見せられない部分は存在する。

そしてラテベア教もそこまで踏み込むのは難しい事が多く、結果黙認という形をとらざるを得ない事も多い。

「だが、そんなものを蹴とばすのが我々だ。しゃべらないなら結構、直接貴様を連れて問いただすまでだ」

「久しぶりの討ち入りですね、腕が鳴りますなあ」

その地の法より弱き人々を守ることを優先する、それが獄卒部隊の誇りである。ゆえにこの反応は至極当然であった。

それに困るのはメビだ、この二人に暴れられたら屋敷の警備では鎧袖一触で吹き飛ばされる。

「えつと、なるべく穏便に済ませちゃくれませんか？ あつしの同僚もたくさんいるんですよ、あそこ」

「仲間思いでいいことだな。よし、ならば、頭からではなく足だけ埋めるとしよう」

何も言わなければ警備の人間は頭から地面に突っ込まれていたのだろうか？ いや、さすがに大げさに言ってるだけのはず……

(とは思えないんすよねえ、とにかくこの二人に好き勝手暴れられるのだけはまずい)

メビがどうすべきか悩んでいるうちに意外なところから助け舟が出された、被害者であったローグから待ったがかかったのだ。

「ちよいと待ってくれ、屋敷で働いてる奴は多分何にも知らない奴ばつかなんだ。そいつらに手を上げるのはどうなんだ？」

「む、それは確かによろしくはないことだが……」

この都市での獄卒部隊の活動は許可されているわけではない、無論許可があろうがなかろうが助けを求める人を助けることに躊躇いなどない者たちである。

だが、そのためであっても罪のない人に理不尽な目に合わせるのを避けたい事態である。

「それだったらこいつに協力させりゃいいんじゃないの？ 警備に邪魔されないように、この事態を引き起こした奴だけを引っ張り出せる

ように、さ」

「いやいや、なんであつしが……」

「この人たちがその気になったらお屋敷が更地になるのなんてあつという間だよ、あんたが協力してくれなきゃ最悪そうなるけど？」

脅迫である、まごうことなき脅迫である。

しかし、放っておけばそうなることは明白……につこりと優しく微笑む獄卒部隊の二名が怖すぎる。

「わ、わかりやしたよ、協力させていただきやす……」

悩みに悩んだのち、まだましな方を選択するメビであった。

そうしてメビはソレティアを残し、呼ぶよう言われたクピディアスのもとへと向かっていた……わけではない。

そこらにいたメイドにクピディアスへの伝言を頼んだのだ、

『先日都市より出て行ったはずのメズがなぜか地下室に現れ、現在ソレティア様に対応中。申し訳ないがソレティアが助けを求めております、至急お越しく下さい』

そして、メビ自身はある場所へと向かっていた。

そこはもつともこの屋敷で警備が厳しい場所であり、絶対に奴らに踏み込ませてはいけない場所でもあった。

メビはその警備担当に声をかけ、中にいるはずの人物にこう伝えてもらった。

『新しい玩具の件でお父様とソレティア様がお呼びです、地下室までご案内させていただきますので出てきていただけますか？』  
と。

## 死を厭え

「さて、では話していただくこうか。この地下室はなんのために在るのか、なぜこのように径の小さい枷があるのか、なぜ……血の匂いがここには染み着いているかをだ！」

出口への経路を完全に塞がれ追い詰められるソレティアの横を抜けローグ、いやルシエツトのところに駆けつける。

「よっ、名演技だったな。やっぱ美形がやるとなんだって絵になるな、特に最後の皮肉でのありがとう、いい笑顔だったぜ？」

「うっせ、……演技なんてしてねえよ」

「うん？　なんか言ったか？」

「なんにも言ってるねえよ！　で、これでもう大丈夫なんだろうな？」

妙に小さな声だったから聞き取れなくて聞き返したただけなんだが……聞かれたくないようだから別の話に乗ってやるか。

「おっさんこの都市長とその周りの首根っこ抑えられるかどうかにかかってけど、見た感じ大丈夫そうだ。明日つからは落ち着いて稼ぎ方を探せそうだぜ？」

「……お前は俺の生まれのこととか気になんねえのか？」

聞かれたくないのか聞かれたいのかはつきりしろ、というか推測が当たりまくりじゃねえか、これ以上なにを聞けつてんだ。

「大体わかったから言いたかったら聞くとこ、それともなんだ？」

高貴な生まれだから敬えとかか？　もしそうだったら笑い倒してやろう」

「んなこと言うかバカ！　……なんにも聞かずに、明日つからも一緒って言ってくれんだな」

そりや言うだろ、ローグ改めルシエツトがこのお屋敷で暮らしたいと言い出すならともかく。そうじゃないなら俺らが暮らせる場所なんてあの、廃材で組んだけど意外とがっしり作れた家ぐらいなんだし。

（自分には住める場所の目処がついたからさよなら、なんて言い出さない奴だよなあこいつは。……言われたらどうしよう、やべ、ちよっ

と不安になってきた)

＜人の事はわからないけど、それだけは違うって私の勘が全力で叫んでるんだけど＞

(おっ?・ お前もそう思う?・ なら大丈夫だよな、うん)

などと心の中で漫才をしていたら恰幅のいいおっさんが地下室に飛び込んできて、メズさんの方を指差して叫んだ。

「これはなんのつもりだ!・ 屋敷に勝手に張り込んだ挙句にわしの最も信頼する者を不当に拘束するとは……いつから獄卒部隊は押し入り強盗の類になったのか!!」

「強盗のように物は奪いませんよ、ただすべき事をするだけです」

しれっと答えるメズさん、だがその片手でソレティアとかいうおっさんを吊り下げながらだとすっごくシユール。

流星に話す姿勢ではないなと思ったのか、ゆっくりと降ろすがそれでも首を掴むその手は離さない。

実は片手でネックハンギングツリーやってたのだメズさんは。俺がルシエツトの方に行つたのはその近くに居たくないというのも少しだけあつたりする。

「さて、では質問に答えていただこう。今まで拐つて来た子供達は今どこにいる?」

その質問に明らかにたじろいで見せたのはクピディアスの方、ソレティアはというと首を握られているというのに笑って惚けてみせる。

「拐つた?・ なんのことやらさっぱりですね。ああ、もしやこのルシエツト様の一件をその一環と思われました?・ だとしたら外的外れですね、クピディアス様の血を引く者が何やらスラムで怪しげな集団を形成している、それに対する対抗措置ですよ」

「苦しい言い訳を……!・ その程度の言い逃れで誤魔化せると思うなよ、この径の小さな枷がなぜ使い込まれているか言ってみろ!」

「待てソレティア、なぜ死んだはずのあの子の名が出てくる!?・ わしは報告を聞いておらんぞ!」

なかなか混沌としているな、でもまあソレティアとかいうののあれはただの悪あがきにしかならないだろう。

ここまで詰められたんだ後はもう時間の問題、メズさんが万事納めてくれることだろう。

「で、父親がこちらにいるんだが会わなくていいのか？」

「今更親子だつて言われても困るんだよ、俺はもう独り立ちしてんだ、どうこう言われたくねえから黙って俺を隠れさせとけ」

「別に構わないけど、どっかで話しとくのも悪くないんじゃないかねえ」

そんな風にメズさんとクピディアスに詰め寄られるソレティアを眺めながら俺らは暢気に構えていた、だからだろうか、その後の流れへの対応が遅れたのは。

なぜかクピディアスとともに戻ってこなかった（逃げたものと思っていた、今でなくとも捕縛は容易だと判断したためどちらでもよかつたからだ）メビが十歳ぐらいの男の子を伴って現れたのだ。

「おーい、獄卒さんよい、その地下室で行われたことはこの子の仕業。なんで、この子だけで勘弁してくれませんかね」

「なにっ!？」

「貴様っ、何のつもりで……!」

「いやあ、子供のやったことですよ？ この人たちなら殺したりはしないでくれるでしょ、素直にはきやちつとはご容赦してくれるでしょうし」

メビの言ってることは大部分が本音だ、ただ一番重要なソレティアへの嫌がらせという点を隠していただけ。ソレティアがチージオに何かをやらせるつもりだったのは察していた、そのためここでメズに引き渡せばその妨害になると考えたのだ。

確かにメズに引き渡すことに成功していればこれ以上ない妨害になっただろう、目の前でそれを行えばより強力な嫌がらせとなったに違いない。

「チージオ様」

周りの大人たちの剣呑な雰囲気には怯え戸惑うチージオにいち早く、そしてとてもやさしい声をかけたのはソレティアだった。

この少年にとって一番身近で一番やさしくしてくれたのはこのソ

レティアだ、だからこの時もその声に反応しパツと顔を輝かせて次の言葉を彼は待ったのだ。

事実、ソレティアから出たのは彼にとってとてもうれしい言葉だった。

「その男が次の玩具です、一回で壊せたら次の玩具はいくらでもご用意しましょう」

事情を知らぬ部外者にとっては意味の分からぬ言葉であり、事情を知るものにとつては意想外過ぎて反応が遅れるような言葉であった。

ゆえに、動いたのはただ一人。

「や、や、った！ たく、さ、んだよ！ あ、あそ、び、きれないぐ、らい、ちよう、だ、いね！」

興奮のあまり言葉が判別できないぐらいどもりを激しくさせながらも、その凶刃は的確にメビの頸動脈を貫いていた。

「へ？」

やたら間の抜けた声を最後に崩れ落ちるメビ、その首からは赤い噴水が勢いよく吹き出し低い地下室の天井まで赤く染める。

きつと自分が刺されたことすら理解できなかっただろう、痛みを感じるものがなかったのが唯一の救いだろうか。

ソレティアが何をしたかったのか、それをすぐに理解できた者はだれもいなかった。

しかし、魔力を感知できる四名にはそれが見えた。

「あ、あああ、あああああああああああああああああ！！！！」

メビの遺体から抜け出てくる魔力、生き物が死ぬと中に宿っていたそれが近くの生物の中に入り込む様が。

そして、入りきることができないにもかかわらずそれでも入り込むうとするそれらが、少年の体を作り変えていくその瞬間を。

「ぬおおおおお！！」

雄たけびを上げながらメズが走る、今命を絶てばもしかすれば止められるかもしれないという儂い望みにかけて。

「チージオオオオ！！」

クピディアスが走る、可愛い息子が変わり果てる姿に耐え切れずた



だ抱きしめるために。

「ふふふ、ははは、はあーはっはっはっはっは！」

ソレティアが笑う、自分の野望、一国の王になるという望みは果たせずともそれを阻んだ奴らに地獄を見せられることを確信して。

「ローグー！ 伏せろおお!!」

サルーシャが氷の壁を作り出す、瞬間的にできる最大限の魔力を練りこみ、決して破れぬように全力を以て固く厚く作り上げる。

「Ku、KYAAAAAAAAA!!」

それらすべてがチーゾオだったものが片手を振った瞬間、塵芥の如く吹き飛ばされた。

<サルーシャ！>

意識を飛ばしていたのはどのぐらいか、ツクヨがいてすぐに戻してくれただろうからあっても一、二秒といったところだろう。それでもツクヨに起こされ周囲を見回した時、どれだけ眠っていたのかと考えるとしまうぐらいに当たりの光景は一変していた。

薄暗くはあったが確かにあった光源はなく身動きの一つも取れない、そして少し遠くから響く地面の揺れと悲鳴と怒号。

「って、ローグー！ ローグは無事か!？」

「俺なら、ここだよ」

自分の下から聞こえる声に、慌てて体を多少動かしてその下を見る。

「見ての通りお前のおかげで傷一つねえよ、ありがとな」

「なら、よかった。他の奴は……」

ローグの無事を確認して改めて周囲を見回すと、自分たちは完全に生き埋めになっっているようだった。

「……なあ、あれはいったい何なんだよ……」

「多分だけど、魔力を体内に集めすぎて起きるっていうプルシディンズ・ヴィータってやつだと思う」

<間違いないと思うよ、あの魔力の動きを見たでしょ？ あんな風な体を作り変えていくんだね……>

ゾツとするような動きだった、何百もの腕のようなものに集られ潜

り込まれ内側から膨張していく。

その光景はなぜか地の底に引きずり落されていくかのよう見えた。「とにかくここから出ないと、生き埋めのまま死ぬのはさすがに勘弁だからな」

<それなんだけどさ、もうしばらくここにいない?>

生き埋め状態で待てと? それがどれだけ苦しいか分かっていつてるんだらうか? ……それでも待った方がいいってことなんだろうな。

「察するに地上は阿鼻叫喚の地獄絵図か」

<うん、さっきの新生物が暴れまわっているうちは危ないからここで待つべきだと思う>

「新生物?」

「精霊たちはプルシテインス・ヴィータを新生、それで生まれた生き物を新生物と呼んでんのか。お前でも厳しいか、ツクヨ」

<……魔法勝負では勝てると思うけど、サルーシャの肉体を守り切れるか自信ない>

なるほど、それなら答えは一択だな。

<隠れながら空気の循環もできるし、もう少しだけなら空間も広げられるからちよつとの間だけ我慢して……>

「ローグ、地上に出たらお前は生き残りの人たちと協力してけが人の手当てや避難を頼む。みんなが逃げる時間ぐらいは稼いで見せるからさ」

<サルーシャ!?!>

「お前、なんで…?!」

なんで、か、ここで過ごした時間って村の次に長いからとか、ローグの親父さんが、いやルシエットの親父さんて言った方がいいか、それが必死になって築き上げた都市だからとか理由はいろいろあるけれど、

「力があって勝算もある相手、だけどそう言えるのは自分だけ……そんな状況でなあ、わが身可愛さで逃げ出すような奴を、俺は、『人間』とは呼びたくないんだよ」

俺はそうありたいし、ツクヨにもそうあってほしい、それが人間社会に生きることにつながると信じるからだ。

「かっこつけやがってよ……ばーか、死ぬんじゃねえぞ」

「私だけだと叩かれたら終わりだから仕方ないけど、仕方ないんだけど！　ほんとは逃げたいんだからね!!　そこのところ分かってよね？」

「怪我したいわけじゃないし、ぶっ殺さなきゃいけない相手ってわけでもない。基本的にひきつけながら逃げてやりやいいだけ、そんな難しことじゃないってもんさ」

そういつて真つ暗の中ニカツと笑って見せる、見えないながらも雰囲気伝わったらしくローグも苦笑したようだ。

「無事生きて帰って来いよ、待ってるから、な」

「任せとけよ、俺とツクヨのコンビは世界最強だぜ？」

そうかっこつけて見せた後頭上の土砂を吹き飛ばし、地上へとローグを抱えて飛び出す。

「んじゃ、他の人のことは頼んだ」

「ん、任せられた。勝って来いよ？」

「勝利条件は生きて帰る事だからな、楽勝ってもんさ」

そつと降ろした後、日常のような軽いやり取りでローグと別れる。

そうして向かった先でサルーシャは知るので、なぜこの世界の人類に殺害への忌避感が強く植え付けられているか、なぜ昔の人たちはそう子孫に教え込んできたのかをである。

## 死と隣り合わせ

地上に出て真っ先に思ったのは、ここは本当に住み慣れたローウェス・テラートウスかということだ。

雑然としてはいたがちらほらと豪華な屋敷が遠くに見え、あばら家同然の店とはいえ活気に満ちた人だかりが多かったあの都市と本当に同じものなのだろうか。

崩れそうで崩れない危ういバランスの建物は今や完全に崩れただけの瓦礫と化し、喧嘩の音やそれを囃し立てる声聞こえず、代わりに聞こえるのは助けを求める悲鳴と痛みに喚き散らす怒号、そして奴が起こす殺戮の犠牲者の断末魔。

都市壁の外側で暮らしていた身なのでそこまで親しみを持っていない。つもりではなかったのだが、存外この都市を気に入っていたらしい。

ローグ、本当の名前はルシエツトというらしいからそっちで呼ぶべきだろうか？ あいつの弟だといっても全く勘弁する気にはならなかった。

＜落ち着いてサルーシャ、肉の性能ではあっちが圧倒的に上なんだから一発ももらわないように冷静でいて＞

（？ あれって魔法で強化してるんじゃないのか？）

＜うん、素の体をそこまでの力が出せるように変えてるんだよ＞

しかし見た目の大きさは大男程度、せいぜいが2 m超えのボディビルダーみたいな体だったんだが……。

そりゃ俺と比べれば圧倒的なパワーを出せるだろうが、地下室から腕の一振りだけで屋敷を倒壊させられるのかといったら無理だろう。

（なのに奴は身体能力だけでやってのけたってか？）

＜多分そういう体を作ったんだと思うよ、新生は、プルシディンス・ヴィータはそういうものだから＞

（無茶苦茶だな、なんでもありかよ）

そう考えれば身体能力だけで済んだのはむしろ喜ぶべきことなのかもしれない、最悪は『絶対無敵！』どんな攻撃も通らないし、どん

な防御も無視できる!』みたいになられたらどうしようもなくなる。(ん?) でも、プルシデインス・ヴィータって起きたことはあるんだよね? なら、なんでそういうやつらは今はいないんだ? )  
くみんな死んでるから、なぜか知らないけど寿命が短いらしいの(そういや、読んだ話の中でなんかあったな。もう少し生きられてたらこつちが死んでたみたいの話)

まあ、そういう考察は時間のある時にでもやるか、なんて考えていると、

「うおつとー!」

部下の人が飛ばされてきたので慌てて避ける、かなり驚いたがとりあえずほつとくと死にそうなのでまずは止血をしよう。

止血用の布は悪いと思ったがそこらの死んだばかりの人の服からちようだいする、仇はとるので死体漁り亜種は目をつぶっていたきたい。

「きみ、は、サルーシヤ君だったな、私の事はいいから今すぐに逃げなさい、あれは無差別に人を襲ってくるぞ」

「いいから黙って、血を止めないと貴方死にますよ!」

「あれを相手にするんだ、命の一つや二つ投げ捨てなければ止められないさ」

「血止めしなきゃ止め切る前に死ぬでしょうが! 時間かからないからおとなしくしてろ!」

言いたいことはわかるがそれとこれとは別だろうに、相手の意思を無視してさつさと傷口を縛り上げていく。つて、この左腕おれてるじゃねーか、添え木添え木い!

「頼むから聞きわけてくれ! あれは今人ばかりを狙って殺して回っている! すぐにここにも来るぞ!」

「わかってますよそんなの」

あの野郎近くの人間殺しつくしてからこつちに向かってやがる。なぜそれがわかるかって? もう断末魔の悲鳴が聞こえないからだよ!

「KYUAAAAA!!」

「はい、いらっしやい。そしていつてらっしやい、空中遊泳と紐無しバ  
ンジーを楽しんでこい！」

こつちの姿を確認してすぐに喜色の混じった声を上げながら文字  
通り跳んできた奴を、そのまま風で高く打ち上げてやる。

どうやら近い人間から殺そうとしているから真上に打ち上げて  
やった、こうすれば俺が一番近くなのは変わらないからな。

「き、君、こんな事が出来たのかね？」

「できますよ、魔力量が多いのは気づいていたんでしょ？ 他の奴に  
魔法を教えたのだから知ってたでしょうに、戦えないとも思っ  
てました？」

「い、いや、戦えるとは思っていたが、ここまでとは……」

ちよつと呆然としながら答える部下の人にさっさと応急手当を済  
ましてしまう、時間があるわけじゃないからな。

「わかってくれたら周囲でまだ生き残ってる人を避難させてくださ  
い、これ以上の犠牲者が出るのはいろんな意味でよろしくない」

「今ので死んでは……くれそうにない、か。わかった、この傷では君の  
足手まといにしかねないようだ、済まないが無辜の民衆を守るのに  
力を貸してくれ」

「ええ、そのためにも周囲の避難を早めに。それが終われば俺も逃げ  
られますから」

そろって上を見上げながらそんな言葉を交わしあう、見たわけでは  
ないがお互いの表情はいま完全に同じだろう。

受け身など取れないように、空中で体制が整えられないようにと、  
ただ打ち上げるのではなく空中で体が回転するように吹き飛ばして  
やったんだが……二人が見ていたものが誰もみ状態で勢いよく地面  
にたたきつけられ、その衝撃で地面に大きな穴が開く。

「これで多少でもダメージを受けてくれてたら嬉しいんだけどな  
……」

「期待はしないほうがいいぞサルーシャ君。私も何度も切りつけたん  
だが、このざまや」

そういつて持ち主より遠くへ飛ばされた剣……だった物を指さす

部下の人、あれはもはや柄っというと思う。

「体の頑丈さは折り紙付きかー、内部が柔ければ衝撃でどうにかなってるんだけどなー」

淡い期待を込めて穴をのぞき込む、もちろんそんな期待に応えてくれるわけもなく、のぞき込んだ先には元気に怒りの雄たけびを上げる姿が！ あ、地団駄踏んでる。

「一つ幸いなことがわかりましたね。あいつの精神は子供そのものだ、囷として弱そうなやつががちよっかいかけて続けてやれば釣れると期待できます」

「あらゆる意味で君に任せるのが最適か……頼むから生きて無事に戻ってきてくれよ？ でないと私も隊長も、腹を切るどころか罪人として首を撥ねられかねないからな」

切腹の風習あんのかよ、さてはアークって日本人だったな？

「もちろんですよ。死ぬ気はないし、死なせる気もありませんって。それより、早くここから離れてあなたのやるべきことを」

「ああわかった、武運を祈る」

地団駄をやめて憎々しげにこちらをにらみつける新生物から目をそらさずに避難を促せば、素直に離れる部下の人。

生き残れるかもしれないぐらい実力があると理解してくれたのだろう、激励に片手をあげて感謝を返す。

さて、ここからが本番である。この後の俺の人生においても滅多にない、婆とやった時以来の命懸けでの格上との戦いが始まるうとしていた。

「へいへーい、当たってないよー当たってないよー、当てるきあるのー？ そんなんじやいつまでたっても当たりやあしないよー？」

「KIIIIIIII!!」

風を切り裂いて俺の頭めがけて剛腕が振りぬかれるが、俺は柳に風とゆるりと体を柔らかく曲げてその下を潜り抜け、腕の後を追うように荒れ狂う風に逆らわぬように跳んで見せる。

「はーい、追撃はお控えただいておりまーす」

「GUGEE!？」

跳んでる最中に追撃の気配があつたのでツクヨが電撃を浴びせかけその動きを封じ、その間に俺は無事に瓦礫の上に着地をして見せた。

「ぎーんねん、またまた外しちゃいましたね？　今ので何回目だったかな？　いい加減俺には当てられないって理解していいんじゃない？」

「GUGAAAAA!!!」

今度は上から叩き潰そうと高く跳びあがってきたので、

「はーい、またいつてらっしやい」

そのまま高く打ち上げさせてもらう。

……すこしだけ時間が空いてくれたな。

(ツクヨ、魔力はどうだ?)

<私はまだいくらか余裕があるよ、サルーシャは?>

(もうすでに余裕がないから全力で増やす体制に移ってるよ、体力の方は……持たせる)

少しでも空気を取り込んでそこから魔力を吸収するため、大きく深呼吸を繰り返しながらツクヨと現状を確認しあう。

<あつちの様子は体の方に変化は見えないけど魔力自体は減ってる、と思うよ?>

(そっか、そりやよかった、まだ十分程度とはいえあれだけ激しく動いてんだ、ちつとは消耗してくれねえとキツツイ)

さんざん挑発を繰り返してるからひたすら大振りで動きがわかりやすいのはいいんだが……いかんせん俺自身が訓練とか受けたことのない身だ、それなのに一撃即死をよけ続けるのは無茶が過ぎる。

だから魔法に頼っているんだが、自分の体が勝手に動くようにしたのは失敗だったかもしれない、動かされるたびに大きく体力を消耗する。

「でも、そうしなきゃ死んでたよな、これ。さて、避難が済むのが先か、俺が耐え切れなくなるのが先か」

「そんなの答えは決まってるよ」



大きく飛ばされた奴が落ちてまたも大穴を作り出す、今回はコマのようにではなく鉄棒で体操の選手が下りるときのように回してやったからか頭から落ちていった。

「MUKYAAAAA!!!」

そしてそんなもの知らないとばかりに元気に飛び出してくる新生物、ただ先ほどの反省からか地面をぶち抜いてだが。

「こいつが耐え切れなくなるのが先に、ね」

「ま、その結論は当然だな。この程度の知恵しかないんだから」

しかし、俺に向けてまっすぐ地面を掘りながらなもんだから、五月蠅いうえに遅くってその上見えてないから軌道修正も効かないと、よけてくださいと言ってるようなもんなので飛び出してきたときには俺はすでに安全圏まで移動完了していた。

「GUMUUUU!」

「唸ってないでかかって来いよ、お前程度の頭じゃ悩んだって無駄なんだからよ」

愚直に近づいて殴るを繰り返されれば身体能力の差から俺はあっさりと地面のしみになるしかないだろう、だから無駄に考えて余計な労力を使い続けてもらうために馬鹿にするような挑発を繰り返す。

綱渡りのような動きの連続だがこれが一番救える人間が多いんだから仕方ない。

〈これ続けてるの大分つらいんだけど？ 最大威力で吹き飛ばすじゃだめかなあ〉

（弱音は似合わないぞ？ 大体、それが当たるかわからない、倒しきれるかかわからないって言ったのお前だろ？）

〈そうだけど、じりじりと余力が減っていく事がこんなに辛いなんて思わなかったんだよ〉

（自分がつらい時は相手もつらいらしいぞ？ 弱気しているとあちらさんを調子づかせかねないからな、大丈夫だと言い聞かせて我慢するのがいいぞ）

〈精神論じゃん……〉

（虚仮の一念岩をも通す。精神論ですべてができるわけじゃないが、

出来ることが増えるの事実つてもんさ)

いつまで持たせれば避難が終わるかわからない、どれだけダメージを負わせれば倒れるのかもわからない、そんな先の見えない、終わりがあるかすらわからない戦いだが諦めればそこで死ぬだけだ。

だから、俺はできるだけ不敵に見えるように笑ったのだった。

## 起死回生

「おっさん！ 起きてくれメズのおっさん！ まだ生きてんだろが、とつと目を覚ませよ！」

メズが気づいたのはルシエツトが必死になって掘り出してから何度も何度も声をかけてようやくやくであった。

「くうっ、ローグ君、か、ここは……うっ！」

目を覚ましたのはいいが体のあちこちから激痛が走る、そしてその激痛が気を失う前の状況を思い出させた。

「奴は！ 堕ちた者はどうなっている!?!」

「落ち着けおっさん！ 先に自分の状態をどうにかしろ！ まだ半分以上埋まってるぞ！」

言われて気づいたが動かせるのは片手のみ、残る部分は土に埋もれて身動きができない状態であった。

このままではなにもできないので、まずは土から這い出る。

「危ないから少し離れていなさい」

「ああ、わかった」

ローグに一言かけある程度の距離をとってもらい、土を軽く動かして身を引き抜く隙間をつくる、吹き飛ばした方が早くはあるが今は少しでも魔力を温存したい。

幸いにも魔力は殆ど消耗していない、使った魔法が盾の魔法ぐらいなので当然だが。

「おっさんは怪我は……ないみたいだな」

「うむ、咄嗟に盾を作れたおかげでせいぜい全身の打撲程度ですんだようだ、これなら戦うことは可能だろう。サルーシャ君は他の人達を助けに行っているのかね？」

「そうだ、だけどおっさんの考えてるのはちつと違うんだ」

ローグの言っている事が今一理解できず詳しく聞こうとした直前、何かが叩きつけられる音が響きその衝撃が地震という形でここまで伝わってきた。

「今のは!?!」

「多分あいつが戦ってるんだと思う、みんなを助けるために」

驚愕に目を見開く、プルシディンス・ヴィータを起こした生き物が、墮ちた者がどれだけ恐ろしい存在かメズは思いしっている。

あれらへの対処は少数の者が攪乱と誘導で人里から遠くに連れていくか、多数の、この世界では考えられないぐらいの大人数でかわるがわる遠距離から魔法や矢を打ち込み、近づいてきた時は決死の足止めを数名で行いその間に本隊は距離をとりまた遠距離攻撃をする、という事を相手が死ぬまで繰り返すというものなのだ。

後者の戦法だがわかる人にはわかるだろう、そう、島津の捨て奸である。

この戦法はアーク登場以前よりの戦法で、最も古い戦法とも呼ばれており対竜戦術の基本である、と同時に人同士の戦においては最低最悪の最終手段と認識されている。

アーク以前ではなぜプルシディンス・ヴィータが起きるか理解されておらず、戦乱の度、飢饉の旅に起きる現象であったという。アークの最大の功績の一つとしてプルシディンス・ヴィータのメカニズムを解き明かし、それへの対処方法として徹底した死への忌避感を教育した事があがるほどなのだ。

事実、アーク登場以後この世界の人類の生息範囲は大きく広がった。対処方法を確立しただけでこれである、この世界の人類史においてどれほど墮ちた者が脅威だったかわかろうというものだ。

それらを知っているメズが焦るのも当然であった。

「いかん、すぐに助けに行かねば……！」

「待ってくれおっさん、それよりみんなの避難誘導を頼みたいんだよ！」

「しかし奴を止めねばすぐに追いつかれる！ 一人でできる事ではないぞー！」

「大丈夫だ！ あいつなら、サルーシャならやりきってくれる！」

そんなことは不可能だ、そう口にしようとして思い止まる。

ローグの目が今にも泣きそうなことに気づいたからだ。

考えてみればこの子が一番泣きたいはずだ、最も仲の良い友は死地

におり十年近く会っていないなかつたとはいえ父親は生死不明、おそらくは死んでいるのだから。

「ローグ君、クピディアス殿は……」

「腕だけなら見つかつたよ、時間ねえから放置してるけどよ」

「……すまん」

「いい。それより早く避難誘導を、早く終わればそれだけサルーシヤも楽になるはずだ」

メズには頷くしかなかった、同時に自身の無力無能を呪う。

（アーク様、貴方様は『死した私に祈るな、生きる同胞と己自身に祈れ』と教えてくださいましたが、それに逆らうことをお許しく下さい。どうか、サルーシヤ君に貴方様の加護を。あの子はこれからの人の世に欠かせぬ者なのです、どうか冥府に入れぬよう、この世に留まれるようにご助力を……！）

血を吐くような思いで心中のみで祈り、人々の避難誘導のため走り出すローグを追って走る。

最も不安定な子供を一人にさせぬための苦渋の決断であった。

鋭さが格段に増した拳を紙一重で避ける。

伴う風は今はない、空気を押しでは威力が削られるとでも思ったのだろう。

おそらく拳の速さは音速を超えているだろう、さつきまでは風ではなくソニックウェーブが巻き起こっていたからだ。

なぜ俺が無事かつて？ そんなもの、ツクヨが防御障壁を俺の体周りに張ってくれてるからに決まってる。

そして、それはろくに反撃できなくなっている事を意味していて、  
「HYAAAAA!!」

反撃できないという事は奴を調子に乗せることにつながっていた。

調子に乗るから余裕が生まれ、余裕があるからもつと楽しくするにはどうすればいいのか考えられて、考えるから更に攻撃は鋭くなり、そうすれば俺から余裕が失われますます調子に乗る……俺らにとつての悪循環が生まれていた。

この循環を止めるために何かしたいが、いかんせん全く余裕がない。

一撃もらえば終わりっていうのは最初っからだ、鋭さが本当に段違いなのだ。今の鋭さをカミソリに例えるなら最初のなんてピーチボールだ、別物すぎて笑いがもれるレベルである。

(学習能力が、学習能力が高すぎる！)

<魔力供給の要なんだから呼吸だけは止めないでね！>

少し前から喋る余裕は一切なく、ともすれば思考すら放棄気味である。

思考すればそちらに気をとられ魔力吸収の効率が下がり、しかし思考をしなければ打開策は永遠に得られない。

(ジリ貧だなあ、これ！)

<最悪の最悪、周囲の被害無視で吹き飛ばすよ！>

(それで倒せる保証もないんだろ！ 必ず逆転手を思いつくから障壁破られんなよ！)

俺自身の魔力はかなり枯渇状態に近いたため体を動かす魔法もツクヨにやってもらっている、つまりツクヨの負担は倍増しており、

<私の方も余裕なんてどっこにもないんだけど!?!>

(俺もお前も辛いんだ！ あっちの魔力だっけかなり少なくなってるはずだろ!?! ここまできたら我慢比べだ、根性ある方が勝つぞ！)

<それさっきも聞いたあ！>

(いう事が一貫してていいだろ!?! 魔力が回復次第体の方は代わるよ！)

必然的に俺たちの敗死は時間の問題であった。

そうならないようにするにはどうすればいいのか？ 致死の一撃を回避させてもらいなから考える。

(こいつの特徴として、ダメージを与えてもそれが全く見えてこないってのがあるんだよな。効いていないわけではないはずなんだ、氷は刺さるし火で燃える、風で切れたし雷で怯んだし、土塊をぶつけりや苦しんだ……)

ただし、それら全てのパターンで一秒もすれば元気いっぱい襲い

かかってくるってだけで。

(生き物って名乗るなら傷を負ったら血ぐらい流せってんだ！)

<あー！ 精霊の事バカにしてるの!? 肉の体を持ってないだけで私達だって生きてるんだからね！>

(精霊をバカにする意図なんてかけらもねえよ！ 変なところで突つかかってくるな！)

そりや体全体が魔力でできてりや血を流すこともないだろうけどよ……？ まさかとは思いつつツクヨに確認する。

(ツクヨ、あいつの魔力量が減ったタイミングっていつだ?)

<え？ それは……あれ？ これって、もしかして……?>

(その反応って事は、まさかと思っただもんがドンピシャか、これ)

それなら傷がついても血が出ない、すぐに治るのも納得だ。

想像を確信に変えるため、音速を超えた拳を紙一重で避け比較的柔らかそうな腹部へと渾身の風の刃を叩きつける。

やはり血は一滴も出ず、切った箇所もあっさりと塞がっていくが、

<今明らかに魔力量が減ったよ！ 予想は大当たり、こいつ間違いないよ！>

奴の保有する魔力が確かに減ったのだ！ これが示すのはある一つの事。

それは、

<サルーシャの想像した通り、こいつの体は魔力で編み上げられてる！>

肉の体を持ちながら、魔力で体を作り上げているという事だ。

<それって肉の体の周りに魔力を纏っているって事?>

(それだったら刺した時の反応が、もうちよい痛そうになるだろ。おそらくだが、肉の要素と魔力をグツチャグチャに混ぜ合わせた物を肉体にしてるんだろうさ)

つまり、粘菌が人型をとっているのに近いわけだ。

刺しても切っても血が出ないはずである、そもそも流れていないのだから。

そして、それならば打開策が思いつく！

(昔使ってたこれが役に立つなんてなあ！)

魔力を閉じ込める結界を紐状にして奴の体に引っ掛ける、網状にしないのは掴みやすいとあっさり引きちぎられるからだ。

「GYUHI?」

突如体に纏わりついた細い物の感触に奴が戸惑う合間に、それらを引っ掴んで起死回生の材料がある場所へと飛んでいく。

避難が大分進んだようなのだがそれでもその場所と避難場所では避難場所のが近く、今まで迂闊に移動できなかったのだ。

「だけど、これなら確実にテメエを引っ張れる！」

「GYA、GYAAAAA!!」

一本や二本程度引きちぎられたところですからすぐに新しい紐をかけるだけ、全部をいっぺんに掴むには工夫が必要で、工夫なんてものは経験の足りないこいつには一番の苦手分野。

時間をかければ学者能力の高いこいつならやっつのけるかもしれないが、それができるほどの時間がかかる距離でもない！

「おつらあああ!!」

「GIIIIII!」

到着したならすぐに幾つも掘られている穴のうち、空であり一番深いところへ奴を叩き込む。

時間稼ぎだ、叩き込む動作の途中から目当ての物、でっかい一発をくれてやるための材料を集めていく。

「GAAAAA!!!」

妨害は一切しなかったのですぐさま奴が穴から飛び出してくるが、その跳び上がる時間があれば俺らの目的は果たされる！

＜私達が、ここ数年で、どれだけこの作業をしてきたと思ってるの、つてね！＞

「一秒もあれば、十分テメエを吹っ飛ばすぐらいの量は集められるんだよ！」

俺らの目当て、それは前世において重要な燃料の一つとして数えられ、主に都市ガスとして用いられていたそれ、液化させたそれをロケット燃料として使えるようにする研究も行われていたほどに燃料



として優秀な物。

「特にここのはテメエが殺した人々の営みによつて生まれた奴だ、テメエにトドメを刺すにやあお詛え向きつてもんだらうよ……」

「GYUAAAA!!」

穴から飛び出した奴は真つ直ぐ俺へと向かつてくるが、もう遅い。

「常温、常圧下では無色無臭の気体状、沸点—161・6℃、融点—1

82・5℃、天体にはこれで構成された物もある、汝その名は……」

俺と奴の間に充満するそれに俺は躊躇なく火をつけた。

「メタンなり！」

大爆発、それはこの時都市にいた者だけでなく、この都市に向かっている者、離れていく者達にすら見えたという。

## 別れと旅立ち

ローグことルシエツトが内心の不安を押し殺しながら動き回り、生き残りの人々を無事避難場所まで集めきる事ができたのは褒められて然るべき行いであろう。

無論、共に避難誘導を行つたラテベア教の二人の功績が大きいのはいうまでもないが、それでも僅か十二歳の子供が果たした役割は大きかつたと言える。

それは街の構造を大体において把握しており、尚且つ広く顔が知られていた点が功を奏したのだろう、誘導に従ってくれる人は意外なほど多かつた。

そうして避難誘導を上手く成功させ、さあこれからどこへ逃げようかと考えている最中にそれは起こつた。

最初に感じたのは目を潰しかねないほどの光と鼓膜が破れるかと思うほどの音、それからほんの僅かばかり遅れて大きな揺れが皆を襲つた。

「今のは!？」

「わからん、迂闊に動くな！　だが何かあればいつでも動けるようにしておけ！」

「あつちつて……!!　くそっ！」

「あつ！　待ちなさいローグ君！」

そちらに何があるか知つていたルシエツトがたまらず走り出し、それに動揺したのはラテベア教の二人だ。

なにせ少しでも奴相手に足止めが期待できるのは自分達のみ、襲われた場合は自分達のどちらかを捨て駒に、ルシエツトは残つた方のサポートをしてもらう予定だったのだ。

「隊長、どうしますか？」

言外に見捨てられるのか？　という意味を込めて部下が訊ねる。

「私が連れ戻す。どちらにせよ何が起きたのか把握はしておきたかつたのだ、こちらは任せるぞ」

(可能性は低いが奴がこちらにくる事も考えられる、その時は悪いが

捨て駒を頼む)

(了解です、あの子を無事連れ戻して下さいよ?)

(もちろんだ)

目線と指のサインで周りの人たちに聞かせたくない部分の意思疎通をすませ、メズはルシエットを追って走り出す。

そして走っているうちに気づいた、こちらはあの子らが住んでいたスラムの方であることに。

こちらは屋敷から遠かったおかげだろう、比較的崩れてしまった家は少ないように見受けられた。

まあ、そもそもの強度が心許無いものが多かったため崩れていない方が少ないが。

そんな見覚えのあるはずの場所が明確に変わったとわかるほどの被害に歯噛みしながら、メズはその間を走り抜ける。

走って走って、スラムを抜けるほどに走ってもルシエットは見つからず、もしやすれ違ってしまったか？ そう考え出す寸前にそれは見えてきた。

「……なんだ、これは……!?!」

メズの前に現れたのは大きな、とても大きなクレーター、その縁を回るだけでかなりの時間がかかりそうなほどの大きさのクレーターの出現にメズは思わず足を止めてしまった。

しかし、立ち止まったおかげでクレーターの中を見ることに繋がり、その中で呆然と座り込むルシエットを見つけられたのは喜ぶべきことであろう。

突然走り出すような事はどうやら無さそうと見てとったメズは、周囲から音も何かがいる気配もない事からこれ以上逸れたりさせない事を優先した。

「ローグ君、大丈夫かね?」

刺激しないようなるべくゆっくり近づき、優しく声をかけたがルシエットは反応せず力無く俯くまま。

仕方なしにメズは周囲を見回し、そこでようやく気づいた。

「むう、焦げ臭い匂いが強いが、他にも何か鼻をつくような匂いがあるような……？」　ローグ君はここに何があったかわかるかい？」

そういえば、スラムに住んでいたルシエツトならばここに何があったかわかるのだろうか？

それが分かればここで何が起きたかもわかるかもしれない、そんな状況確認のための質問であったのだが反応は予想外のものであった。

静かに、静かにルシエツトの目から涙が溢れ出したのだ、思ってもみなかった反応にギョツとするメズ。

何を言えいいのか、まだ周囲に奴が潜んでいる可能性がある事を思えば今のこの行動は悠長にすぎるのでは？　そんな考えがメズの頭の中を巡っては消える。

しかし、そんな思考は混乱させた原因であるルシエツトから否定された。

「大丈夫だよ、奴はきつと死んでる、俺たちはもう急いで逃げる必要はないよ」

「なに？」

そこからポツリポツリとルシエツトの口から、ここが処理場であった事、そこで発生する燃える空気であるメタンガスの事、それらはサルーシャから聞いた事が語られた。

「うーむ、なるほど？　つまり、あの轟音と光はサルーシャ君が引き起こしたものであり、それをもって墮ちた者の打倒を果たした……：：：そう君は予想するのだね？」

俄には信じがたい話ではある、焚き火に屁をして燃え移った馬鹿の話や偶々メズは聞いた事があるから多少は理解できるが、そうでなければ燃える空気など笑い飛ばされる類の話だろう。

なぜ十二歳前後の子供がそんな事を知っているのか？　ましてそれを利用して強敵を撃ち倒した？　それよりかは墮ちた者がここを通った時に偶々火が付き自爆に近い形になったという方が納得できる。

そう、そうでなければあの少年の生死が危ういではないか、まさか自身の身を顧みずに相打ち覚悟でそのような真似をしたなどとは思

たかないのだ。

「きつとそうだよ、あの馬鹿は、いつつも一番大変な所をやりたがるんだから……」

ルシエツトがその手に持っていた物をメズに見せる。

「これは……！」

それを見たメズはルシエツトの推論が正しいことを理解し、自身の祈りが届かなかったと天を呪う。

「ほんと、馬鹿だよなあ、あの、猿顔野郎は。馬鹿すぎて、貶す言葉すら、出てきや、しねえよ……！」

メズに見せたそれ、奇跡的に燃え残ったサルーシヤの服の切れ端を胸に抱え、耐えきれずルシエツトは慟哭する。

自分が今まで持っていた全てが失われ、それらは二度戻らないことを理解させられてしまったからである。

それから周囲を調べて回り堕ちた者がどこにもいない事を確認したため、住民達は三々五々に自分の財産の回収に動いていった。しかし、財産だけあっても住居はもはやどうしようもない。

仕方なしに住民達は頼れる相手、この場合ラテベア教を頼り、獄卒部隊の二人に連れられ近くの都市まで集団で移動していったのだが、都市の守備隊やトップと一悶着が起きる。ラテベア教がそのあたり責任を持って面倒を見るという事で矛を収める事になったが、元ローウエス・テラートウスの住民達への視線は冷たいものであった。

酷い対応だと思うだろうか？ しかし、ある意味当然の対応なのだ。未だこの世界の人類の文化水準は中世暗黒期程度、一つの都市では他の都市からの難民を吸収しきれほどのキャパは持っていないのである。

「なので、大半はラテベア教の管轄する開拓村に行ってもらう事になると思う」

「そっか、やっぱすげえ組織だなラテベア教は。あんなだけの人数を受け止めようと思えるんだからよ」

「……そう思ってくれるならありがたい」

開拓村へ回されると聞かされた住民達の中には、不平不満が口から出る者も明らかに胸にしまっているだけという者も多かっただけに今メズが答えたのは掛け値無しの本音である。

「とはいえそこまで誇れるものでもないのだよ、君らのグループを吸収できたからこそその余裕だからね」

魔法使いは希少な技能だ、それこそ一人いれば開拓の速度が劇的に変わるほどに。安全な飲み水の確保、燃料の節約、重機の代わりにさまざまな作業をこなす事が可能とやれる事は多岐に渡る。

もちろんルシエットのグループに属していた面々がそのまま開拓村に行くわけではないので、開拓できる場所はグループの魔法使いの数よりかは少なくなるがそれでも行くあてのない難民を吸収しきれる程度の数にはなった。

代わりに教育担当者と開拓担当の者達は修羅場に突入中だが……やむを得ざる犠牲である。

「数年後か十数年後には数倍になってかえってくることを考えれば、この程度の労力は喜んで払うべきだそうだよ、偉いさんによればね」  
なお、その偉いさんは孤児達の教育担当になったそうなの、そこまで言うならお前が率先して行動しろよ、という事である。

意外と現場主義の強いラテベア教であった。

「それで、ローグ、いやルシエットと名乗ることにしたんだっとな、ルシエット君はどうするのかね？」

「ああ……俺がどうすつか、か」

この地方のラテベア教が十年後には大きくなっていると確信できる理由を作った立役者だし、ルシエット自身の能力も高く評価されている、望めば殆どの事が叶えられるだろう。

ラテベア教内での栄達は約束されたようなものだったが、ルシエットはそれを望まなかった。

「冒険者になりたい、そう君はいうのかね」

「ああ、俺も、誰も見た事のない景色って奴を見てみたいんだ」

俺も、それが何を指すのかわからないメズではなかった。

サルーシャの件ははつきりと言って痛恨事であった、ラテベア教と

してもメズ自身の公私にたいしても。

ルシエツトが望めば榮達が約束された人材ならば、サルーシャは組織がなんとしても抱えこもうとする人材だ。

ラテベア教としてはお願いだから一国家に仕えるのはやめてほしい、家じやなきや冒険者組合にしてくれと継りつくレベルである。

彼がいれば希少技能であるはずの魔法使いが、『珍しい』から『結構いる』にまで希少度が下げられるのだ、うっかり一国家に属されてその能力を全力で振るわれでもしたら……一都市レベルの国では即呑み込まれる最強国の誕生であろう。

しかし、その未来図でさえ現状と比べればマシであった。

先の未来予想図では国という枠組みがなくなりラテベア教と冒険者組合の存在が消滅するだろう、だが人類全体で見れば躍進の時を迎えることは間違いない。存在意義がその国家に持つていかれるだけで、ある意味役割を果たしきったと言える。

例えその過程において血が多く流されようともまだ人類全体のためだと納得もできよう、翻つて現在はどうか？

そこまでやれるであろう人物はその貴重にすぎる技術を誰にも伝えないまま死亡、人類が地上の覇者となる未来は幻と消えた訳である。

墮ちた者相手でなければ関係者全員、今回の場合はメズと同行した部下は死を望まれかねないほどの事態であった。

なのでサルーシャに一番近かったルシエツトはラテベア教としては是非とも確保したい人物だったが、冒険者組合への所属希望では止める必要はなかった。

二つの組織は交流も活発だし、片方から抜けた人がもう片方に入ることは日常茶飯事だったからだ。

「そうか、ならば私も君について行くこととしよう」  
「はい？」

「なに、今回の件は獄卒部隊の長たる資格なしと言われても仕方ない事態だ、なので私も辞める羽目になっただけさ」

実力があるとはいえルシエツトはまだ十二歳だ、独りにするのは如

何なものか。

誰も見たことない景色を見ることがサルーシャへの吊いだというならば、是非同行させてほしい。

それから、

「女の一人旅を放っておくほど我々は薄情ではないのだよ。以上が君について行く理由だ、なにか質問があるかね？」

「待てええ！　なんで知ってんだコラー！」

「喉の膨らみが一切見えないから疑っていたというのが一つ目、こちらで滞在中も誰とも水浴びを共にした者がいないのが二つ目、三つ目は今の君の態度だな」

「！　カマかけやがったな！」

「簡単にかかる方が悪い。悪人に騙される前でよかったと思いなさい、騙りや騙しは世の中にいくらでもあるのだよ？」

ギリギリと歯噛みをするが自分がどれだけ未熟かは思い知っている、頼りになる大人が同行してくれるならば喜んで受け入れるべきだ。

理性がそう訴え感情が気に食わないと否定を叫ぶ事しばし、

「わかったよ、同行を認めりゃいいんだろ？　だが、旅の目的を決めるのは俺だからな！」

譲れない部分だけを叩きつけて仕方なく同行を認めた。

「うむ、それでいい。私の存在は君が進む道を舗装する材料だと思えばいい、君の望む所へ望んだようにいきなさい」

ルシエットの答えはメズとしては満点の回答だった、なので満足気に頷いて彼女の答えを全肯定する。

「んじゃあ善は急げだ、冒険者について色々教えろよ。ローウエス・テラートウスにはそっちもなかったから俺はろくにしらねえんだよ」

「うむ、ならば今日はその辺りの授業と行こうか。まずは組合の存在目的だが……」

お堅い話が続くことを察してゲンナリするルシエット、近い将来親子にしか見えない冒険者のコンビが見られることだろう。



ところ変わって、ここはとある川のほとり、ローウエス・テラートウスの近くを通る川を支流とする大河の下流に近い場所である。

「ふう、お祖父様も心配症なんですから。この川の上流と言っても遠すぎて誰も知らない場所じゃないですか、そこで何か起きたって言うてもここまで影響は出ないと思いますけどねえ」

そこに水汲みにやって来たのは未だ若い、女の子と女性のちょうど中間辺りの年の子であった。

彼女はいつもここに水汲みに来ていたのだが今朝に限って祖父に止められたのだ、今日は自分が魔法で水を注ぐから川に行かぬようにと。

「魔法で出したお水は味気ないとおっしゃっていたのはお祖父様でしように、どうしてもというなら自分だけで行くななんて無茶まで言い出して……」

一昨日にギツクリ腰で倒れていなければそれに領くこともできたのだが……年寄りの冷や水は辞めてほしい、祖父が孫娘を心配するのと同じくらい孫娘としては祖父が心配なのである。

「お父様とお母様が早くになくなった分だけ心配が募るのでしようけど……？ あら、あれは一体何かしら？」

そして水を汲もうと川縁に近づいた時それに気づいた。

「あれって、もしかや……!?!」

彼女の視線の先、そこに見えたのは川面から突き出す流木に引つかかる人の腕。

「大変！ 早く引き揚げなくちゃ！」

それを魔法で掬い上げて更に驚く。

「嘘、この子私より幼くないかしら？ ……よかった、まだ息がある！」

もう少し頑張つて！ 今助けるから！」

必死になって濡れた服を乾かし、冷えた体を温めたりして人命救助を行う彼女。

その溺れていた少年の顔は猿と見紛うほどであった。